

---

# 魔法少女リリカルなのはX

流れる人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはX

### 【Nコード】

N6477V

### 【作者名】

流れる人

### 【あらすじ】

主人公、上森 優斗は転生者である。自分勝手と自称する彼は思いが向かうままに手を差し伸べていた。

そして、彼の介入によって変わる物語はどう紡がれていくのか？

初めの物語。それは不屈の心を持つ少女と運命を背負わされた少女が織りなす物語。

彼はどのような変化を与えるのか……

月と星と運命の物語。

「魔法少女リリカルなのはX」 始まります。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿になります。

この作品が皆様に楽しんでいただければ嬉しいです。

## プロローグ

紆余曲折あつて生まれ変わつて早11年。  
色々な事があつた。

転生した事実を受け入れて気分が落ち着くまでだいぶ時間を要しました。

そりゃそうですね、そんなこと空想上の物だったんだから。  
2度目の保育園に小学校。そこら辺はまだ平凡な日常だった。

ふと、夜空を見上げる。

あれから1年過ぎた。

ティーナやニコルと出合い、魔法と関わり七耀の鍵を巡つて戦つてフェイスの野望を打ち破つた。

「賢者の石事件」と管理局で名付けられた事件に巻き込まれて。

まさか、“本編”が始まる前に魔法に関わる事になるとは思わなかったけど。

というか、この事件がきっかけでここが「魔法少女リリカルなのは」の世界だとわかつたのだけ。

詳しい話は別の機会に話すとしよう。

事件解決後、介入しようにも生まれ故郷である札幌からどうやって介入するか困つたが、半年前に父さんの会社の都合で引越す事になる。

まるで運命に手招きされているかのよう。

それからというもの、今でもミッドチルダにいるティーナや札幌にいるニコルと連絡を取り合っている。

何かがあれば飛んでいくので比較的頻繁に会つて。かけがいのな

い友人だ。

アレンさんは執務管の仕事に追われてあっちこっち行ってるようだ。

そして俺は今、海鳴にいる。

ビシリ、という感覚を感じる。

次元の壁を越えて何か来る。

願いを叶える魔力の結晶体のような宝石、ジュエルシード。

「セイヴァーソウル、セットアップ！」

『Yes, Master. Stand by, Ready, Set Up』

蒼銀の魔力光ににつつまれる。身に纏うは白い装甲。背中にはL字型に配置されたりフレクター。斜めに背負った大型の砲身。額には角度の違うV字の角を重ねた飾りのあるヘッドギア。

前世に見たアニメ「機動新世紀ガンダムX」に出てくるMS、GX-9900ガンダムXをモデルになっている。

モビルスーツ少女ならぬモビルスーツ少年と言ったところか。

俺のバリアジャケットを纏い終えた次の瞬間、空間を割っていくつもの光の筋が町中に降り注ぐ。

そのうちの一つ目指して飛ぶ。

他に何個か追跡をかけながら青い菱形の石を受け止める。

「セイヴァーソウル、封印するよ」

『Sealing Mode, set up. Stand by, Ready』

「ジュエルシード シリアル??、封印」

『Sealing』

胸の装甲にあるデバイスのコアに吸い込まれるジュエルシード。  
まず一つ。

そして追跡に成功した残り二つも回収に向かう。

ジュエルシードが散らばる時、その一つを追って行った緑の魔力光。  
多分あれがユーノ・スクライアだろう。

あっちは彼に任せよう。

と、いうより探査系の魔法にあまり向いていないので追跡をジュエルシード優先にしたため、見失ってしまったのだ。

サポート関係ほとんど向いてなかったからなあ………。

そうして、今晚回収したジュエルシードの数は3つ。

シリアル？。シリアル？？。シリアル？？。

「さてと、後はユーノが動くのを待つしかないか。

「魔法少女リリカルなのは」始まります。って感じかな？」

見上げる空は星が綺麗で見渡す街は優しくて。

ここが戦場になる、と思おうと辛くなった。

半年程度しか過ごしてないけど、ここは良い所だ。穏やかで温かで。

「なあ、セイヴァーソウル。また力を貸してくれるか？」

『Yes, of course. My destiny is  
with you.』

「ありがとう」

相棒が答えてくれる。ティーナとの絆の証であるアーマードデバイス。  
ス。

さあ、気を引き締めていこう。

街に被害が出ないように、人が傷つかないでいられるように。  
そう決意した俺は踵を返して我が家に帰った。

明日も学校だ。

## エピソード1「この手に魔法を！」

夜の帳が深くなり月がよく映える夜。俺は月見をしながら自宅の屋根に立っていた。

《……………誰か……………僕のを聞いて……………力を貸して……………魔法の……………力を……………》

頭に直接聞こえてきた少年の声。街中に無差別で発信した念話。ついに始まったか。

それにしても随分と遠いな、ユーノのいる動物病院は。俺はバリアジャケットを纏うと念話の発信源に向かった。

私は今混乱の中にいます。

深夜の事です。助けて、と男の子の声が聞こえたからその声を追って外に飛び出したら、

ついた先は、昨日公園で怪我をしたフェレットを預かってもらった動物病院で。

しかも、そのフェレットが外に飛び出していたと思ったら変なドロドロした何かに襲われてて。

さらにそのフェレットが人の言葉を喋れて、探し物をしたいから力を貸してほしい。

魔法の資質があるからその力を貸してほしいとか。

もう、何がなんだかわかんないよー！！

そうしたら、さっきのナニかが空から落ちてきて、とっさに電柱の陰に隠れました。

「お礼は必ずしますから！」

「お礼とかそんなのしてる場合じゃないでしょー!？」

電柱の陰からさっき大きい音を立てて落ちてきたナニかを見ます。長いひげが2本生えたなにかユラユラしてて黒い怪物に見えます。

「一体どうしたらいいの・・・!？」

「これを！」

フレット君が口にくわえて差し出してきたのは首にかけていた赤い宝石の玉でした。

私は促されるままそれを左手で受け取りました。

「あたたかい・・・」

「それを手に、目を閉じて心を澄まして、僕の言う通りに繰り返して」

私は赤い宝石の玉をそっと握り、覚悟をきめました。

「いい?　いくよ!」

「うん!」

フレット君の言う通りに目を閉じ心を澄ませました。

「我、使命を受けしものなり」

「・・・我、指名を受けしものなり」

「契約の下、その力を解き放て」



「大丈夫？ ケガは無い？」

「あ……あなた……あなたは……？」

「詳しい話は後にしよう。俺が時間を稼ぐからその内に君のやるべき事を」

「誰だか分かりませんが、ありがとうございます！」

フェレット君がその人にお礼を言いました。

「もう一度、最初から起動の呪文を！」

「う、うん！」

目を閉じ心を澄ますとさっきの言葉が自然と浮かんできました。

「我、使命を受けしものなり。

契約の下、その力を解き放て。

風は空に、星は天に。

不屈の心は、この胸に！」

この手に魔法を！ レイジングハート！ セットアップ！」

『Stand by, Ready, Set up』

瞬間、天に掲げた宝石からすごい光が放たれました。

その桃色の光は雲を貫き、天に届くほどでした。

「なあ！？ ふええ……！！？」

「なんて魔力だ……！！！」

こんなこと続きだけどあまりの事で状況を把握できない私はうろたえるばかりでした。

その時、フェレット君が私の前に構えてアドバイスをくれました。

「落ち着いて、イメージして！ 君の魔法を制御する杖の形を！  
そして、君の身を守る強い衣服の姿を！」

そんなこと突然言われても困るよー！  
と内心おろおろしてましたが杖はともかく服のイメージは湧きま  
した。

「とりあえずこれで！」

私を包んだ光が消えると、私を通う学校の制服に似た白い服と金の  
三日月に赤い宝玉の付いた白と桃色の杖を持っていました。

「成功だ！」

「ふえええ！？ どうなっちゃったの！？」

魔法に愛されたと言わんばかりの魔力量。正直うらやましいです。  
と言っても取って置きなら俺にもあるのだが、一人じゃ使えないん  
だよな。

それはともかく、彼女の変身し終わるまで時間は稼いだし思念体に  
ダメージも与えた。

後は封印するだけだ。

「後は封印するだけだ、落ち着いて」

「ふえ！？ あ、えっと、封印ってどうやるの？」

「えっと、僕たちの魔法はプログラムと呼ばれる術式を持って構成

されてて………」

相手が再生中だからってそんな難解な説明が小学生に分かる訳がないだろう。

とくになのはは頭で覚えるんじゃないなくて体で覚えるタイプだからなおさらだ。

「君！ 大丈夫だ安心して！」

心を落ち着かせるんだ、そうすれば呪文が心の中に浮かんでくる。それを唱えるんだ」

「わ、わかったの！」

なのははレイジングハートを構えて目を瞑る。

その間にも思念体は再生しているので、思念体にシールドビームライフルで攻撃しておく。

なのはは、目を開けると杖を掲げる。

「リリカル・マジカル

封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！

ジュエルシード！封印！」

『Sealing mode・Set up』

なのははの声でレイジングハートがシーリングモードに変形する。

そして、桜色の光の帯が思念体を締め上げる。

『Stand by・Ready』

「ジュエルシード シリアル????!封印!!」

『Sealing』

光の帯が思念体を貫き、消滅させていく。

そして、青い菱形の宝石であるジュエルシードだけが残った。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

ユーノにそう言われ、なのははレイジングハートを翳すと、ジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれる。

すると、なのはのバリアジャケットが解除され、レイジングハートも待機状態になる。

「あれ？ 終わったの？」

なのはは、実感が湧かないのか呆けた声を漏らす。

「はい……貴方のお陰で……ありがとうございます……」

ユーノはそこまで言って、力尽きて気絶する。

それを確認した俺も、バリアジャケットを解除した。

そこに聞いた事のある音が聞こえてくる。

パトカーのサイレンだ。

「も、もしあしたら、私ここいいたら大変あれなのでは………  
!？」

パトカーのサイレンが聞こえたきてあたふたしはじめるなのは。

「まあ、こんな時間にこんな惨状にいれば職務質問は間違いないよね」

「ふえええええええ!？ どうしよう!？」

「ここにいるのはまずい、移動しよう。君は………立てそうにないね」



## エピソード2「君には選択肢がある」

所変わって動物病院から離れた小さな公園に来ている。

なのはをベンチに下ろし、少し待つよう伝えて自動販売機でオレンジジュースを買って戻ってきて、一本をなのはに手渡し一息つくように行った。

おずおずと受け取ったなのはは申し訳なさそうな顔をしてちびちびと飲んで深呼吸した。

「落ち着いた？」

「は、はい……………」

なのはの目にはまだ困惑のいろがありありと見えた。

俺も最初、魔法と出合った時もこんな感じだったなあ、と懐かしんでもいられない。

「まずは、自己紹介からだね。初めまして、俺の名前は上森 優斗。よろしくね」

「わ、私は高町 なのは。こちらこそよろしくお願ひします」

「じゃあ、なんはちゃん、って呼ばせてもらうね。俺の事も好きに呼んでいいから」

戸惑いがちなながらもしつかりと自己紹介するのは。

やっぱり、芯の強い子なんだな。

他の人なら突然、訳も分からい状況放り込まれたら、当事者に質問攻めとかするしな。

現に俺がそうだったしな……………。

「あの、えっと、優斗、くん？」

「なに？　なのはちゃん」

なのはが口を開いた。

ここから先はなのは質問タイムだろう。

「さっきのあれは、なんだったの？」

「あれは何らかの残留会思念が強力な力の影響を受けて実体化したもの、って言ってもむずかしいか。簡単に言ったらすごい力で実体をもったお化けみたいなものかな？」

「お、おばけ！？」

「正しく無いんだろうけどね。そんな解釈で良いと思う」

まあアニメ見たことないし、詳しい設定とか分からないから、経験則になるんだけどあながち間違いでもないだろうと思う。

「じゃあ、さっきの青い石は？」

「あれはジュエルシードって名前みたいだね。ロストロギアの種類さ」

「ロストロギア？」

「こことは違う別の失われた世界の遺産。個々が強力な力を持っているのが殆どだ。」

一般的に別世界と言ったら頭がおかしい人認定を受けかねないが、なのはが純真な事と先ほどの事を考えるとそういうファンタジーな事もすんなり受け入れてくれているようだ。

「なんで優斗くんはそういう事を詳しいの？」

「それは俺が魔法使いだからさ。正しくは魔導師だけどね」

「魔法使い！？」

「多分、なのはちゃんが思っているような魔法じゃなけどね。」

ミッドチルダって言うことは違う世界で発達したものだ。幻想的な魔法というより科学的な魔法って感じかな。

あ、ちなみに俺は真正銘こっちの世界出身だから」

一言に魔法と言っても世界観によってその定義が違うからな。

管理世界だと魔法はある程度統一規格になってると思うけど、管理外世界や未発見世界の魔法は色々な形になっていると思う。

「さつき、私、変身しちゃってみたいだったんだけど、あれは？」

「あれはバリアジャケットって言って魔力で編まれた防護服さ。バリアジャケットの強さはその人の魔力に比例するから見た目がそのまんま防御力って訳でもないのさ。

なのはちゃんみたいな衣服のバリアジャケットがほとんどだよ」

「そっいえば優斗くんのバリアジャケットってロボットみたいだったけど……」

「俺のはアーマードデバイスって言ってバリアジャケットととしてデバイスを纏うちょっと特殊なやつなんだ。それ以外の機能ならなのはちゃんの持つてるインテリジェントデバイスと同じだよ」

俺のデバイス、セイヴァーソウルはインテリジェントデバイスでもありアーマードデバイスでもあるちょっと特殊なものだ。手持ちのデバイスと違ってデバイスを手放すという状況が無いのが利点だ。まだ実験段階らしく既存の物はこの試作品であるセイヴァーソウルのみらしい。

「あの……デバイスってなんですか？」

「デバイスは魔法使いにとつての杖って解釈でいいよ。魔法を使う時の補助や補完をしてくれるんだ。

形は多種多様で剣もあれば銃もあり、槍や斧。珍しいのでは盾の形のデバイスもあるよ。」

普段は携帯に便利な待機状態、ペンダントだったりカードだったりバッチだったり、小物の形になるよ」

「じゃあ、この赤い宝石はさっきの杖の待機状態なの？」

「うん、そうだよ。なのはちゃんは呑み込みが早いね、すごいよ」

「ふえ！？ え、えへへ、ありがとうございます」

はにかみながら照れるなのは。こちら辺はやっぱり年相応の少女だな。

「ん……あれ……ここは？」

「ご、ごめんね、起しちゃった？」

「気がついたようだね」

ここで重要人物の少年、今はイタチのような小動物形態のユーノが目覚めました。

「さて、ここで詳しい事情を聴きたいけど、まずは自己紹介だね。

俺は上森 優斗。こつちの世界出の魔導師さ。」

「はじめまして、私は高町 なのは。え、えつとケガ……

大丈夫？」

「はい、お陰さまで大丈夫です。僕はユーノ・スクライア。ユーノが名前でスクライアが部族名です」

立ち上がりぺこりとお辞儀した後自己紹介するユーノ。

さて、物語の核心、ジュエルシードについて聞こうか。

「さっきなのはちゃんが封印したロストロギア、ジュエルシードの話をお聞かせしてもらおうよ」

もちろん回収は手伝うよ。あんなモノが街で暴れられてらたまったものじゃないしね」

「はい、わかりました」

ジュエルシードとは何か？

「ジュエルシードは“願いを叶える宝石”です。実態は次元干渉型エネルギー結晶体でとんでもないくらいのエネルギーを秘めています。

ですが、力の発言が不安定でさつきみたいに単体で暴走して仕様者を求めて周りに飢餓を加えてしまいます。たまたま見つけた人や動物が誤って使用してしまえばそれを取り込んで暴走してしまう事もある。とても危険なものなんです。」

何故、この世界にジュエルシードが？

「発掘が終わって輸送してたら事故が起きて………ううん、襲われたんだと思う。」

急いで格納庫に向かったらすでにジュエルシードを納めていたケースが船外に飛び出そうとしていて。

無我夢中だったよ、こっちに着いた時になんとか一つだけ回収できたんだ。他はどこにあるのか見当もつかないだ。ごめんなさい、僕が不甲斐ないばかりに………」

誰に襲われたのか？

「わかりません。飛び散ってしまったジュエルシードを追跡するのでもいいっぱいだったんです。輸送船が無事だといいいんですが………」

ジュエルシードは全部で何個？

「全部で21個です。それぞれにシリアルナンバーがあつて、さっき封印できたのは21番のジュエルシードです。残りはこの街にあるのは確実だと思います。」

「そんな危ないものがこの街に……」

事情聞いて沈黙する俺たちの間になのは呟きが通る。

ここは重要な場所だ。特になのはにとって。

「俺はジュエルシード集めに全面的に協力するよ。輸送船を襲撃した犯人もそのうちこの世界に追ってくるだろうし、出来るだけ早く回収するべきだ。」

今のユーノ一人じゃ、集めるのは難しいだろうからね、拒否は認めないよ？」

「……すみません。ご迷惑をおかけしますがよろしく願いします」

俺の申し出に申し訳なさそうに礼をするユーノ。  
その時。

「あ、あの」

「なのはちゃん」

なのはが何か言いだそうとしたが、俺はそれをかき消すように彼女の名を呼んだ。

真剣になのはの目を見据えて言葉を紡ぐ。

「君には選択肢がある。」

今日の事は忘れてこのまま平和に暮らす日常が俺たちと一緒にジユエルシード集めをする非日常。

前者は特にお薦めだ、今までように過ごせばいい。後者は危険だ、君みたいな子にはお薦めできない。

魔法の世界に飛び込むという事は常に命の危険にさらされるという事だ。非殺傷設定というものもあるが犯罪者がそれを使っているとも思えない。」

「でも……」

「なのはちゃんは魔法に愛されていると言っても良いくらいの才能がある。俺自身、羨ましいと思うくらいの魔力量もある。成長したらきつと沢山の人を救う事のできる魔導師になれるだろう」

俺の言葉になのはのは戸惑いながらも少しほころんだ。

「ただこれから苦言を呈さなければいけない。」

「だけど、君は優しい子だ。ユーノには悪いけど誰とも知らない怪しい声を聞いてここまで来たんだ。その優しさがきつと君自身の危険を招く。君が傷ついたら悲しむ人がいるはずだ」

彼女は優しい。そして何事も自分一人で解決しようと抱え込んでしまっただけだ。それだ。

それが迷いを生み隙を作る。それは命を失いかねない危険な事だ。

「今日はもう遅い。今すぐ答えを出さなくてもいい。家に帰って、ゆっくり考えるんだ。」

ユーノは俺が預かるよ、親にこの事を話さないといけないし。」

「え！？ 優斗くんのお父さんとお母さんは優斗くんが魔法使いだつて知ってるの!？」

「もちろん。でも最初は魔導師になるの反対されたよ、危険な事はするなつて。それでも魔法の世界に飛び込んだのは、力になりたい

「思ったし出来る事をしたいと思ったから」

なのはの質問に答える。

「そう、なんだ・・・」

「正直に言つと、なのはちゃんの協力はほしい。俺は攻撃、特に射撃や砲撃魔法は得意だけど拘束や探知や治療なんかのサポート系の魔法はてんでダメなんだ。

ジュエルシードが暴走すればすぐに感知できるけど、それじゃあ後手に回るし街や人に被害が出るし戦闘は避けられない。

なのはちゃんがサポートしてくれるだけでもかなり早く回収できると思うし、被害も小さくて済むかも知れない」

「なら」

「誰かに言われたから、なんて緩い理由で戦っちゃいけない。君自身がどうしたいか。戦う覚悟はできるのか。それをよく考えてほしい。」

脅しの意味も兼ねて結構大げさに言つたけど、成り行きに流されて戦うつて事はそれ自体が危険なんだ。

おとぎ話みたいな魔法や奇跡はないんだ。

「怖がらせちゃつてごめんね。でも、なのはちゃんにとって、今日の事は大事な事だから。

ジュエルシードが暴走しても街や人に被害が出ないようになんとかしてみせるよ。大丈夫、俺ってそこそこ強いからさ」

俺は優しく微笑みながらなのはちゃんの頭をなでた。

なのはちゃんはうつむいたままされるがままだったけど、ゆっくりと顔おあげて俺を見た。

「よく……考えてみます。」  
「うん。がんばってね」

その後、なのはに念話の仕方を教え、答えが出たら連絡するようにした。

軽くレクチャーしただけで念話を覚えるあたり才能の片鱗が伺える。しかも試しにと思ってデバイスの補助なしでやってみたら出来ちゃったときたものだ。

ははは、まさしく天才だね。と乾いた笑いしかできなかったよ。そして俺たちはなのはを家の近くに送り届けてから帰宅したのであった。

余談だが、高町宅の玄関付近に人の気配があったのだが、なのはちゃんと切り抜けられたのだろうか？

### エピソード3「私のできる事がしたいの!」

翌朝。

「おはよー、母さん、父さん」

「おはよう、優斗」

「おはよう、優斗。朝ごはん何がいい？」

「んつとね、チョコパン」

「はいはい」

どこにでもある普通の朝の風景。

母さん、上森 月夜、専業主婦。父さん、上森 優介、？片倉重工  
営業部所属。

母さんが俺の朝食を作ってくれて、父さんは会社に行く身支度を  
して。

テレビを見ながら他愛のない話をするんだけど、今日は別に話す事  
がある。

「あのさ」

「なんだ？ 優斗」

「俺。この街に飛び散ったロストログア探す事にしたんだ」

父さんの返しにさらりと話す俺。

「あら？ そうなの？」

「そうか」

「……………つて、え？」

そろって疑問符を浮かべる両親。息びったり。

「どういうことか、説明しなさい。優斗」

「また魔法関係？ えっと、管理局、だったかしら。そこに任せるわけにはいかないの？」

そこで昨日あった事を説明し、その際に小動物状態のユーノを紹介する。

管理局、というよりアレンさんにはすでに連絡を入れたが、どこも動けないらしくこっちに派遣できるようにするには1週間くらいかかる事も話した。

ちなみにアレンさんは執務管の中じゃあエースって呼ばれるほどの実力だ。

そのためいっつも任務ばかりでお休みがもらえないらしい。

「その間だけだよ。大丈夫、うまくやるよ。これでも魔導師としてはそこそこやれる自信はあるんだよ？」

「だが、息子が危ない事をすると聞いて心配しないほど私達は冷徹では無いぞ、優斗」

「ありがとう、父さん。けどほっとくと危ないんだ。だから、さ  
そこで沈黙がこの場を支配する。

やっぱり、まだ、完全には納得はしてくれてないんだな。親心が身にしみます。

「……………そうか、わかった。あんまり私達に心配かけてくれるな」

「ありがとう、父さん……………」

渋々といった感じだが許してくれた父さん。

無事、許可を得た事だし放課後から探索開始だ。

「それにしても、ユーノ君？ 災難だったわね」

「いえ、僕の方こそ優斗にご迷惑おかけして……」

「あの子が言いだしたんでしょ？ なら思う存分迷惑かけなさい、優斗はそういう子だから」

「そんなんじゃないよ。ただ我儘を押しつけてるだけ。自分勝手なんだよ、俺は」

母さんとユーノの会話に思わず口をはさむ。

俺は聖人君子のようなお人よしじゃあない。ただ、ほっとけないだけだ。

「ね？」

「はは、そうみたいですな」

と笑いあう母さんとユーノ。

母さん、何が「ね？」なんだろうか。分からん。

その後、朝食を済まし身支度を終え玄関に。

出るときは父さんも一緒だ。ただ、父さんは車で俺は徒歩なんだけど。

「ユーノ、色々あるだろうからその時は念話で」

「わかったよ、優斗」

「よし。それじゃあ、行ってきます。」

「行ってくるよ、月夜」

「はい、行ってらっしゃい」

俺と父さんは母さんに告げて玄関を出た。

今はユーノがいるけど、これが俺の日常。守るべき大切な場所だ。

あれからずっと考えています。

私はどうするべきなのでしょう？

優斗くんは言っていました。

私には魔法使いの才能がある、成長したら沢山の人を救う事が出来るようになる、って。

手伝ってくれたらジュエルシードって言う危ないものがすぐ集められる、って。

でも、魔法の世界は危ない、って。私がケガをしたらお父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもアリサちゃんやすずかちゃんも心配する。

もし私が大ケガしちゃって昔のお父さんみたいになったら、みんな泣いちゃうと思う。

そんなの絶対いやだよ……………。

「……………のは！　なのは！」

「にゃあ!？」

突然の声に驚きました。

顔を上げるとそこにはアリサちゃんとすずかちゃんがいました。

「おはよう、なのはちゃん。」

「おはよう、なのは」

「お、おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん」

朝のあいさつを交わす私たち。

考え事をしていて、アリスちゃんの声に気がつかなかったみたいですよ。

「ずっとボーっとしてたけど、どうかしたの？」

「なのはちゃん、元気ないみたいだけど大丈夫？」

「う、うん。大丈夫。ちよっと考え事してただけだよ」

「……何かあるんだったら私たちにちゃんと言いなさいよ？」

「なんでも協力するからね」

「ありがとう。アリスちゃん、すずかちゃん。

でも、大丈夫だよ。これは私が考えなきゃいけない問題だから……」

ダメだなあ。もう心配かけちゃってるよ、私。

「そ、あんまり根を詰めるんじゃないわよ？ それでさ、昨夜の話聞いた？」

「ふえ？ 昨夜って？」

「昨日行った病院で、車か何かの事故があつたらしくて壁が壊れちゃったんだって」

内心、ギクリとしました。

だって昨夜はそこにいたわけで、しかも原因も知ってるし。

「あのフェレットが大丈夫か心配で……」

これは、どう話せばいいの？！

「あの、えーとね、その件は、その……」

とその時です。

「なのはちゃん、上級生のお客さんだよー」

教室の入り口の方から私を呼ぶ声が聞こえました。

私にお客さん？ しかも上級生なの！？

まったく、身に覚えがありません。いったい誰なのかな？

教室の入り口を見るとそこに見知ったの人がいました。

「ゆ、優斗くん！？」

「おはよう、なのはちゃん」

そこにいたのは昨日知り合ったばかりの男子、優斗くんでした。

優斗くんがなんで！？ っていうかここの生徒だったの！？ しかも上級生！？

とりあえずみんなで教室の入り口に向かいます。

「ねえ、なのは。誰？」

「先輩、みたいですけど」

「あ、えっと、その、ふえええええ！？」

「まあ、とりあえず落ち着こうか、なのはちゃん」

優斗くんの言葉に従い、深呼吸して気分を落ち着かせます。

落ち着いたところで優斗くんに問いかけます。

「あ、えっと、優斗くん、どうしたの？」

「ん、昨日のフェレットの件でちょっと」

「昨日のフェレット？」

その言葉にアリサちゃんが反応しました。

「えっと、なのはちゃんの友達かな？」

「はい、そうです」

「そうなんだ。初めまして、五年の上森 優斗だよ。よろしくね」

「アリサ・バニングスよ」

「えっと、月村 すすかです」

と自己紹介しあう優斗くん、アリサちゃん、すすかちゃん。  
そして、私そっちのけで話の本題に入って行きました。

「ところであんた誰？ なんで昨日私たちがフェレットを拾った事を知ってるの？」

「ちよっと、アリサちゃん！？ 上級生に失礼だよ？」

「はは、元気な子だねアリサちゃんは」

なんだか優斗くん孫を見るお爺ちゃんのような目をしてるの。  
そう思っていると、優斗くんから念話が届きました。

昨日の件で困ってるんじゃないかと思って助けにきたよ

「フェレットの件だけど、昨日、月見しながら散歩してて公園にいるなのはちゃんを見つけてね。

困っていたようだから事情を聞いたんだ。そしたら、逃げ出していたフェレットとたまたま遭遇したはいいものの病院に返そうにも出来ないし両親が喫茶店を営んでいるから動物とか面倒見れなさそうだし。だから俺の方で預かったんだよ」

「本当なの？ なのは」

「え、あう、うん。そうだよ」

まるで本当にあった事のように話す優斗くん。

二人に嘘ついちゃってなんだか悪い気がするの……。

「心配なら家に見に来る？」

「そうね、さっそく今日にでもお邪魔させてもらっわ。いいわね？」

「なのは、すずか」

「大丈夫なの」

「う、うん。わかった」

「じゃあ、そういう事で。放課後、昇降口で待ってるよ」

そう言っつて優斗くんは自分の教室に向かって行きました。

なんとか丸く収まりそうです。

そして時間は進み、授業中でも私は考えていました。

その時、思いついてしまったのです。

もし、昨日みたいなお化けが人がいつぱいいるところに現れたら？

もし、そこにアリサちゃんやすずかちゃんがいたら？

怖いのも痛いのもいやだよ。

だけど、私の大切な人たちが怖い思いをしたり痛い思いをするのはもつといやなの！

お父さんが言っつてました。困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、その時は迷っっちゃいけないって。

そうなんだ。簡単なことだったんだ。

なんで今まで忘れていたんだろう。

ユ一ノ君が困っつてる。私には魔法使いになれる力がある。それに、優斗くんが助けてくれる。

なら、もう迷わない。

私は優斗くんに念話を始めました。

ねえ、優斗くん、ユーノくん  
ん？ 何かな、なのはちゃん  
どうしたの、なのは  
私、決めたよ。答えが出たの  
そう、なんだ

私は迷わない。私のできる事がしたいの！ だから、ジュエルシ  
ード探し、手伝うよ！

………そっか、わかったよ。それがなのはちゃんが出した  
答えなんだね？

うん、これが答えなの  
ありがとう、なのは

じゃあ、今日からなのはちゃんが一人前の魔導師になれるように  
ビシバシ鍛えてあげるね

にゃあああ！？ お、お手柔らかにお願いします、なの………

怖いけど、私は魔法の世界に飛び込みます。

放課後、私とアリサちゃん、すずかちゃんの三人は昇降口で  
待っていてくれた優斗くんと合流しました。

「来たね、じゃあ行こうか？」

それから歩いて10分かかるくらいで優斗くんの家につきました。

「あら、案外近いのね」

と、アリサちゃん。

そのまま促されて玄関へ入っていきます。

「母さん、ただいまー」  
「お帰りなさい、優斗」

ばたばたとスリッパの音を立てながら長い黒髪が特徴的な綺麗な女性  
性が歩いてきました。

これが優斗くんのお母さん？ 私のお母さんと一緒ですごく若く見  
えます。

「つて、あら？ あらあらまあまあ、すごく可愛らしいお客さんね。  
優斗の彼女かしら？」

「なっ！？ ちょ、違つよ母さん。ユーノの拾い主たちだよ」

「ユーノ君の？ ふーん、そう？」

優斗くんのお母さんは私たちを見た後もう一度優斗くんを見ました。  
優斗くんは首を左右に振つて私たちを見ました。

なにかの合図のようなものでしょうか？

「ツインテールの子が高町なのはちゃん。金髪の子がアリサ・バ  
ニングスちゃん。最後が月村 すすかちゃん。」

「初めまして、高町 なのはです」

「アリサ・バニングスです」

「月村 すすかです」

自己紹介が終わった後、私たちはリビングに通されました。

その中央にあるテーブルの上にちょこんと座ったユーノくんがい  
ました。

「ただいま、ユーノ」

「きゅーー！」

アリサちゃんとすずかちゃんの前だからフェレットらしく？お返事  
してます。

「そついえばユーノって？」

「ああ、あのフェレットの事だよ。いつまでも名無しだと不便だからね。」

アリサちゃんの問いに答える優斗くん。

本当は名付けたんじゃないかと名乗ってもらったんだけど、言えないよな。

そして、元気そうにしているユーノくんを見て安心して、アリサちゃんとすずかちゃんはユーノくと遊びはじめました。さすがに動き回らせるのは出来ないので軽くじゃれる感じですけど。

それを見かねた視線で見ている優斗くん。  
年上でお兄さんだけど、なんだか大人の雰囲気を感じました。

「どうやらユーノは飼いフェレットじゃないみたいだから、怪我が治って里親が見つかるまで家で預かるうと思っただけど、どうかな？」

「私は別にいいと思います」

「私もいいと思うわ。悪いようにされているわけじゃないしね」

「うん、賛成なの」

優斗くんの問いにすずかちゃん、アリサちゃん、私の順に答えました。

私と優斗くんは優斗くんのお母さんが出してくれたジュースとお菓子を食べながら一息つきました。

これで、一段落ついた感じなのかな？

その時です。

ブオンって感じの強い違和感を感じました。

「「!?!」」

優斗さんとユーノくんもこの違和感を感じたようです。

私は二人に念話で話しかけました。

ねえ、今の感じって………?

間違いないね

新しいジュエルシードが発動している！ 反応は近いよ！

私の心の声に優斗くん、ユーノくと応えてくれました。

どうすれば!?!?

決まってるよ、封印しに行くよ！

そう言った優斗くんが立ち上がりました。

「どうしたの優斗?」

「母さん、急用ができた」

「急用って、あんた、どこ行くのよ?」

「呼んどいてごめん、アリサちゃん、すずかちゃん。俺、出かけてくる!」

突然の優斗くんの発言に困った顔をするアリサちゃんとすずかちゃん。

そして優斗くんは私を見ます。

「一緒に行くか？　なのはちゃん」  
「うん！」

迷いはありませんでした。私は立ち上がります。

「ちょっと、なのは！？」

「なのはちゃん！？」

「ごめん、アリサちゃん、すずかちゃん。すぐ戻ってくるから！」

たぶん、初めてになる魔法での戦い。

怖いです。でも放っておけないの！

「ユーノ、レイジングハートをなのはに！」

「きゅ、きゅう！」

優斗くんの言葉にユーノくんが首に下げている赤い宝石を私に投げ渡しました。

私はそれを受けとします。

「行くよ、なのはちゃん！」

「うん！」

急がなくてはなりません。私と優斗くんはそのまま飛び出して行きました。

昨夜みたいに怖がるだけじゃいけない。そう、決意しました。

#### エピソード4「私たちはなのはを信じてる」

「一体どうしたってのよ、なのは」

「うん、でもなんかすっごく真剣な顔してたね、なのはちゃん」

息子が置いて行ったユ一ノ君の拾い主の二人。

突然の事で、訳が分からないって顔してる。

仕方ないわよね。

私も言ってもらえるまで心配で仕方がなかったもの。

「ちょっとおばさんとお話ししようかしら？　アリサちゃん、すずかちゃん」

「え？」

「あの……」

ちょっと困惑気味だけど、落ち着かせるようにゆっくりと話し出す。

「優斗は今、重要で必要だけど人には言えなくて危ない事に関わってるの。なのはちゃんがついて行ったって事は彼女もそうなのね」

「ッ！？　じゃあ、早くなのはを連れ返さないと！！」

私の言葉にアリサちゃんが声を荒げた。

なのはちゃんの事がとっても大事なのね。

「でも、ついて行くなって事はなのはちゃんは自分で考えて、付いて行ったと思うの、違う？」

「そうですね、無理強いされていたのなら、なのはちゃんはあんな真剣な顔をしてないと思う」

私の問いに答えたのすずかちゃんでした。  
そう、やっぱりそういう子なのね。

「優斗くんのお母さんは、優斗くんが何をやっているか知っているんですか？」

「なのはまで巻き込んで何やってるの！？ あいつー！」

アリサちゃんはちょっと感情的な子なのね、でも、とっても友達思いな子。

すずかちゃんっはちゃんと周りが見れても物静かだけど、目の奥で心が震えているのが分かる。

本当にいい子たちなのね。

「ええ、知っているわ」

「じゃあ、教えてください！」

「それはダメよ」

「どうしてですか？」

私の答えにくっつかかるアリサちゃんとすずかちゃん。

私は、諭すように優しく答える。

「この問題はなのはちゃんとあなた達の問題だもの。なのはちゃんが話さないって事はそうする必要があるって事にならない？」

「それは………そうですね」

「だけど、私たちは！」

「お願い、お願いだから信じてあげて。きっとなのはちゃんから話してくれる日が来るから。それまで、ね。待っててあげて頂戴」

私がそう言うと二人はしゅんとしてしまった。

だけど、今は信じてあげることしかできないから、分かってほしい

の。

「優斗の時もそうだったわ。一年くらい前にね、同じような事があったの。」

夜遅く出かけたり、怪我して帰ってきたり、親だもの心配でならなかったわ。

問い詰めても、話してくれなくて。ただ、話すけど今じゃないから待ってほしい、の一点張り。でもちゃんと話してくれたわ。だから、ね。なのはちゃんの事、信じてあげて？」

「よし、いいだ」

俺となのは俺の家の近くの材木置場の物陰にいる。

ここなら誰かに見られる心配はない。

俺は服の中に入れて隠してある首飾り、六角柱の深緑の宝石を取り出す。

「それが優斗くんのか？」

「うん、そうだよ」

これが俺のデバイス、セイヴァーソウルの待機状態。

俺はそれを握り、告げる。

「セイヴァーソウル！ セットアップ！」

『Stand by, Ready, set up』

一瞬の光につつまれた後、俺はバリアジャケットを纏い終えていた。

「さあ、なのはちゃんも」

「え、えっと、どうすればいいの？」

「とりあえず俺のマネをしてみてください」

おろおろしながらも赤い丸い宝玉、レイジングハートを取り出したが、すぐにキツと意識を集中して唱えた。

「レイジングハート！ セットアップ！」

『Stand by, Ready, set up』

桃色の光に包まれたなのは。そしてその光が消えた時、聖祥大付属小学校の制服をベースにした白と青のバリアジャケット身に纏い金の三日月に赤い宝玉の付いた杖を持った魔法少女へと変身を遂げていた。

「できた！」

「うん、できたね」

普通、こんなにすんなり行かないんだけどな………  
と思いつつ次の段階へ。

「急ぐから空から行こう」

「えええええ！？ 空！？」

「大丈夫、なのはちゃんのデバイスはインテリジェントデバイスと言って魔法のプログラム構成をサポートしてくれるし、状況に合わせて自動発動もするから。」

今は、空を飛ばたいとレイジングハートに念じてみて」

「う、うん。やってみるの！」

と、レイジングハートを掲げ集中するなのは。

「レイジングハート、お願い！」

『Flyer Fin』

なのはの靴から彼女の魔力光と同じ桃色の羽が伸びる。

「わわっ！」

「うん、そんな感じ。なのはちゃんはレイジングハートと相性がい  
いみたいだね、これならだいたいの魔法は念じるだけで発動するよ」

「そ、そうなの？」

「問題なのはイメージさ。飛ぶから付いてきて！」

と俺はバクパクのスラスターを吹かして上空へ。なのはも戸惑いながら付いてきている。

「わーっ！ 本当に飛んでるー！」

うん、俺も最初はそんな感じだったよ。初めて飛んだ時の感想は。  
なんか、なのはの魔法の才能の事で驚くの疲れてきちゃったな。  
そんなことは置いといて、今は急ぐ時。

「なのはちゃん、反応はあっちからだ。行くよ！」

「うん！」

飛翔する。見下ろす海鳴師の街並みはどんどん流れて行く。  
魔力の反応を追う、目標は……あそこの神社だ！

「なのはちゃん、ジュエルシードはあそこの神社にあるよ！」

「わかったの！」

神社で俺たちを待っていたのは強大な四足の獣。突き出た角、鋭利な牙、赤い四つの目。

どうやら、ジュエルシールドは野犬を取り込んだようだ。

「なのはちゃん、今回は見学だ。俺が戦い方をレクチャーするからよく見てて！」

地上に降り立ち、ジュエルシールド暴走体と対峙する。

向こうも俺を獲物と認識し、すぐさま飛びかかってきた。

「まずは、防御！」

『Protection』

左手をかざし防御魔法を展開する。その直後、衝撃音。

相手の攻撃を受け止める、そしてそのまま上空にはじき飛ばす。

「次に、攻撃！」

『Divine Buster』

「デイベイイイン、バスタアアー!!!」

構えたライフルから放たれる砲撃。そして轟音とともに着弾。

代表的な直射撃魔法にして主砲、デイベインバスター。

暴走体は俺が放つ蒼銀の魔力光に飲まれ、それが消えた時には力なく落下し、そのまま地面に激突した。

「最後に、封印」

『Sealing Mode, Stand by, ready,

Set up』

「忌まわしき器、ジュエルシード。シリアル??、封印！」  
『Sealing』

左手から放たれた光の帯が動けなくなった暴走体を捕え、包み封印する。

暴走体は苦しむように唸り声を上げるがそのまま光に消えた。

残ったのはその場に浮かぶジュエルシードと地面にうつ伏せに倒れている子犬だけだ。

……野犬じゃなくて飼い犬だったのか。

「どう? こんな感じだけだ」

「うん、すごかったの! 特にあのドカーンってやつ!」

ゆっくりと降りてくるなのはにジュエルシードを渡しながら感想を聞く。

ドカーン、って……。確かにデイバインバスターは砲撃だけど。

まあ、小学校低学年だし効果音で許されるよね。

だが、興奮気味なのはに釘を刺しておかないと。

「これからどんな相手が出てくるかわからない。今回みたいに楽ならしいけど、そうはいかないだろうね。気を引き締めて確実に安全に回収して行こう」

「はい! 分かりました! なの」

近くで気絶していた女性とジュエルシードに取り込まれていた子犬を木陰に移し、彼女が目覚めるのを待つ。

さすがに放って置くことはできないから。

その間はユーノに念話でジュエルシードの回収報告と状況説明。そしてなのはへの魔法講習となった。

プロテクションのバリエーションと用途。デイバインバスターとその応用。

牽制やフェイントなどの様々な汎用性が高い誘導制御射撃魔法であるアクセルシューターの実演など行った。

なのは乾いたスポンジが水を吸い込むように魔法を覚えていった。練習として複数のスフィアでお手玉みたいに操作するよう言ったら、最初こそ苦戦したがすぐにコツをつかんだようです。八つのスフィアを自由自在に操作できるようになった。未恐ろしい少女である。

「今回はこれにて一件落着かな？」

「そうだね」

目を覚ました女性を鳥居の上から見送りながらなのはへ言葉を投げかけると嬉しそうにそう返した。

日が暮れはじめ、夕日が海鳴市を染める頃になっている。

「じゃあ、戻ろうか？」

「うん！」

私は今、窮地に立たされています。

優斗くんの家に戻ってきたらアリスちゃんが鬼の形相で仁王立ちしていたのです。

理由は、アリスちゃんとすずかちゃんを置いて飛び出していった事だと思います。

正直に事情を話す訳にもいきません。

アリスちゃんとすずかちゃんなら事情を話せば協力してくれると思います。

アリスちゃんなら無理やりにも探索に参加してきそうです。もし、その途中でさっきの様なジユエルシードの暴走体が襲ってきたら？

今回は魔法使いの先輩である優斗くんが解決してくれましたが、アリスちゃんやすずかちゃんは普通の女の子だから抵抗なんてできない。

私の大切な友達が怖い思いも痛い思いもするなんていやです。だから、事情に話すなんて無理だよ……。

「なのは!!」

「はい!!」

アリスちゃんからの一喝で思わず姿勢を正します。

アリスちゃんは起こると怖いのです……。

ただどすく怒った顔から寂しそうな顔をするアリスちゃん。

すずかちゃんもアリスちゃんの後ろで同じ表情をしています。

「小母さまから聞いたわ。今、なのはは危険な事に頭を突っ込んでるのよね？」

「ふえええ!!? あ、それは、えーと、そ、それは……」

優斗くんのお母さん、魔法の事しゃべっちゃったんですか!?

「詳しい事情が知りたいの。小母さまからは優斗について行って危ない事をしてるって事しか伺ってないわ。話してくれるわよね？」

「えと……。えーと……」

どうしよう!!? 話しちゃう?! でも話したら……!!

「話して、くれないの?」

「あの………。その………」

しばらく重い沈黙が続きました。私の頭の中はいっぱいいっぱいです。

どうしようどうしようどうしよう!?!?

「そう、わかったわ」

「ふえ?」

沈黙を破って、アリスちゃんが言いました。

私は気の抜けた声しか出せませんでした。

「話せないんでしょう? なら、話さなくていいわ」

「え、でも………」

「それなら、話してくれる?」

「そ、それは………」

「話さないのは、私たちが関わったら危ないとかそんな理由?」

「どうしてわかるの!?!?」

アリスちゃんの言葉は私の心を見透かすようでした。

「そう、なんだ。やっぱりね」

「え?」

不思議に思う私に構わず言葉は続きます。

「なのはの事だものそんな事だろうと思ったわ」

「なのはちゃんは優しいから」

アリサちゃん、すずかちゃん。

「それに、頑固だからさ。一度決めたら最後までやり通すもんね」

「一人で抱え込むことも多いから、心配だけど応援してるよ」

「なのは。あなたから話してくれる日を待つわ」

「うん、その時は私の家でお茶会だね」

「私たちはなのはを信じてる。だから思う存分やりなさい！」

「がんばってね、なのはちゃん！」

私の心は嬉しさでいっぱいになって思わず二人に抱きついちゃいました。

「ありがとう！ アリサちゃん、すずかちゃん」

そして、私たちはお家に帰る時間になりました。

「優斗！ あんた、なのはにケガさせたら承知しないからね！」

「うん、がんばるよ。アリサちゃん」

「なのはちゃんを守ってあげてください」

「まかせてよ、すずかちゃん」

玄関での会話です。

二人とも念いりに言い付けているようです。

今日の戦いを見る限りだと、私が戦う事はないかもしれませんが。

でも、優斗くんが言うにはやるには最善を尽くすと事なので、戦闘関連は優斗くんが、補助関連はユーノ君が魔法の先生をしてくれる事になってます。

「いつでも遊びにおいで。ユーノと待ってるからさ。と言っても緊

急事態の時はゆるしてね」

「ええ、お邪魔させてもらっわ」

「今度来る時はクッキー焼いてくるね」

「うん、楽しみに待ってるよ。じゃあ、またね」

「「「お邪魔しました」「」」

私たちは声をそろえて挨拶して優斗くんのお家を出ました。

私、高町なのはが魔法使いになってから初めての日はこうして終わりました。

新しくできた友達、魔法使いの先輩の優斗ちゃんとユーノ君。

魔法の事、不安な事、よくわからない事。

とにかく沢山あるんですが、とりあえず色々頑張っていかなきゃ、って、そう思います！

「エピソード5」もう友達だから」

「さて、いつものやるね」  
「うん」

月が映える夜。ユーノが来てから欠かさずやっている事をしている。それは……………。

「彼の者に波動の導くまま魔力を分け与えん」  
『Micro Wave』

ユーノへの魔力譲渡である。

両手からユーノを包み込むように俺の魔力がユーノへ注ぎ込まれる。

「ありがとう、優斗。もう全快だよ！」

「どういたしまして」

「それにしても珍しい魔法だよね、優斗のマイクロウェーブって」

「まあ、俺のオリジナルだしな」

俺のデバイス、というより俺の求めた力の形の特性上、魔力譲渡の魔法の作成は必須だった。

切り札である砲撃魔法は自分一人では使えない欠陥魔法だが、威力はまさしく一撃必殺。

一個人が放てる砲撃魔法の枠を著しく超越してしまっている。  
非殺傷設定が意味をなさないという危険極まりない砲撃魔法なのだ。  
大げさだが簡単に例えるなら一対一の対人戦で小型の核ミサイルを使用しているようなものだ。

一時期管理局で問題になったが、まあ、色々あって今に落ち着いて

いる。

「「！」「」

突如感じる存在の力。

「ユーノ！」

「うん、ジュエルシードだ！」

即座になのはに念話で連絡し、俺はユーノとともに夜の海鳴市の空を飛んだ。

向かう途中になのはと合流し、目的地である学校に向かう。

到着した俺たちを待っていたのは学校で飼われている兔を取り込んだジュエルシード暴走体だった。

暴走体はグラウンドで俺たちを見上げてうなり声をあげていた。

「な、なんだか怖いよ、優斗くん」

「どうやら、学校で飼っていた兔みたいだね」

「ふえ！？ あれウサギさんなの！？」

さて、どうするか。

有事に備えて、なのはにはある程度戦闘経験を積ませる必要があるし、ここはなのは一人に任せてみよう。

それができるだけの知識と技術は教えたつもりだ。

「なのはちゃん、今回は一人であれ、封印してみようか」

「ふえええ！？ でも、私、まだ……！」

「今なのはちゃんならできるよ。大丈夫だからやってみて」

「……うん、やってみるの！」

上空から相手と自分の間合いを確認するのは。  
やはり、俺の教えた戦いのいろはを実践できている。

「暴れられると困るからまずは動けなくするの！」

『Restrict Lock』

暴走体が桃色の光の輪に拘束された。

逃れるために抵抗する暴走体。しかし、なのはのバインドは強固。  
それを打ち破るには至らなかつた。

「えと、学校の迷惑になるからこれで！」

『Divine Shooter』

なのはの周りに形成される八つノダイバインスフィア。

なのはのダイバインバスターなら一発で決着がつくだろう。しかし  
ユーノが結界を張ってあるとはいえそんなものを放てばグラウンドが  
大変なことになるだろう。  
状況判断もできているな。

「シュート！」

なのはの掛け声を合図に全てのダイバインスフィアから魔法弾が次  
々と発射される。

逃げようにも拘束されている暴走体はなすすべなく魔法弾の雨を受  
けることになった。

着弾とともに巻き上がった土ぼこりが消えた時、そこにはぐったり  
と無力化された暴走体がいた。

「これなら封印できるね、レイジングハート！」

『All right, Stand by, ready』

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル??！ 封印！」  
『Sealing』

封印完了。

すぐに助けに入れるように身構えていたが、杞憂に終わり結果は見事な圧勝であった。

もうなのは一人でいいんじゃないかな？

それぐらいの成長を見せています。確かにこの時期は覚えるのも上達するのも早いが……。

「おつかれ、なのはちゃん」

「なのは、お疲れさま」

初めての一人での戦いで緊張したであろうなのはにねぎらいの言葉を贈る俺とユーノ。

「ふうー、緊張したの……。こんな感じでいいのかな？」

とゆつくりと下降してきたジュエルシードをレイジングハートで回収しながらなのは俺たちに聞いてきた。

「うん、上出来上出来」

「これ以上ないぐらいすごかったよ、なのは」

「にははは、なんだか照れくさいの」

とまあ、こんな様子でジュエルシード回収に勤しんでいるわけなのです。

「これで回収したジュエルシードは四個だね」

「うん、そーだね。ユーノくん」

現在、レイジングハートに収納されているジュエルシードは四個。ユーノが最初に回収したシリアル??、なのはが初めて封印したシリアル??、この前の神社で相手したシリアル??、そして今回のシリアル??。

この調子で危なげなく回収できればいいのだが……。

「さて、今日はこれにて解散だね」

「はづう……、ちよつと眠いよ」

「夜も遅いし早く帰って寝た方がいいね、なのは」

「うん、そーする……」

「明日の午前中の模擬戦はお休みにしといた方がいいね。明日はゆつくり休みな、なのはちゃん」

「ありがとっ、優斗くん」

それで今日は解散となった。

そして、翌日の朝を迎える。

朝起きて、ユーノが寝ているバスケットのベットを見てふと思い出す。

「なあ、ユーノ」

「なに？ 優斗」

「ユーノってどうやって遺跡の発掘してるんだ？ そんな小さい体じゃ大変だろ」

「ああ、この姿かい？ これは魔力の消耗を抑えるための仮の姿だよ」

机から床に降り立ったユーノは突如、発光を始めそれが消えた時そ

ここに立っていたのは、金髪緑眼で整った顔立ちで緑色の模様の入った民族衣装の様な服を着た美少年だった。

「優斗にこの姿を見せるのは初めてだよね」

「なまら美少年……」

「ん？ 何？」

「いや、なんでもない」

思わず頭を抱えてぼやいてしまった。

魔法関係というかこの世界の人間は美形ぞろいで羨ましい限りです。ティーナやなのは、アリサにすずかの様な美少女やニコルにユーノと美少年。

アレンさんはアレンさんで好美青年ですから、平凡な俺の肩身の狭い事狭い事……

あ、ちなみに“なまら”とは、“とても”や“すごく”という意味の方言です。

丁度いいのでこのユーノの姿を両親に紹介することにした。

魔法関係にある程度耐性ができた両親だったが、さすがに驚いたようだった。

特に母さんは可愛い子だと思わず愛でていたが、ユーノ本人は微妙そうな顔をしていた。

やっぱり、男は可愛いより格好いいと呼ばれたいものである。

朝食も終わり、せっかくの日曜日なのだから有意義に過ごしたいものなのだが。

休日は午前と午後なのは魔法の講習を入れていたが昨日はさすがに疲れたらしく午前の分はお休みにしたため自由行動となっている。

「ユーノはどうする？」

「この街の散策をしてみたいね。もしかすると発動前のジュエルシードが見つかるかもしれないし」

「あー……………、探知系の魔法使えたら協力できるんだけどなあ」

「人には向き不向きがあるからね。僕は気にしてないよ？」

「うん、ありがとう……………」

街に出るならその服装だとちょっと目立ちそうだし、俺のお古でよければ着る？」

「あ、うん、そうだね。ありがとう、借りるよ」

「一応俺も外、見て回ってみるよ。見つければ御の字だからね」

という訳でユーノが身支度を終えてと別々の方向へ出発した。

有事の際は念話で取ればいいのは魔導師の特権だよな。携帯要らずで便利だ。

まあ、携帯自体持ってないんだけど。

意識を集中する。

広域を精密に探知する魔法は俺には使えないが、身の周り程度の広さなら出来ない事もない。

探知をかけつつ歩きまわる。

かれこれ一時間半ほどたっただろうか？

体内時計だから正確にはわからないがそれなりの時間は経っただろう。

少し疲れた。休憩したいと思いつめそうな場所を探していたら……………

「図書館か、ちょうどよさそうだな」

俺は誘われるように図書館へ歩を進めて、その中にいる。  
休日という事でそれなりの利用者がいるようだ。  
さて、何を読もうかな？  
そう考えながら図書館の中を彷徨っていると

「んー………！あと、ちょっと………！」

車椅子に乗った少女が一生懸命手を伸ばして本を取ろうとしていた。  
彼女の言葉と通り、あと少しなのだが姿勢が少し危ない。  
バランスを崩して倒れてしまいかねない。

「これが読みたいの？」

見かねた俺が彼女に近づきお目当ての本を手を取った。

「あ、おーきに！」

茶色の短髪で左に交差する赤色の髪飾りを付けた美少女が笑顔でお  
礼を言った。

本当に美少女率高いよなあ、海鳴市。

「まだ、何か読みたい本とかある？」

「ホンマにええの？」

「うん、遠慮なく言っつてよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて。あそこの“今日の夕食100品”とあ  
つちの“おすすめディナーメニュー”もとってーな」  
「わかったよ。はい、どうぞ」

ご希望の本を取ると少女に手渡した。

とても明るい少女だ。だが、なんだか無理をしているようにも見える。

と、そこで気がつく。

「本持ったままだと車椅子じゃ動きづらいよね、押して行くよ」

「え！？ ええって、ええって！」

「遠慮しなくてもいいよ。俺がやりたくて言ってるんだからさ。本当に迷惑ならやめるけど……」

「ううー。そういう言い方、卑怯やんか！ わかったで。じゃあ、

あつちのスペースまで押してっーな」

「了解」

彼女の指示に従って車椅子を押ししていく俺なのだが、何か違和感を感じる。

この少女、どこかで見たとような気がする。

はて、どこだったか……。

まあ、そんなわけで彼女を車椅子のためのテーブルのみのスペースへ移動させた俺はちょうど途中で見かけた本を片手に椅子を持って彼女の向かいに座った。

「なあなあ、名前なんて言うん？ あ！ 私は八神 はやて。よろしく！」

「はやてちゃんか、うん、よろしく。俺は上森 優斗。好きに呼んでくれていいよ」

「上森 優斗かぁ……。うん、覚えてたで！ 改めてよろしくやで、優斗！」

と自己紹介した俺たち。

彼女の名前は八神 はやてと言う。八神 はやて、八神 はやて・

……。  
どっかで聞いたことあるようなないような？  
……まあ、いい。きつと気のせいだ。

読書をしながらたわいもない話をする俺たち。

お互いの読んでも本から話題を切り出し弾ませていた。

どうやらはやくには家族がいなく、一人で暮らしているとか。

病院の担当の先生や毎月仕送りしてくれている親戚の人がよくしてくれているようだが、やはり、一人だと寂しいのだろう。

「あのさ、はやてちゃん」

「なに？」

「今日会ったばかりでこんなこと言うのおかしいかもしれないけどさ、遊びに行ってもいいかな？ はやてちゃんの家にな」

「え？」

「いや、今とかじゃなくてさ。迷惑になるなら今の言葉は忘れてくれていい。」

ただ、一人でいるよりも二人でいる方が楽しいと思つてさ。他にもはやてちゃんと同世代の子も友達にいるからさ、声をかければ来てくれるからみんなでお邪魔したいと思つたんだ」

はやてがうつむいてしまった。

しまった、自分勝手が過ぎたか……？ 用事を思い出したとでも言つて立ち去るべきか？

急いで立ち去つて二度とここに近づかなければ、変な奴だったつてすぐ俺の事なんて忘れてくれるだろう。

「なあ、優斗」

「な、なにかな？」

そんな思考を巡らせていた時に、はやてが口を開いた。

「なんで、そんな事までしてくれようとするんやるか？」

「え？　なんでって、それは……………」

「それは？」

「もう友達だから、かな？」

「とも……………だち……………？」

はやての疑問には自然と言葉が出た。

「心が少しでも通って、名前を呼び合えば、それでお互いは友達だろ？」

それともこんなずうずうしい奴を友達なんて御免かな？」

「ううん、そんな事あらへん！　そうか、友達か……………」

「そうやね！　私と優斗は友達や！」

それから、俺とはやては時間を忘れて色々話した。はやての長年に溜まったを寂しさを吐き出すように。

なんだが最初に感じていた影がとれて少し表情に明るさが増した気がする。

「あれ、もうこんな時間か」

時計の針は正午を大きく過ぎていた。

「ホンマや。帰ってお昼にせなな」

一度帰ってお昼を食べてこなくちゃいけないな。午後も散策して、五時前後になったらなのは魔法講座しなきゃいけない。

「そつや！ なあ、優斗。今日のお昼ウチで食べていかへん？」

「え？ いいの？」

「友達やさかい、いいに決まっとるやないか！」

「………そつか。じゃあ、お呼ばれしようかな」

「よし、気合い入れて作るでー！」

そうして俺たちははやての家に向かう事になった。

はやての車椅子を押して図書館のカウンターへ行き本を借りる手続きをした後、図書館を後にした。

彼女の家に向かう道中、俺がいる事で彼女の寂しさが少しでも和らげばいいなと切に願った。

## エピソード6「遠い親戚ってことなの」（前書き）

PVが3000を突破しました。

多くの方に読んでいただき誠にありがとうございます。

感想やアドバイスなどをいただければ作者として励みになります。

今後もこの作品を読んで頂ければ幸いです。

## エピソード6「遠い親戚ってことなの」

おはようございます、高町　なのはです！

私はどこにでもいるような小学三年生だったはずなのですが、最近  
は人には言えない秘密ができました。

きっかけは助けを求める不思議な声。

出会ったのは魔法使いの少年と人の言葉をしゃべるフェレット。

受け取ったのは勇気の心、手にしたのは魔法の力。

この街の周辺に散らばってしまったジュエルシードを探すお手伝い  
をしています。

つまり、えと、……………“魔法少女”……………、やってま  
す。

今日はすずかちゃんのお家でお茶会を開くので、それにお呼ばれし  
ています。

今はその準備をしている所なのですが……………。

「なのは、まだか？」

とお兄ちゃんの声。

「んんー、ごめーん！　あと、ちょっとー！」

と返すのが精一杯です。

「いやー、ユーノは賢いねー」

「ええ、人の言葉もしっかりと理解しているみたいですから」

「きゅー」

お姉ちゃんと優斗くんの会話です。

私が準備している間に優斗さんとユーノくんが家に到着してしまっ  
たわけなのです。

ううう………、朝は弱い………。

「………あの、恭也さん。俺、なにかしましたか？」

「いや、特に何も」

さつき優斗くんの紹介してから、お兄ちゃんが何か怖いです。

「大丈夫よ、優斗君。恭ちゃんはただ妬いてるだけよ。なのはが連  
れてきた初めてのボーイフレンドだから警戒してるのよ。もう、シ  
スコンさんは困ったものよねー」

「違う！ ただ、なのはに悪い虫がつかないか心配しているだけだ」  
「はは、ははは、あははは………」

優斗くんの乾いた笑い声が聞こえてきました。早くしなきゃ！  
………ふう、やっと終わったの。

私はバックを背負ってリビングに入りました。

「おまたせー！」

「よし、じゃあ行くか。バスの時間ギリギリだぞ」

「はい」

「んじゃ、ユーノ行こうか」

「きゅー！」

シヨルダーバックを背負った優斗くんの肩にユーノくんが乗りまし  
た。

これでみんなの準備は万端です。では、いざ、月村家へ！

「いつてらっしゃーい」

「ああ」

「いつてきまゝす」

「それでは、お邪魔しました」

「きゅーいー」

お姉ちゃんに見送られて私たちは家を出ました。

みんなで最寄りのバス停に乗り込み、座席に座ります。

今日の私たちはアリサちゃんとすずかちゃん、優斗くんとお茶会。

お兄ちゃんはすずかちゃんのお姉ちゃんのお忍さんに会いに行くのです。

今日は楽しい一日になりそうです。

ピンポーン

と呼び鈴を鳴らします。

少し待った後にガチャリとドアを開けて綺麗なメイドさん、ノエルさんが迎えに来てくれました。

「恭也様、なのはお嬢様、いらっしやいませ。それと」

「あ、急遽お呼ばれました。上森 優斗と言います。初めまして」

「お話は伺っております。優斗様、いらっしやいませ」

優斗くんを確認すると改めてお迎えの言葉を言う、ノエルさん。

「こんにちは、お招きに預かったよ」

「こんにちはー」

お兄ちゃんと私もノエルさんに挨拶しました。

ノエルさんは月村家のメイド長をしているすごい人なの。  
無口な人だけど、美人でかっこいいんだー！

「どうぞ、こちらです」

そう言っただけに招き入れてくれるノエルさん。

奥の通された場所ではアリサちゃんとすずかちゃんが既にお茶を楽しんでいる所でした。

「あ！なのはちゃん、恭也さん、優斗くん」

「すずかちゃん！」

「こんにちは。すずかちゃん」

「遅かったじゃない、なのは」

「アリサちゃんのは早いだけじゃないかな？」

「何か言った？」

「なんでもないです」

私たちがあいさつを済ませた時、すずかちゃんの後ろからメイドさんが来ました。

「こんにちは、なのはちゃん」

この人はすずかちゃんの専属メイドのファリンさん。明るくてやさしいお姉さん。

「あれ？ そっちの男の子は？」

「初めましてみなさん。上森 優斗です。この度はお招きいただきありがとうございます。」

「話はすずかから聞いているわ。よく来てくれたわね」

優斗くんが月村家のみんなに自己紹介をしました。歓迎されてるよ  
うでよかったの！

「恭也、いらっしやい」

「ああ」

今、お兄ちゃんと一緒にいるのがずかちゃんのお姉さんで忍さん。  
お兄ちゃんと忍さんは高校の頃からのクラスメイトさんで今ではと  
っても仲よしさん

「お茶をお持ちいたしましょう、何がよろしいですか？」

とファリンさん。

「任せるよ」

「なのはお嬢様は？」

「私もお任せします！」

「優斗様は？」

「じゃあ、俺もお任せでお願いします」

とみんなの飲み物を持ってきてくれるようです。

「かしこまりました。ファリン」

「はい、了解です。お姉さま」

どうやら、ファリンさんがお手伝いに行くようです。

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから」

「はい、そちらにお持ちします」



「母さんは冗談言う人じゃないからたぶん本当なんだと思う」

「じゃあ、本当に？」

「うん」

そうなんだ。すずかちゃんと優斗くんが親戚だったなんて……。

「そうなんだ……。えっと、改めてよろしくね、優斗くん  
「こちらこそ。すずかちゃん」

いきなりすごい事になりましたが、その後はつつがなくお茶会が始まりました。

ノエルさんとフアリンさんが飲み物を用意しに行ってますし、お兄ちゃんは忍さんと一緒に忍さんの部屋です。

今、ここに居るのは私、アリサちゃん、すずかちゃん、優斗くんにコーノくんです。

私は猫さんに退いて貰って椅子に座ります。優斗くんはすずかちゃんに勧められるまま忍さんが座っていた椅子に座りました。

「今日は誘ってくれてありがとね」

「こつちこそ来てくれてありがとう」

「なんか、俺がここに居るの場違いな気がするけど、呼んでくれて嬉しいよ」

「ううん、そんなことないよ。それにしても驚いたよ。だって私と優斗くんが親戚だったなんて」

「分家、と言っても交流は皆無に等しかったしかなりの遠縁だけだね。むしろ忍さんが母さんの家の事知っててびっくりしたよ。さすが、すずかちゃんのお姉さんだね」

「ふふふ、なんか照れるね」

すずかちゃんと優斗くんの間にお兄ちゃんと忍さんが出す雰囲気に近いものを感じるの。  
もしかするのかな？

「ユーノ、こっちおいで」

「きゅいきゅい」

「うふふ、ユーノはかわいいわねー」

「きゅいー」

こっちではアリサちゃんとユーノくんがたわむれています。

「はい、お待たせしましたー　いちごミルクティーとクリームチーズクッキーです」

と、ファリンさんがお茶とお茶菓子を持ってきてくれました。

お盆をテーブルに置くとお菓子をテーブルの中央に、お茶を私と優斗くんの分を淹れてくれました。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

淹れてもらったお茶を一口。うん、いつもおいしいの。

お茶を飲んだ優斗くんもファリンさんにほめています。ファリンさん、ほめられてすっごくうれしそうなの。

「ところでなのは」

「にゃ？　なに、アリサちゃん」

「最近どうなの？　隠し事の方は」

アリサちゃんの質問に思わずドキリとしました。優斗くんを見ると  
なにも言わずにうなずいてくれました。  
少しは話していいって事みたいです。

「うん、大丈夫。順調だよ！ 心配してくれてありがとう」

「そう、ならいいんだけど……。優斗！ しっかりなのは  
を守りなさいよ！」

「わかってるよ。なのはにケガさせたら恭也さんが怖そうだし……  
……」

「にははは……。……」

それには私も苦笑いです。愛されてるって実感できて嬉しいのだけ  
れど、ちよっ行きすぎてる気がします。

「早く片付けちゃってよ？ 私たちが楽しんでる所に急用なんてい  
やよ？」

「それよりも、なのはちゃんが心配なんだよね？ アリサちゃん」

「何言ってるのよ、すずか。それはあなたもでしょっ？」

「心配してくれてありがとうなの」

「その要件についてなら、この調子でいけば早くて三週間くらいで  
終わると思うよ」

と、優斗くんの話です。

かれこれ一週間くらいたって集めたジュエルシードは四個。

どんな間隔で来るかわかりませんができるだけ早く終わらせてみん  
なを安心させてあげたいです。

「なんだか最近のなのはちゃん、たくましくなった気がするよ」

「え、そうかな？」

「まあ、そんな気がしないでもないわね」

アリサちゃんとすずかちゃんが言うたくましさって、あれかな？  
優斗くん結構スパルタだからそれをこなしてきてるって自身の表れ  
かもしれませぬ。

ムダにひいひい言って優斗くんの弾幕かいくぐってないの！

「ねえ、すずかちゃん。この猫なんていうの？」

「その仔はアレンっていうの。好奇心旺盛過ぎてこまってるの」  
「そ、そうか、アレンっていうのか」

優斗くんが仔猫を可愛がりながら乾いた笑いを浮かべています。

小声で、アレン、アレンか……、と言ってるけど何かあるのかな？

こうして、楽しいお茶会が過ぎていきます。

気分を変えるために場所を玄関前の円形のスペースに移動してみたりしました。

すずかちゃんの家は玄関の前がとても広いお庭になっているの。  
そこには猫さんがたくさん放し飼いにされています。

「相変わらず、すずかの家は猫天国よね」

このアリサちゃんの言葉はすずかちゃんの家をつまく表していると  
思います。

「でも、仔猫たち、可愛いよね」

「この中にユーノを放り込んだら大変なことになりそうだな」  
「じゃあ……。それはちよつと怖いね」

ユーノくんは優斗くんの頭の上に退避しています。

周りの猫さんの目がちょっと鋭くなっているのは気のせいだと思いたいの。

「この仔たちの中には里親が見つかったる仔もいるから、お別れをしなくちゃいけないけど……」

「そっかぁ……、ちょっとさびしいね」

「でも、仔猫たちが大きくなっていくのを見るのはうれしいよ」

「そうだね」

「我が子を送り出す母親の気分ってやつですね」

「母親か……、うん、そうかも」

私たちは話の花を咲かせています。

最初は私たちの輪に入りずらそうにしていた優斗くんもなじんできたみたいです。

今日はこのまま平和に過ぎていけばいいなと思いました。

「ッ！」

「きゅい！」

でも、現実はその甘くないようです。

ジュエルシードの暴走。

「アリサちゃん、すずかちゃん、ごめん！」

「え！？ なに！？」

「急用なの！」

「行こう、なのはちゃん！」

「うん！」

私たちはアリサちゃん、すずかちゃんに事を伝えてこの場を飛び出しました。

## エピソード7「ムダなんて事ないから」

反応はすぐ近い。月村家の敷地内だ。

近くなったところでユーノに認識と時間進行を阻害する結界を張ってもらった。

結界が張り終わっていざ搜索となった時、ジュエルシード暴走体が現れた。

現れたのだが……………。

「にゃーお」

高さにして五メートルほどと言ったところだろう。その巨大な暴走体を見て俺たちは呆気にとられることになる。

「はえ？」

「お……………」

「おう……………」

上からなのは、ユーノ、俺の順である。

そこに居たのは灰色に黒縞模様の猫。俺がちよつと前に遊んでいた仔猫。

アレンであった。

ズシンズシンと地面を響かせながらゆったりと歩く巨大仔猫はあまりにもシユールだった。

「あ、あ……………、あ、あれ、は？」

「多分、あの猫の大きくなりたいて想像が正しく叶えられたんじゃないかなと……………」

「そ、そつか………」

なのはとユーノの会話を聞きながら俺は少し頭痛を感じていた。

今までのジュエルシード暴走体は禍々しい姿に変貌していたから今回もそうだろうと思っていたんだが、こういうのもあるのか……

大きさはともかく姿が愛くるしい仔猫のままなので攻撃するのを戸惑う。

「でも、このままだと危険だから元に戻さない」と

「そうだね。さすがにあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし」

「それ以前の問題だと思うが」

とりあえず封印しよう。あれなら攻撃して無力化しなくても封印できそうだな。

「にゃーお」

「襲ってくる様子もなさそうだし、ささっと封印を」  
「だね」

俺となのはが服の中からデバイスを取り出した。

「じゃあ、レイジングハート！」

「セイヴァーソウル！」

だが、セツトアップしようとしたその時、後方から魔力弾が駆けて行き、無抵抗な仔猫に直撃した。

「……ッ!?」「……」

振り返る俺たち。その先、視界の奥に魔力弾を放った魔導師がいた。金髪の長い髪を二つに分けて黒いリボンで結び、レオタード風の物にスカート、マントに至るまで黒いバリアジャケットを見に纏う少女。

その手には黄色のコアを持つハルバードの様な黒いデバイス。この物語の第二の主人公。

フェイト・テストロッサ。

「バルディッシュ。フォトンランサー、電撃」

『Photon Lancer, Full auto fire』

術者の指令に則りデバイスから複数の魔法弾が放たれた。

まだ仔猫のアレンに、しかもいつもとなれない巨体ではよける事などできない。

全て直撃。子猫は苦痛の声を上げた。

「な、魔法の光!? そんな・・・」

「驚いている場合か、ユーノ!　なのはちゃん!」

「うん! レイジングハート!」

「セイヴァーソウル!」

「セットアップ!」

『Stand by, ready, Set up』

俺となのは即座にバリアジャケットとデバイスを展開、迎撃態勢に入る。

「なのははあの仔猫を頼む!　ユーノはそれのサポート!　彼女は俺が!」

「うん、わかったの！」  
「まかせて！」

なのははフライヤーフィンで飛行しこの仔猫の元へ。ユーノは陸路からそれに続いた。

俺はフェイトを見据え、飛び、一気に加速した。

「フォトンランサー、ファイアー」

フェイトは俺を目掛けて射撃魔法を放つ。あたるつもりは毛頭ないので最小限の動きで回避、接近を試みる。

彼女もその場に留まるような愚行をする訳もなく上空に移動しながら魔法を放ち続ける。

こちらも回避行動のみではらちが明かないので反撃に移る。  
ライフルを構え、魔法を紡ぐ。

「ショートバスター！」

『Short Buster』

威力と射程より速度と連射を高めたディバインバスターのバリエーション、ショートバスター！

「っ！ 早い!？」

フェイトの予想以上の速度だったのだろうが、紙一重で回避されてしまった。

だが、もとよりこれ一発目を当てるつもりはない。

回避先に即座に二発目、回避予測ポイントに三発目、四発目と撃ち込んでいく。

「くっ・・・！ブリッツアクション！」  
『Blitz Action』

小刻みに転移にしているように見えるほどのスピードで全弾回避。  
高速機動魔法・・・！

『Scythe Form, Set up』  
『Sword』

フェイトはバルディッシュをサイズフォームに、俺はビームソードを引き抜く。  
共に魔力刃を展開し加速する。  
そしてすれ違い様に幾度も切り結ぶ。

「たあっ！」  
「はっ！」

この身のこなし、戦い方。やはりスピードタイプの魔導師か・・・。  
。。。  
なら！

「セイヴァーソウル、デバイダーモード！」  
『Yes Master, Divider Mode, Set up』

バックパックがL字配置のリアクターと砲身からビームソード二基とソードラックブラスター、更に左右に伸びるユニットの先にブラスターが取り付けられたデバイダーモードに変形する。

「背中が変わった・・・！！？」

フェイトが驚きの表情を浮かべた。だが、驚くのはここからだ。

「行くぞ、セイヴァーソウル！」

『Flash Move』

こちらも高速機動魔法で一気に間合いを詰める。

フェイトも予想外のようで、回避行動を取られる前に接近できた。この隙を逃すはずもなく俺はフェイトに斬りかかる。

「はあ！」

「くう！」

カキーン！

と硬い音が鳴り響く。

攻撃はとっさに構えたバルディッシュで受け止められ、鏝迫り合いになる俺とフェイト。

力任せに押し込める自信はあるが、今ならできる！

「君はなんでてこんな事をする？」

「……………」

「君が輸送船を襲ったのか？」

「……………」

「目的はジュエルシードか？」

「……………」

俺の問いかけにフェイトは黙に徹して答えてくれなかった。

だが、否定する気もない。つまり、公定と受け取っていいということか。

クソッ！

「フェイトになにする気だい!!」

突如、森から人影が飛び出し俺に殴りかかってきた。とっさに左手でデイバイダーを取り出し受け止める。

「盾にもなるのかい、それは!」

オレンジの髪が印象的な美人の女性だ。だが犬耳に尻尾までもがあり、フェイトの事を案じているという事はフェイトの使い魔なのだろう。

二対一になるのは分が悪い。使い魔の女性には早々に退場して貰おう。

デイバイダーを展開し、魔力を込める。

「ッ!?!」

「アルフ! 逃げて!」

回避するにはもう遅い!

「デイバインバスター!」

『Divine Buster』

「しまっ」

デイバイダーの中央の砲門から光の奔流が放たれる。

ほぼゼロ距離から放たれたデイバインバスターは使い魔の女性を轟音とともに呑み込みそのまま吹き飛ばした。

そして彼女は飛び出してきた森へ真っ逆さまに落ちて行った。

「アルフッ!!」

思わず使い魔の女性、アルフの名前を叫ぶフェイト。

「君の大切な人にひどい事して、ごめん。だけど俺は君の話を知りたいんだ！」

「あなたと話す事なんて何も無い！ただ、大人しくジュエルシードを渡せばいい！」

バルディッシュから光が見えた。

この距離で魔法を撃つのか！？自分もろとも攻撃する気か！？

「撃ち抜け、轟雷！サンダアアスマツシャー！！！」  
「な、にい！？」

次の瞬間、轟雷を伴った砲撃が炸裂し、俺とフェイトは爆煙に包まれた。

俺はフェイトとの間にデイバイダーを差し込む事も出来ず直撃してしまい、十メートルほど吹き飛ばされてしまった。

痛ッ！ つう……………！！

ダメージはある。だが、まだ大丈夫。

こちらの使っているデバイスは伊達に鎧の名を冠しているわけじゃない。防御力には自信がある。

俺が心配なのはフェイトの方だ。

彼女は防御面は基本回避に頼る軽装甲高速重視のスタイルのほず、体勢を立て直し、煙が晴れるのを待つ。

「アレをくらってまだ平然と動けるなんて……………う……………  
……………く……………！！」

やはり、あの密着状態で砲撃なんて撃てば自分にもダメージが来るのは必然。

フェイトは腹部を抑え息も絶え絶えだ。相当のダメージだったのだろう。

介抱するために近づこうとする。

「近づかないで！」

キツとこちらを睨み、バルディッシュを突き付けるフェイト。気丈に振る舞っているがかなりつらいはずだ。

「話を、聞かせてほしいんだ。きっと君の力になれる」

俺から手を伸ばす。支えになってあげたい、あの子の支えに。放っておけないんだ。要らぬお節介でも構わない。偽善だと罵られてもいい。

俺は自分勝手だから、自分の意思を通す。

「これは私たちの問題。あなたたちは敵。そういう関係。それに話しても、多分、ムダだから」

「ムダなんて事ないから」

フェイトの言葉に俺はすぐに答えた。

フェイトの目を見つめ、強く、はっきりと、もう一度、言う。

「ムダなんて事ないから。だから、話してほしいんだ、君の事」

フェイトはただ、黙っているだけだった。

だけど、瞳には様々な感情が渦巻いているのが分かった。

そんな彼女が絞り出すような声で答えてくれた。

「どうして、そんな事を言うの？」

俺が協力を申し出る理由。

簡単だよ。だって……………。

「君が、辛くて悲しい、って目をしてるから。でも頑張らなきゃって顔してるから。」

だから俺は君に手を差し伸べるんだよ。」

「……………ッ!!」

フェイトは動揺している。どうしていいかわからないって顔してる。あの子の時もそうだったな……………。

「フェイト!! そんな奴の言葉なんかには惑わされちゃいけないよ!!」

「アルフ！」

森からよたよたと歩きながら叫ぶアルフ。フェイトも彼女の名を呼んだ。

自分でやっておいておかしいと思うが無事でよかった。

加減していたとはいえ、怪我をさせてしまったと思うと心が痛むから。

「優斗くん!!」

その時、後方からなのは声が聞こえた。あっちの方が解決したみたいだ。

「なのはちゃん、大丈夫だった？」

「うん、ちゃんとできたよ。問題なし！ ぶい！」

ピースサインを出して自信満々に報告してくれたなのは。

「ちっ………！ これじゃあ分が悪いねえ。フェイト、ここは出直そう！」

「………そう、だね。アルフ、ここは引こう」

フェイトのそばまで飛んできたアルフが撤退をフェイトに打診していた。

フェイトも相当なメージがある。これ以上の戦闘は難しい。

「待って！」

俺の声に身構える二人。だが、ジリジリと後退している。フェイトは戸惑い、アルフは強い警戒の色が見て取れる。

「追うつもりはないよ、安心して。………俺は上森 優斗。君は？」

フェイトに俺の名前を教える。せめて、名前だけでも知っておいてほしかった。

「行くよ、フェイト！」

「う、うん」

アルフに促されるままフェイトはどんどん遠ざかって行く。そして、そのまま転送の準備にはいつてしまう。

「 フェイト。フェイト・テストロッサ。それが、私の名前」  
転移する最後の一瞬、とても小さな声だったけど、確かに、そう聞こえた。

フェイト……………。

転移し、姿を消した所を見つめながら彼女の名前を心で呼んだ。  
フェイトが見せた切な気な表情を心に刻みながら。

それからの俺たちははずかちゃんとアリサちゃんに合流。無事に解決した事を伝えた。

つつがなくお茶会も終わり、あいさつを終え帰宅となった。  
帰り道でのバスの中、俺たちは念話で話していた。

あの子は一体誰だったんだろう。ねえ、優斗くん

あの杖やあの衣装、使っていた魔法から考えると、多分、ううん、間違いなく僕たちの世界の住人だ。そうだよ、ね、優斗

うん、間違いないと思うよ。もしかすると輸送船を襲ったのも彼女かもしれない

え!?

どういう事なの?

彼女はジュエルシードを欲しがっていた。きっと何か大がかりな事をするのに使うんだと思う

だから、輸送船を襲った……………

……………きつと何か理由があるんだよ。一目見たただけで、そんな事をするような子じゃないと思うの

俺もそう思うよ、なのはちゃん。きつと、すごく重い理由があるんだと思う

そうだね……

前世の記憶が曖昧なうえ、「魔法少女リリカルなのは」を見ていた訳でもないのに穴があり、人物の名前、物、ストーリーの流れ等の重要な知識はすくない。

俺がいる分、原作より楽にジュエルシード集めができていると思う。

次にあつたらまた説得してみるよ。できれば、彼女がそんな事をする理由も聞きたいから

その時は私も一緒に説得するよ！ 大丈夫だよ、きっと私たちの気持ちは伝わるよ

そうだね、そうなってほしいよ

フエイト。

何が君を辛さと悲しさと罪悪感を孕んだ目をさせるようにしたんだ？  
背負っているものはなんなんだ？

俺たちは分かりあえないのか？

答えを出すには早すぎる。だから、話をしよう、フエイトと。

日が沈みつつある黄昏時に、バスから流れる景色を眺めながら、俺はそう思った。

「エピソード8」こんなにつれしい事はない」

みなさん、おはようございます。上森 優斗です。

これまで平穩だった海鳴市にジュエルシードと呼ばれるロストロギアが落ちてきて早三週間。ユーノが回収したジュエルシードは五個となり残り十三個となりました。

そして今日もせっせとジュエルシード探しをする俺なのです。

今日明日とお休みなので探索に大分時間がさけてユーノも嬉しそうにしています。

一方、なのははこの連休を利用して、アリサ、すずかの仲良し組で温泉街へ行っています。

もちろん保護者として高町夫妻や恭也さんと忍さん、ノエルさん、フアリンさんが同行しています。

俺にもお誘いが来たのだが、ジュエルシードの件とこの前のお茶会の件があったので今回は丁重にお断りをいれ、なのはたちに存分と楽しんできてもらおうって事にした。

さすがにいつ発動するかわからないジュエルシードがまだあるのに魔導師二人がこの街の中心を離れる訳にはいかないからな。

「まあ、そういう訳で」

「何がそういう訳なんや？」

「いや、こっちの事」

この前とは違うルートで周っていて、休憩のために来たこの図書館ではやてと再び会っていた。

前にあった後、自宅の電話番号を教えて時々話していた。

それを見かねた両親が携帯を買い与えてくれてかなり便利に使わせてもらっています。

はやてと携帯のアドレスを交換してからは寝る間にちょっとした話をしてる。

ちなみになのはたち三人組とはアドレス交換済みです。

「あ、そうだ」

「どないしたん？」

俺のつぶやきに聞きに来るはやて。  
いい事を思いついたのだ。

「はやてちゃんがよかつたらなんだけどき、家に泊まりに来ない？」

「……お泊り？」

「うん、そう」

はやてはしばらくポカーンとして呆けていたが、嬉しそうに顔をほころばせた。

「うん、行く行く！ お泊りなんて初めてや！ ちょっとドキドキしてきた！」

はやてのテンションはウナギ登り。

やっぱり、一人きりの夜って寂しいよね。母さんがいて、父さんがいて、自分がいて。

本当ならまだ両親から愛情を受けて暮らしているはずなんだから。だから、提案してみたんだけど。よかった、喜んでくれた。

それに初めて会った頃より格段に明るくなって俺としてはうれしい限りだ。

「ところで、いつお泊りするん？」

「今日」

「……………今日!?!」

「あ、母さんと父さんに許可貰わないと。ちょっと待ってね」  
「ちよつ!?!? え!?!?」

ささつと携帯電話を取り出し、自宅にかける。

何回かのコール音の後、母さんが受話器に出た。

「あ、母さん? 優斗だけど」

『どうしたの、優斗?』

「あのさ、今日さ友達を家に泊めたいんだけど大丈夫かな?」

『大丈夫だけど、向こうの親御さんは了承してるの?』

「それに関しては大丈夫。OKだよ」

『そう。ところで友達ってなのはちゃん?』

「いや、はやてちゃんだよ」

『そういうことね、わかったわ。今日は腕によりをかけて晩御飯作  
つちゃうわよ!』

「ありがとう、母さん。父さんには俺の方から伝えておくよ」

『わかったわ、お願いね』

電話を切って再度電話をかける。今度は父さんに。

内容は似たような感じなのでカットさせてもらうが、結果を言えば  
了承だったので特筆しなくてもいいだろう。

「こっちはOKだよ」

「いくらなんでも急過ぎるんとちやう?!」

「ダメだった?」

「ダメじゃないんやけど、心の準備とかあるやないか!」

「じゃあ、今日のお泊りどうする?」

「……………行くに決まっとるやないか」

改めて本人からの許可も得た事なので、はやての準備のため一緒に八神宅に向かう事になった。もちろん車椅子は俺が押して行く。道中に今晚は何をやるうか、という話になった。

「やつぱここは王道のトランプ！ それも大富豪やで！」

「いいね、ババ抜きに七並べなんかもいいし。やつぱりトランプは大勢でやると面白いよね」

「せやな！」

「五人でやれば結構白熱しそうだね」

「五人？ あ！ そういえばユーノくんって子がホームステイしてるんやっただね」

「うん、会うのは初めてになるよね」

「せやね、話には聞いてるけど実際に会ってみたい」

「すぐ仲良くなれるよ。それにイケメンですよ？ はやてお嬢様」

「そら、余計に楽しみやな！ では執事くん、私の家まで飛ばしてもらおうか？」

「仰せのままに」

そんなふざけたやり取りを混ぜて笑い合う俺とはやて。

本当によく笑うようになった。

そうして到着した八神宅。やはり一人で住むには広すぎるな。

はやてが準備している間リビングで待っていてそう思う。

親戚の人がいない、まさに天涯孤独という身の上のはやて。彼女に寂しい思いをさせないために、もっと沢山の人と関係をもってもらいたい。

なのはたちと合わせるのはジュエルシードの件が一段落ついた時が丁度よさそうだ。

「おっ待たせー！ 準備できたでー！」  
「よし、それじゃあ行こうか」

リュックを抱えて来たはやてにそう返す。  
その後、戸締りをしっかり確認して俺たちは出発した。

私は今、見知らぬ住宅の前におる。  
どこにでもあるような普通の一軒家なんやけど、私にはとても魅力的に映っている。  
なんせこの家は私の友達の優斗の家なんやから。  
しかもお泊りや！

初めての友達の家でのお泊り。これほど興奮することは今までなかった。

私の車椅子を押していた優斗は玄関に行き、扉を大きく開けた後、私のところに戻ってきた。

「はやての家と違ってバリアフリーじゃないからいろいろ不便だね、ちよつと我慢して」

「え？ ちよ！？ うわわわ」

そう言つて、優斗は私を抱いてきおつた。  
しかもお姫様だつこつて、なんかよう分からんけどめっちゃ恥ずかしい！？

「な、優斗！ なにするん！？」

「いや、だつてこうしないと段差があつて家に入れないから。ちよつとの辛抱だから」

「……あ、うん。わかった」

確かにそうやね、うん、これは仕方がないんや。

そう自分に言い聞かせる私。お姫様だつこ自体初めてやないんやけど優斗にしてもらつとなんか恥ずかしい……。

そのまま優斗に抱っこされて優斗の家へ。

「母さん、ただいまー」

「お邪魔します」

玄関から廊下を渡りリビングへ。リビングに着いた私たちを迎えてくれたのは綺麗な黒髪の美人さんやつた。

「お帰り、優斗。その子がはやてちゃんね？ 初めまして、優斗の母の月夜です」

「あ、はい！ 初めまして八神 はやていいます。今回呼びに頂きホンマありがとうございます。お世話になります」

「そんな硬くならなくていいのよ？ 自分の家だと思つてリラックスして頂戴？」

今、お茶とお菓子を用意するわね」

そう言つて対面式のキッチンに向かつて行く月夜さん。

物腰が柔らかくて長い黒髪が魅力的な落ち着いた大人つて感じや。

この人が優斗の母親つても納得やな。いろんな意味で。

つて、言つか優斗に抱っこされたまま挨拶している場合じゃないんとちゃう！？

優斗に視線を送ると優しく微笑んで私をソファーにゆっくりと降ろした。

「車椅子取ってくるから待ってて」

そう言っただけで外に向かって行く優斗。

それを見送っている月夜さんから声をかけられた。

「はやてちゃん」

「はい、なんでしよう?」

「あの子が突然こんな事言っただけで驚いたでしょ?」

「……ええ、それは、まあ」

「あの子はね、とても優しい子なのよ。放っておけないのよ、手の届く人が困っているのが。小さい頃から大人びた子でね、よく周りの子たちの世話を焼いていたわ」

「よく分かります。優斗はホンマにお人よしで、十も二十も年上に見える時があります」

優斗は年不相応な性格や話し方をよく見かける。でも、しっかり子供で。

そこらへんホンマ訳の分からない人やけど、優しくて遅しくてかっこええ男の子。

「そんなんじゃないよ、ただ気に入らないんだ、そういうの。自分勝手なんだよ、俺は。」

と戻ってきた優斗が会話に入ってきました。

「って本人は言ってるんだけどね?」

「ふふ、そうですね」

笑い合う私たちに優斗は不思議なような顔をした。

ああ、今日は楽しい日になりそうや。

夕方になりユーノちゃんと優斗のお父さんが帰ってきました。

「初めまして、ユーノ・スクライアです。よろしくね、はやて」

「優斗の父で優介と言う。いつも息子と仲良くしてくれてありがとう、今日はゆっくりして行くと良い」

「改めまして、八神 はやてです。今日はお世話になります。ユーノくんやったね、よろしくね」

自己紹介の終えた私たちは雑談ののち、夕食となった。

献立はちらし寿司にエビやイモ、シソなどのてんぷらやかき揚げにお味噌汁。

どれもおいしそう匂いを立ち上げ、食欲をそそる。

そして何よりも一緒に食べる人がいる。それは私がずっと望んでいた事やった。

「あ、優斗！ そのエビ、僕が食べようとしてたんだよ！」

「こづいづのは早い者勝ちというのが鉄則だよ？」

「じゃあ、これは私がいただきや！」

「しまった！ 俺のイモ天が！」

「早いモン勝ちやで？」

繰り広げられる私、優斗、ユーノのおかず争奪戦。

「はいはい、まだまだあるから喧嘩しちゃだめよー」

「子供が多いとにぎやかで良いものだな」

それを見守る優斗の両親の月夜さんと優介さん。

夕食が終って、次はみんなでトランプで遊ぶ事になった。

「どや！ 革命やで！」

「なん・・・だと・・・!？」

「あ、やった。ありがとう、はやて」

「え？ どういう事や？」

「こういう事」

「なにい!？ 4のスリーカードに3のペア!？」

「上がりだね」

「しまった!？」

私の革命に驚く優斗。しかし、私の革命で一気に優位に立ちそのま  
ま一抜けを果たすユーノ。

それから白熱した戦いが繰り広げられた。

程よく続いたところで種目替えとなり、次に七並べ。

「誰や！ ハートの5で止めとる人!？」

「俺だけど？」

「早よう出し！ 私の手札が減らないやないか！」

「これが戦略と言うものです」

「意地悪と違う!？」

「そういうゲームだよ、確か」

私と優斗の絡みに突っ込むユーノ。

「あ、これで私は上がりね」

「クローバーの2か。じゃあこれで上がりだね」

と月夜さんと優介さんが仲良くワンツーフィニッシュ。  
そうやって時間を忘れてみんなで遊び続けた。

とても、とても楽しかった。

そして気づけば夜も更け、日付が変わろうとしていた。

「もうこんな時間か」

「…………ふあ」

「めっちゃ眠そうやね、ユーノくん」

そんな時月夜さんが提案を出しました。

「今晚は皆で一緒に寝ましょう？ ね、ダメかしら優介さん」

「良いんじゃないか？ みんなはどう思う？」

「俺は別にいいよ」

「うん、僕もかまいません」

「名案だと思います、月夜さん！」

そうしてリビングにスペースを作って寝床の準備を始める優斗たち。

私は、足が不自由やからソファアで待ってる事しかでけへん。

準備も整い優斗に抱っこされて私は布団に入った。

上から見て右端からに月夜さん、私、優斗、ユーノくん、優介さんの順番。

電気が消されて、みんな眠りに入っていく。

しばらく時間がたつと小さな寝息が聞こえてくる。私の隣の優斗は誰よりも早く眠っておった。私みたいな可愛らしい女の子が隣におんのに、よくもまあすんなり眠りにつけるモンやと少し頭にきたのは当然やと思う。

失礼しちゃうわ。ホンマ。

その奥の優介さんとユーノくんもすでに夢の中のようや。

「はやてちゃん、もう寝ちゃった？」

と月夜さんに声をかけられた。

「いえ、まだ起きてます」

私は月夜さんに向きあうために寝返りを打った。

「ねえ、はやてちゃん？」

「なんですか？ 月夜さん」

「はやてちゃんを抱いて寝ても良いかしら？」

「ええですけど……、どうしたんですか？」

私を抱いて寝てええかと聞いてきた月夜さんにその理由を聞いたら、月夜さんは少し悲しそうな顔をした。何かまずい事でも聞いてしまおうたんやろか？

「今日ね、はやてちゃんと過ごせてとても楽しかったわ。娘ができたみたいで。」

「……私ね、もう子供が産めないの。」

だからね、はやてちゃんみたいな娘がほしいな、って今日改めて思っちゃたんだ。優斗に不満なんて欠片も無いけど、女親ですもの娘を欲しがるのは当然だと思っの、これってダメかしら？」

「そんな事ないです。私を抱いてもらうくらいならお安いご用です」「ありがとう、はやてちゃん」

そう、私にお礼を言って、月夜さんはそっと私を抱いた。

その瞬間、私は月夜さんの香りと温かさに包まれて自然と顔が緩んでしまった。

とても気持ちが安らぐ。

「月夜さん、気持ちええです……………」

「そう？　ありがとうございます」

これ、なんやね。私が欲しかったもの。

「月夜さん、また、泊まりに来てもええですか？」

「良いわよ、いつでも歓迎するわ」

「ありがとうございます」

あまりの心地よさに、瞼が重うなってきた……………。  
もっと、この心地よさを味わっていたいのに。

「私、今日、泊まりに来てよかったです……………。すごく楽し  
くて……………。  
こんなにうれしい事はない……………です……………。」「

アカン、もう、ダメや……………。

「お休みなさい、はやてちゃん」

それが私の今晚最後の記憶。

月夜さんの腕に抱かれてこれ以上ないってほど安心して眠りに着い  
た。

## エピソード9「ありがとう」（前書き）

6000PV突破しました。皆さんありがとうございます。  
以後も精進して完結目指して頑張っていきたいと思います。

感想やアドバイスなどいただければとても嬉しいです。

では、本編へどうぞ。

## 「エピソード9」ありがとう

「送ってもらって、ホンマおおきに。ありがとうございます」

「いや、たいした事はないさ。泊まりたくなったら何時でも優斗に言いつけると良い。

今度は私が迎えに行くよ。遠慮はいらない」

「分かりました、またお世話になります」

はやてが俺の家に泊まりに来たその翌日。

午前中をテレビゲームに費やした後、昼食をすましはやてを自宅に送り届けた。

はやて宅まで片道徒歩一時間程と聞いた父さんが車で送ってくれる事になったのだ。

それで、さっきの会話となった訳だ。

「優斗、そしたらまたな！」

「ああ、またね。はやてちゃん」

はやてが自分の家に入るのを見届けて、とうさんは車を発進させた。帰宅中、色々と父さんにどうでもいい探りを入れられ……、言い方は悪いが少しウザかった。

確かにはやての事は好きだし放っておけないが恋愛感情かというところでもない、と思う。

ティーナの時と同じと答えて、父さんはそれ以上に聞いてくる事はなかったが。

肉体年齢は近いが精神年齢は三倍以上差があるんですよ？

感覚的には年の離れた妹と接する感じが一番近い気がする。

そうこうしている内に家に着き、俺はそのままジュエルシードを探すためにユーノと共に家を出た。

今度は住宅街ではなく街中の方を探してみる方針となり、ユーノは魔法で、俺は感覚で別れて探し始めた。

一応、探査系の魔法を使って街中を練り歩いているがスキルとしては魔力感知の方が群を抜いて秀でている。

僅かでも魔力を発していればその位置を特定できる自信はある。

まあ、沈静状態のジュエルシードの放つ魔力は極めて小さくある程度近づかないと感知できないのがネックである。

「そこの坊や、ちょっと良いかい？」

ふと、肩を軽く叩かれ呼びとめられた。

「はい、なんでしょう……か……」

振り返って驚いた。

オレンジ色の長髪に額に赤い楕円の石。すらりと長く伸びた手足に魅力的なスタイル。

美人が、そこに居た。

だが、俺はこの人を知っている。しかもちょっと前に会ったばかりだ……!!

「偶然だね、坊や……!!」

「アルフ、さん。でしたね」

「おや、名前を覚えてもらえてるとは光栄だね」

そこに居たのは紛れもなくフェイトの使い魔、人間形態のアルフだった。

「ちょっと話があるんだけど、良いかい？ 拒否は認めないよ」  
「ごじや、ダメですね。近くの公園に行きましょう」

そして、近くの公園に入り丁度いい広場に来た。

「隔離結界」

アルフの呟きとともに世界の色彩が変化する。公園で遊んでいた子供たち、談話を楽しむ大人たちは跡形もなく消えこの公園には俺とアルフさんだけとなった。

「話とは何ですか？」

「簡単な話だよ、ジュエルシードの件から手を引いてほしいのさ。あれは私のご主人さまが必要としているんだよ。だから邪魔しないで欲しいんだよね。」

ついでにあの白い嬢ちゃんの持つてるジュエルシードも全部こっちに渡してくれるかい？」

そう来るのは予想はしてたよ。

「それはできません。あれはユーノに返して、しかるべき場所に保管して貰わなきゃいけない」

「やっぱりそう言うかい。だったら……」

アルフから獣耳と尻尾が飛び出すと同時に魔力が集中して行く。

「力づくで言う事聞かすしかないね！！」

そう宣言したアルフは魔力を込めた拳を俺を目掛けて突き出した。もちろん俺はそのまま受けるなんて趣味は無い。プロテクションを

発動させ受け止めた。

「ほう、やるじゃない。前は油断したけど、今回はそうはいかないよ!」

「……できればやり合いたくはないんですが」

「はんっ! ゼロ距離で砲撃撃つといて良く言うよ!」

ガンツ! ガンツ! ガンツ!

と俺のプロテクションに何度も殴り込んでくるアルフ。

「その節は申し訳ありませんでした」

「敵に謝るなんて甘ちゃんだね」

アルフを戦闘不能しないと落ち着いてフェイトと話ができなかったとはいえ、攻撃したのは俺だから素直に謝ったが、痛い処を突かれてしまった。

「話を聞いてほしいんです!」

「聞く耳持たないね! 言う事聞かせたきゃ私を倒してみな!」

「……不本意ですが、そうしましょうか! セイヴァーソウル、セットアップ!」

『Stand by・Ready・Set up』

光に包まれ一瞬でセットアップを完了し、ソードラックから柄を引き抜き抜き魔力刃を展開し斬りかかる。

アルフはそれを回避し距離を取るが、すかさずライフルを構え引き金を引く。

「ショットバスター!」

「くうっ!」

よけられないと踏んだアルフは俺のショートバスターを防御するが、これは連射がきく。  
着弾でよろけたアルフに追撃を放つ。

「がつ!? あう……!」

着弾総数五発。相当なダメージと見受けられた。

「お願いします、俺の話聞いてください」

「嫌だね! それに私はまだ戦えるよ!」

突撃してくるアルフ。

強情なあたり微妙にご主人であるフェイトに似ているのかな?

「フォトンランサー!!」

アルフの突進しつつの射撃攻撃。

フォトンランサーをシールドで防御しながら反撃に備えた。

「ならこれで!」

『Chain Bind』

アルフの突進を紙一重で回避と同時に魔法を発動。魔力の鎖で相手を拘束する俺の唯一使える束縛魔法。チェーンバインド。アルフの右腕と俺の右腕を繋ぐ様に発動される。

「バインド!? こんなものッ!」

「それに気を取られている場合じゃないよ?」

俺は右腕を力いっぱい振り回し始める。

「なあ！？ うおおおお！？」

俺の右腕から魔力の鎖で繋がっているアルフはグルングルンと振り回されることになる。

横回転から十分に力をつけた状態で縦方向に変える。

そうすればもちろん……………。

「ガッ！？ ハッ……………！！！」

凄まじい音とともに地面に叩き付けられるアルフ。

チーンバインドをこういう風に使うの俺くらいなものだろう。

俺はアルフを叩きつけた所に近づきライフルを間近に突き付ける。

「勝負あります。もうこれでいいでしょう？」

「ば、バカ、言っちゃ、ない、よ……………。私は、まだ、負けちゃ、いないよ……………！！！」

本当に強情な人だ。でも、彼女をそうさせるほどにフェイトに何かあるんだろう。

「……………フェイトに何かあるんですね？」

「フェイトが、あんに、会ってから、くうはあ……………、元気がなくてね。

フェイトを惑わすあんなを叩き潰せば、フェイトもあんなの事を忘れて元気が出るとおもったのよ。ジュエルシードも手に入って一石二鳥だしね……………！！！」

息も絶え絶えにアルフがそう言った。

フェイトを“惑わす”か。そうかもしれない。

「俺がフェイトを惑わしてるっていうなら、そうかもしれない。でも、今のままでいい訳ないんでしょ？ アルフさん」

「何が言いたいんだい？」

アルフが真剣な目で俺を見る。さっきまでの敵意を宿した目じゃなく、何かを見定めるような。だから俺は真つすぐに見据えて答える。

「俺はフェイトを救いたい」

訳が分からないという表情で固まるアルフ。

それはそうだな、一回会っただけなのにこんなこと言う奴なんていないよな。

「変なこと言ってるのは俺自身が一番分かってる。だけど、放っておけないんだ、フェイトの事」

「あんたにフェイトの何が分かるって言うのさ！！」

確かにアルフの言うとおりだ。俺はフェイトの境遇を知らない。でも、分かるものもある。

「分からないよ。だから話してほしいんだ、フェイトの事を。助けられるかもしれないから」

「さっきから救うだの助けるだの、一体何様のつもりだいあんた！」「……………しがな子供は魔導師だよ。だけど、フェイトのために延ばせる手はある！」

アルフの問いにはっきりと答える。

彼女一人で抱え込まないで話してほしい。きっと力になれるはずだから。

「アルフさんだつてフェイトをこのままにしておけないんでしょ？だからそうまでして戦つてる。大丈夫、俺はフェイトとアルフさんの敵じゃない。それだけははっきりいえる」

「……どうしようもないバカだね、あんた。こっちは敵だつて言うのにそんなこと言っちゃってさ」

「そういう点ではバカかもしれないですね」

アルフの呟きにそう言い返した。  
その時だった。

キーン

「この感じは！」

「まさかジュエルシードかい！？」

ジュエルシードが放つ魔力。やはり俺が残つて正解だったか。  
直後ユーノから念話が来た。

優斗！ ジュエルシードが！

うん、すぐに向かう！

僕の方が近いみたい、結界を張つてできるだけ時間を稼ぐよ  
任せた。だけど無理しちゃだめだよ、ユーノは戦闘には不向きな  
んだから

分かつてるよ

ユーノが万全の状態だから、バインドで拘束してくれるだろう。  
防衛戦に時間稼ぎは結界魔導師の十八番だ。

「行かなきゃならないねえ！」

「その体で無理しないでください」

「あんたが、やったんだろ！」

「はい、申し訳ないです」

なぜだろう？ 向こうから仕掛けてきたのに責められるとつい謝ってしまう。

正当防衛だよな？ とまかく、早く行かなきゃ！

「とりあえず応急処置！」

向いていないとはいえ、できない訳じゃない治療魔法をアルフに施す。

やらないよりは多少はましでしょう。

「敵に治療魔法なんて……。ほんと甘ちゃんだよ、あんた」  
「アルフさんは動けるようになってから来てください」

俺はそう言い残し、海鳴市の空に飛び立った。

ジュエルシードの魔力反応を追って飛行を続けると違う魔力が高速でジュエルシードに向かっているのを感じ取った。

この速度から見ると間違いなくフェイトか……！！

向こうの方が先に着く、こちらも早く向かわないと。

そう考えて俺はスピードを上げた。

私は今、河川敷上空で陣取りジユエルシードの暴走体と戦っている。全長約18メートル、全高約7メートルの巨体。この星の原生生物“ザリガニ”を取り込んだものと推測。

私には電気の魔力変換素質を生まれ持っている。そのため私の放つ魔法には電撃の属性が付加される。

相手は水生生物であり移動できても陸上のみため空中から攻撃するだけで簡単に無力化できると思っていた。

そう、思っていた……。

「くっ……！！ 攻撃が効いてない!？」

先ほどからフォトランサーを数十発も叩きこんでいるのに弱るところかひるみもしない。

電気に耐性を持つてる……!!?

「なら、バルディシュ!」

『Yes, Sir, Thunder smasher』  
「サンダースマッシャー!!」

私の撃てる高威力の砲撃魔法。これなら……!!  
着弾の衝撃で川の水しぶきと爆風が暴走体を覆う。

「やった……?」

そう思った、瞬間だった。

爆煙を突き破って暴走体が私に向かって跳躍してきたのだ。

あまりの事に驚き一瞬動きが止まってしまった。

それを相手が見逃さずその大きなハサミで私を捕えようと突き出してきた。

「しまった!!」  
『Defensor』

バルディッシュがとっさに防御魔法を発動してくれたが、暴走体のハサミに捕えられてしまった。

今にも防御ごと私を押し切るように凄まじい力が加えられる。

一瞬でも気を抜くと防御が維持できない。これじゃあ移動魔法を使つて離脱もできない……!!

「くっ……!!」

このままじゃ、持たない……!!  
そんな時だった。

「セイヴァーソウル! ロングレンジソード・スライサーシフト!  
!」

『Yes, Master, Long range sword,  
Slicer shift』

「せいやああああ!!」

一閃。

刃渡り4メートルもの長剣状態の魔力刃で暴走体の硬い甲殻をもつともせず斬った。

暴走体は悲鳴のごとく金切り声をあげ私を捕えていたハサミを緩めた。

「今だ!」

この機に私は上昇し安全圏に移動する。

そこで私は、その攻撃をした魔導師の姿を確認した。

まるでロボットの様な白い装甲をもつバリアジャケット。

この人は

「大丈夫だった？ フェイト」

「ゆ、優斗？」

そう、私を助けてくれたのは、私に話を聞かせてと行ってきた男子。

上森 優斗だった。

「私は大丈夫。……痛ッ!？」

体をむしばむ痛みが私を襲った。ほとんど自爆に近い感じで優斗に攻撃した時のダメージが治りきっていないまま暴走体と戦闘した結果が今の自分だ。

まだ少しはまともな戦闘はできない。

だけど、やらなきゃいけない!!

「無理しちゃダメだよフェイト。あいつの相手は俺がやる。封印は任せたよ？」

「え？」

私は啞然とした。

さっきの事もそうだけど、敵である私を助けてくれるなんて。まして封印を任せるって。

彼らと私たちはジュエルシードを巡って争う関係だというのに。

そんな私をよそに彼は暴走体に攻撃を仕掛ける。

「たあ！ はあ！ せいっ！」

一閃、二閃、三閃と暴走体の攻撃をかわしながら魔力刃で攻撃して行く。

暴走体のハサミが風を切って振り回されるがかすりもしない。  
響く暴走体の悲鳴。

「さて、そろそろトドメだ」

『Divine Buster』

弱った暴走体の真上に陣取るとライフルを構えた。優斗の足もとにミッドチルダ式の円形魔法陣が展開される。

「デイベインバスター！ ストライク」

『Strike Shoot』

「シュートオー！！」

ライフルの銃口から放たれる砲撃。それはまさに高密度の魔力の柱。砲撃は暴走体の真芯を捕えていた。暴走体は上からの圧力に反り返るように痙攣し、砲撃の終息に伴い沈黙した。

あれだけの甲殻を貫く砲撃魔法。

デイベインバスターの貫通能力を重点的に強化したバリエーション。  
………！

「さあ、フェイト。封印を」

「え？ あ、うん」

私は促されるまま封印の準備に入る。

「バルディッシュ」

『Yes, sir, Sealing form, Setup』  
シーリングフォームに変形したバルディッシュ。その切っ先を暴走体に向ける。

「捕獲！」

放たれた光線が暴走体に当たり、帯電を伴って蒼い菱形の宝石が排出された。

そこに浮き上がる数字は？。

あれが私たちが求めるもの。ジュエルシード。

「ロストロギア、ジュエルシード。シリアル？、封印！」

『Yes, Sir,』

打ち上げた魔力が上空で雷雲を作りそこから無数の魔力の槍が暴走体に浴びせられる。

『Sealing』

暴走体を私の金色の魔力光が包まれ、少ししてそれが晴れた時そこには封印し沈静化したジュエルシードだけだった。

取り込んだ原生物は下の川に落ちたのだろう。

ここで私は優斗を見た。これを封印できたのは彼のおかげだ。

だが、そんな事関係ない。ジュエルシードが必要なんだ、なりふり構ってはいられない。

だけど、自然と私は優斗を見てしまった。それに気づいた優斗はただ優しく微笑んでいた。

「さあ、君が封印したんだ。君の物だよ」

私は優斗に促されるままジュエルシードに近づきバルディッシュをかざす。

『Captured』

ジュエルシードはバルディッシュに吸い込まれた。

バルディッシュはノズルを稼働させて排気する。これで一つ目。

「どうして?」

「ん?」

私は思わず問うてしまった。

「どうして助けてくれたの? 貴方たちもジュエルシードを集めているんでしょ?」

「必要、なんだよね? 集めないといけないんだよね?」

「そう、だけど……」

「実をいうと君の敵じゃないって事を信じてほしい、って下心もあるんだ」

そう言って彼は申し訳なさそうに笑った。

「それに、なんとなくだけど、ジュエルシード集めをしないと君がひどい目に遭うんじゃないかって不安、ってというのが一番なんだけどね」

その言葉に思わずドキリとした。

「だから、君を助けた。うっん、実際はそういう理由なんていらない。困っている誰かがいる、助けられる力が俺にある。それだけで助ける理由には十分だよ」

どうして………。

どうして、わかってくれるの？

「母さんが必要だって、言ったんだ」

ぽつりと、零れるように言葉が出た。

「私は母さんの力になりたくてジュエルシードを集めてるんだ」

なぜだろう………？

「そう、なんだ………」

「ジュエルシードを母さんが何に使うなんて分らない。けど、母さんがほしいって言ったんだ。だから私はジュエルシードを集めるんだ」

なぜ、話しているんだろう？

私は彼の敵なのに………。

「そっか、フェイトは母親思いの優しい子なんだね」

ああ………。どうして………？

私は悪い子なんだよ？ 輸送船を襲ったり、あなたに攻撃したりしたんだよ？

「困ったら俺に言ってくれ。いつでも助けに行くから」

優斗が差し出した手を私は自然と握っていた。

「よろしくね、フェイト」

「ありがとう、優斗」

温かくて心強くて優しい感じ。

私は初めて感じる気持ちに心をゆだねていた。

## エピソード10「俺ってホントバカ」

フェイトがジュエルシードを封印して一息ついたときアルフが合流した。

アルフは最初俺ににらみを利かせて唸っていたがフェイトが事情を説明してくれたおかげで事なきを得た。

その後、二人は彼女たちの家へと帰って行った。

ここで問題が発生している。

まず、俺の言動の矛盾点である。

アルフにはああは言ったけど、フェイトを見ていると放っておけないしジュエルシードを譲っても良いかもしれない。俺の目的は一応第一目標はこの街からジュエルシードを回収する事。

極端に言えばこの街からジュエルシードが無くなるのならばどっちの付いてもいい事になる。

だがそうするのはユーノへの筋が通らない。でもフェイトは助けたい。

あっちを立てればこっちが立たず。板挟みの状態だ、すごく困った。

そして、ユーノへの言い訳どうしよう？

この結界を張ったのはユーノだろうし、今までの戦いも見ていただろう。

本当にどう説明すればいいのやら。

そうこうしている内にビルの屋上にユーノを発見。

俺はユーノのそばに降り立ち、バリアジャケットを解除した。結界も解除され通常空間に戻った。

「ねえ、優斗？」

「うん、分かってる」

懸念しいたと通り、ユーノから問いただすような空気を纏って名前を呼ばれた。

「なんであの子にジュエルシードを譲ったか、でしょ?」

「そっだよ! 一体どういう事なの?」

「それは、えーと、その、なんだ」

なんて言ったものか。

「……………仕方がない、正直に話すか。」

「あの子が必要だって言ったんだ」

「そんな理由で!？」

「待って、詳しく話すから」

俺の今の考え、気持ちを洗いざらいユーノに話した。

フェイトの事、フェイトを救いたい事。

かなり複雑な事情であり、フェイト自身は仕方がなくああいう行動を取っている事。

「ごめん。誤って済む問題でもないし、筋が通らない事をしてるって分かってる。」

でも俺は彼女たちを、フェイトを助けたいんだ」

しばらくの間、沈黙がこの場を支配した。

「はあ……………」

溜息が一つ。

口を開いたのはユーノからだった。

「分かったよ………。優斗の好きにして。なんとなく優斗だからって納得したし」

「ありがとう、助かる。フェイトの件が解決したら、ジュエルシード全部ちゃんと返すから」

「うん、そうしてね」

よかった、どうにかなってくれた。

ユーノは大きな借りが出来てしまったな、ちゃんと今回とは別で返さないと。

自分勝手にほどがあるっていうか。それに加えてあぁなってほしいとかこうなってほしいとか、欲がありすぎる。

遺憾とも知れないこの感じ。激しい自己嫌悪に襲われる。

「俺ってほんとバカ。どうしたものかな………?」

思わずそう呟いてしまう。

時は移り夕方。

なのはたちが帰ってきた事が念話で伝えられた。

お土産とその時の話はみんなで明日、って事になった。

十分に楽しめたようであり、なのはの口ぶりからよくそれが分かった。

夕食を終え、ユーノとともに俺の部屋に入り通信の準備をした。

ティーナの父親が経営する会社から報告用に貰っていた通信装置だ。その会社はデバイスを製造販売する会社で新型デバイスの開発も

行っている。

カンのいい人なら分かると思うが俺のデバイスはセイヴァーソウルは新型デバイスの試作品なのだ。

新しいカテゴリであるアーマードデバイスの開発のデータ採集のため定期的に報告しなければならぬのだ。

定期的といってもこっちは基本平和だから管理局へ出向した時のぐらいしか報告しないんだけどね。

そんな事はさておき、セイバーソウルを通信機に繋げ通信を開始する。

相手は時空管理局執務管アレン・ヴィードリハ。アレンさんなので。

通信待機が少し続いた後に回線が開く。この回線はプライベートなので割かし繋がりやすい。

「アレンさん、今大丈夫ですか？」

「おう、優斗か。問題ない、大丈夫だ。で、何用だ？」

「ちょっと調べてほしい事がありました」

「調べ物？ 時間がかかりそうか？ こっちは何かと仕事を押し付けられてなかなか休めなくてな、今さっき休憩に入ったところだったんだ」

「あ、そうなんですか、それはすみません」

「で、なんなんだ？」

「テストロッサっていうファミリーネームの女性で何か心当たりありますか？」

「テストロッサ？ 聞いたことあるな……。ちよっと待ってろ」

画面の向こうで電子音が軽快に鳴り響く。こっちで言うキーボードを打っている音だ。

アレンさんの横顔を見ながらしばらくすると、ヒットしたらしくこちらにデータが転送されてくる。

『こつちでヒットしたもので一番名前が通っている人物を送ったがこれで合ってるか？』

ディスプレイウィンドウに表示された女性を見る。

黒みかかった髪の色をしている綺麗な女性だ。そして、顔立ちを見て確信する。

「ビンゴです。この人で間違いないと思います」

『優斗の頼みって事はそつちのジューエルシード関係に絡んでるって事だな』

「ええ、恐らく。むしろ首謀者の確率が高いと思います」

『そうか……。彼女はプレシア・テストロッサ。生物学を専攻している科学者で大のつく魔導師の一人でもある。所属していたアレクトロ社でもかなりの権限を与えられていた。経歴も華やかでまさに勝ち組だったんだが……』

フェイトの母親であろうプレシアの情報を説明してくれるアレンさんだが、途中で言葉を濁らせた。

「どうしたんです？」

『ちよつとな。26年前に実験の事故で娘と一緒に亡くなっているんだ』

「え……？」

その事実は俺を驚かせた。

フェイトの母親はすでに死んでいる？

しかも娘……。？ フェイトの事じゃないって事はフェイト

の姉だろう。

『いや、未確認だが恐らく死んでいるだろう、って言うのが正確だ。調査報告書では時空航行エネルギー駆動炉、通称ヒュウドラの暴走事故だそう。事故現場は相当な光景だ、生きていても無事ではないだろう。その後の調査でも見つからず死亡扱いだ』

「そうですか……」

『詳しいデータはお前のデバイスに送って置く、詳しい事はそっちを見てくれ』

「分かりました」

セイヴァーソウルがチカチカと点滅している。

データを受信して整理しているのだ。

『そうか、プレシア・テストロツサは生きていたのか。死んだと思ってた人間が生きててしかも犯罪に手を染めていたとはな……』

「何か事情があるんでしょうけど……。必ず彼女を止めます」

『ありがとう、そうしてくれ。それと、この情報の事は他言無用で頼むぞ。お前だから特別に提示してるんだからな』

「分かっていますよ」

『なら良いんだが』

「ところで、あれから三週間ほど経ちますがこちらに派遣される件はどうなったんです？」

『ああ、それか。お前がそっちに居るから後回しにされていたらしい。だが、数日以内にはそちらに到着するだろう。配属艦はアースラ、艦長はリンディ・ハラオウンさんだ』

「了解です。合流したら指揮下に入ります」

『OK、後は頼むぞ。用件はこれで終わりか？』

「はい、ありがとうございます」

『そうか、また優斗と一緒に仕事ができるのを待っているよ』

「俺を動かすのに手続きが難しいそうですけどね。その時はよろしくお願いします」

『おう、じゃあな』

「はい」

そうして、通信は終了した。

ふと、今まで無言だったユーノと目があつた。

「ん？　どうかした？」

「さっきの人が先の大事件の英雄、アレン執務管？」

「うん、まあ、そうだよ。俺とアレンさんの関係は知ってるよね？」

「この前に聞いたから知ってるけど、随分親しげだよね！？」

「うん、いや、だって戦友だし。それに向こうもフランクに接してくれって言っから」

「さすがってところだね、懐が大きいや」

先の大事件。

最終局面で管理局の一部がクーデターを起こし一躍大事件となった、俺が魔法と出会うきっかけとなった「賢者の石事件」の事である。管理局も被害が大きく人手不足に拍車かかった事件であった。

その首謀者が管理局のお偉いさんの一人だったなんて大々的に公にできるはずもないのでかなりあれこれ情報操作して民衆には報道して、事情を知ってる人にも口減令が徹底された。

その際に俺にも首輪みたいな感じで無理やり権限持たされた訳なんだが………。

「まあ、それよりもまずはデータに目を通さないと。セイヴァーソウル、お願い」

『Yes, Master』

通信機から取り出したセイヴァーソウルにプレシア・テストロッサのデータを表示させる。

読んでいけば読んでいくほど想像以上にすごい人だ。これだけの人をを使いつぶす気だったのだろうかアレクトロ社の上層部は。

プレシアが存在するという事は彼女の娘も存在している事も大いにあり得る。

両方とも助かっているなら今のようにはなっていない。

つまり、娘のアリシア・テストロッサはもう……………。

そして、これだけの知識に技術があれば参加していたかもしれないな。

#### 人工魔導師製造計画

「……………まさか？」

いや、あり得る。

夫と別れているようだし、仕事に忙殺されていたプレシアが新しい相手を見つけているとは考えにくい。

つまり……………フェイトは……………。

「くそ……………。思った以上に重い事情だな……………」

思わず悪態をついてしまう。

きつと辛くて辛くてどうしようもないのかもしれない。それでもフェイトは母親であるプレシアを想ってジュエルシードを集めているのか……………。

「どうしたの、優斗？」

「ちょっとね、事件の大まかな道が見えてきたんだ。それに、ジュエルシードの使い道も」

「本当なの!？」

「憶測でしかないから確証ではないけど、この事件の黒幕がプレシア・テストロツサならジュエルシードの使い道は……」

「使い道は……?」

彼女の境遇から考えて一番確率が高い行動は……。

「死者蘇生」

沈黙がこの場をしばし支配した。

「死者蘇生?」

「うん、死者蘇生の術式があつて膨大な魔力に願いを叶える力があればできるかもしれない。もし術式がないなら、それを可能とするロストロギアを入手するのに使うんだと思う。」

そうまでしても生き返らせたいんだよ、自分の娘を」

「死者蘇生なんて、そんな事できる訳ないじゃないかッ!!」

「でも、それにすがらざる得ない状況にプレシア・テストロツサが追い込まれているのは事実だ」

「そう、みたいだけど……。死者を蘇らせるなんて無理だよ!」

「もう彼女にとって、できるできないなんて関係ないんだ。やるしかなかったんだよ、きつと」

ただ、ジュエルシードを集めるだけなんて言つてられないな。

フェイトの事、もっとよく知らなきゃならない。次に会うチャンスはジュエルシードが暴走した時。

分かりあえるはずだ俺たちとフェイトたちは。

そこでふと思いついてしまっ。

フェイトが追い込まれた状況になればやりかねない。手っ取り早くジユエルシードを探す方法。

ジユエルシードに魔力流を撃ち込んで無理やり暴走させる。一つならまだいいが近くにまだあれば複数のジユエルシードが一度に暴走する事になる。

そんな事をすれば、この街どころか時空振すら起きかねない。

「早まるなよ………フェイト………」

そう、俺は咳かすにはいられなかった。

## エピソード10「俺ってホントバカ」(後書き)

私の小説を読んで頂いて誠にありがとうございます。

本編とは関係ありませんが、ふと思ったのですが桃子さん若すぎません？

33歳という設定で長男の恭也は19歳。

え？ 14歳で生んだの？

とら八の設定を知らないとすごく誤解しますよねこの設定。

## エピソード11「分かりあえるんだよ！」

あれから数日が経った。

学校が終わると俺となのは、ユーノは集まってジュエルシード探しするのが日課になっている。

なのは塾がある日は参加できないがかなり意欲的であった。

ただユーノのために頑張っているって訳だけじゃなく、フェイトの事もあるようだ。

なのはが温泉旅行から帰ってきた次の日の放課後、俺たちは集まって今まで集まった情報をなのはにも教える事にした。

輸送船襲撃から端を発すジュエルシード事件。

その黒幕の存在。フェイトの行動理由。ジュエルシードの利用目的。確たる証拠のない憶測にすぎないが、あながち間違っていないだろう。

なのはには重いと思ってかなりぼやかして説明したが、それでも十分に理解してくれた。

その次の日から特に意欲的になのは行動していた。やはりなのはもフェイトの事を放っておけないようだ。

目にはしつかりとした意思が感じられた。

それに伴って、なのはの魔導師としての実力がメキメキと向上している。

初期に教えた魔法の錬度は空き缶にダイバインシューターを百回連続で当てられるほどになった。

他にもバインドやフェイントを要いた戦い方も収め、魔導師見習いは卒業かもしれない。

俺との模擬戦でも十分に戦えている、その実力は折り紙をつけても

いい。

「……こんな短時間でここまで成長するなんてありえないと思えるほどだ。」

さすがは名高い「管理局の白い悪魔」なだけはある。もともと、この世界のなのはが管理局に入るかどうかは彼女に意思に任せるが……。

夕暮れも過ぎ、夜の蚊帳が下りた午後七時過ぎ。

「あー、タイムアウトかなあ？」

「そうだね、もう遅いし今日はここまでにしようか」

「僕はもう少し残って探してみるよ。だから、晩御飯残しておいてね、優斗」

「わかったよ、ユーノ」

ユーノが俺の肩から飛び降りた。

そうして、俺たちが帰路に着こうとした時だった。

強い魔力反応。

「これは!?!」

「なんなの!?!」

「落ち着いて、なのはちゃん、ユーノ」

空は徐々に曇り黒い雷雲で覆われて行く。そして雷鳴が響き雷が落ちる。

魔力反応はアルフのもの……!?!?

魔力流を撃ちこんでジュエルシードを強制発動させようという事か!

くそっ………！ 懸念していたことが本当に起きてしまった。

「こんな街中で強制発動!?」

ユーノが飛び出し足元にミッド式の円形魔法陣が展開される。

「広域結界………！ 間に合えっ!!」

このままでは一般市民に被害が出かねないと考えたユーノは即座に結界を展開してくれた。

「レジングハート、お願い!!」

「行くよ、セイヴァーソウル!!」

即座に俺となのははバリアジャケットとデバイスを展開。 戦闘準備に入る。

「あ、あれ!!」

なのはの指さす方向に青い光の柱。 間違いなくジュエルシールドが発動したものだ。

魔力の感じからしてまだ周りの生き物を取り込んで暴走体になっていないようだ。

逸早く封印しなきゃならない。ここからなら長距離封印できるかもしれない。

「あの子たちの仕業!? なのは、すぐに封印を!!」

「なのはちゃんならできる!! ここから封印するんだ!!」

「うん、わかったの!!」

なのははレイジングハートをシーリングモードに移行して構える。  
目標は俺たちがいる大通りのずっとずっと奥、地上に浮いているジ  
ュエルシード。

一直線上に目視できる俺たちが少し有利か？

「あれは………!？」

俺たちとは反対側から伸びてくる金色の魔力光の筋。あれは間違い  
ない、フェイトのものだ。

なのはも構えた杖の先から魔力光を飛ばしジュエルシードを捕える。  
……向こうから人影。フェイトがジュエルシードに向かっ  
てきている

俺たちもジュエルシードに向けて移動を開始する。なのはは移動し  
ながら封印の術式を維持しながら。

お互いがはつきりと視認できる距離にまで来た。

「リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアル??」

なのはとフェイトの声が届く。

「封ッ！」

「印ッ！」

なのはとフェイトによって沈静化し封印されたジュエルシード。そ  
れに刻まれた数字は十九番。

ジュエルシードはこれでいい。次が問題だ。

あのジュエルシードを誰が持つか、という事。

距離で言えばこちらが近く、なのははジュエルシードに手が届くと  
ころに居る。

「やった！　なのは、早く確保を」  
「そうはさせるかい！！」

ユーノの言葉尻に噛みつくようにアルフが叫んだ。

真上からの強襲。ユーノが防御結界を展開し受け止めてはじいた。狼形態のアルフがこちらを唸りながら睨みつけてくる。

そして、なのはの視線の先に電灯の上に立つ黒衣の魔法少女、フェイトがいる。

「フォトンランサー！！」

アルフの叫びと共に放たれる魔法。狙いは……俺！？  
後ろに飛びのき回避する。

「あんたの相手は私だよ！　三度目の正直ってやつさ、あんたは私が倒すツ！！」

「そこまで目の敵にするほどですか？！」

アルフの突進を避け距離を取る。目的はフェイトになのはを討たせてその後は二人がかりで俺へ勝負って事か……？  
だが、あまりなのはを見くびらない方がいい。

まあ、それは別として。アルフは俺を警戒してミドルレンジで構えている。

俺がなのはに合流しようとしても道をふさぐように魔法を放ってくる。

こっちも応戦するがうまくかわしてくる。本当に俺の足どめが目的のようだ。

フェイトの事に気をかけるのもそうだが、使い魔である彼女も説得しなければならぬ。

いい機会だ、暑苦しい考えだが俗に言う“拳で語り合う”としまし  
ようか。

私の目の前には、あの子がいます。

黒いバリアジャケットの魔導師。名前はフェイトちゃん。優斗くん  
から教えてもらったの。

辛い境遇でお母さんのためにジュエルシードを集めてるそうです。

フェイトちゃんのお母さんはどうしてこんな事を自分の子供にさせ  
るのか分からない。

けれど、こんな事は間違ってる。やっちゃいけない事なんだ。

フェイトちゃんもその事を分かっている。分かっただけでやっている。

アリサちゃんとすずかちゃんと出会った頃はまだ友達じゃなくて。

アリサちゃんがすずかちゃんに意地悪しているように見えたから、

アリサちゃんとケンカして。

話ができなかつたから、分かりあえなかつたから。

私が本当の事を言えなかつたからケンカになつて。

すずかちゃんが止めてくれたおかげで私たちは仲良くなれた。友達  
になれた。

……目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないの  
かもしれない。

だけど、知りたいんだ。本当の事。きっとフェイトちゃんの力にな  
ってあげられるから。

私は一歩踏み出した。

「私はなのは、高町 なのは。私立聖祥大付属小学校三年生」

私は自己紹介しました。けど、フェイトちゃんは私を見続けるだけで何も言っはくれません。

『Scythe Fome, Setup』

フェイトちゃんのデバイスが鎌のように変形して魔力刃が展開されました。

私は杖を両手で持って構えます。

ねえ、フェイトちゃん。何がフェイトちゃんが寂しい目をする理由になったの？

フェイトちゃんは一気に飛びあがりデバイスで斬りかかってきました。

『Flier Fin』

私は飛行魔法で高く飛び、それをかわします。そこから私たちの攻防が始まりました。

「フォトンランサー！」

「デイベインシューター！」

お互いの使う魔法の名前。

「ファイヤー！」

「シュート！」

同時に放たれた魔法はお互いで削り合い相殺。

その後も何度もフェイトちゃんの金色の魔力弾と私の桃色の魔力弾が交差します。

早く動きながらの空中戦。フェイトちゃんは高機動型の魔導師。

優斗くんが言うには私には高機動戦闘は向いていないそうですが、優斗くんのおかげで私はフェイトちゃんとしつかり戦える。

その時、フェイトちゃんが視界から消えました。

高速移動魔法！？　と言う事は、後ろ……………！

『F a s h M o v e』

私も高速移動魔法で対抗しフェイトちゃんの後ろを取ります。  
今なら当てられる！

『D i v i n e S h o o t e r』

『D e f e n s o r』

私の射撃魔法はフェイトちゃんの防御魔法で防がれてしまいました。  
だけど、距離はとれた。今なら……………！

「フェイトちゃんッ！！」

「ッ！？」

私の呼びかけにフェイトちゃんが反応してくれました。

「優斗くんから聞いたよ、すごく複雑な事情があるって。だから、お話聞かせて！

協力できるかもしれない、助けあえるかもしれない。それなのに……………

今のまま、何も分からないままぶつかり合っの、私、いやだよ!」

私は叫びます。心から思った事を。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノくん、ユーノくんはそれを元通りに集めななきゃいけないから。」

私は、そのお手伝いで。だけど、お手伝いをするようになったの偶然だけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる。

自分の暮らしている街や周りの人たちに危険が降りかかるのがいやだから!

これが、私の理由!」

フェイトちゃんの目に揺らぎの色が見えました。私の言葉はフェイトちゃんに届いてる。

「フェイトちゃんの事が知りたいの! フェイトちゃんの力になりたいの!」

私は想いは揺るがない。フェイトちゃんの助けになりたい。仲良くなりたい。

友達になりたいの。

「だからお話して、教えて? フェイトちゃん理由」

私はフェイトちゃんを目を見つめます。強く私がここに居る事を示すように。

「.....どうして?」

「え?」

フェイトちゃんの呟きに疑問の声で返してしまいました。

「私は悪い子なんだよ!？」

「フェイトちゃん？」

フェイトちゃんは強くそう言いました。強くあるうとする想いとは違つてその姿はとても弱々しく見えました。

「関係のない人にひどい事をした！ 他人の物を無理やり奪つた！ 輸送船も襲つた！」

フェイトちゃんは今にも泣きそうで、近くにいたいって強く思いました。

「そして何より、母さんの期待に応えられない私なんて……」

私はフェイトちゃんにゆっくりと近づいていきます。

「優斗もあなたも、どうして私に優しくするの？ 私たちは敵で、相容れない関係なんだよ？」

私はフェイトちゃんをそつと抱き締めました。

私が落ち込んだ時、欲お母さんにそうして貰つたように。優しく、それでいてしっかりと。

「そんな事ないの。私たちは、分かりあえるんだよ！」

「……」

その後、しばらく沈黙が続きました。複雑な事情を持つフェイトちゃんだから心の整理が必要なんだと思います。それに、ずっと張りつめて体に入れて過ぎていたと感じたの。休む事も助けを求める事も大事なんだよ？

「優しくしてもらってもいいのかな？」

「私はフェイトちゃんに優しくしたいの。優斗くんもそう思ってるはず」

フェイトちゃんの問題にそう答えます。

「………なのは」

「うん？」

「なのはって呼んでいい？」

「もちろんだよ！ フェイトちゃん」

私はそう言ってフェイトちゃんに微笑みかけます。フェイトちゃんも笑ってくれました。

「これで私とフェイトちゃんは友達だよ！」

「友………達………?」

言葉を交わして、お互いを思い合って、名前を呼び合ったら、もう友達だよね。

「ありがとう、なのは」

「うん！」

私たちは自然と笑い合いました。

今日、私には新しい友達ができました。

名前はフェイト・テストロツサちゃん。すっごくすっごく優しくて  
お母さん思いの素敵な子。

これから、ずっと仲良くしていけたらいいな、って思いました。

## 「エピソード12」よろしくね

なのはがフェイトと対峙し魔法を撃ち合っている。

横目で見てみたが、互角の戦いを繰り広げられている。なのはなら、フェイトをうまく説得してくれるかもしれない。

「よそ見とは余裕だねッ！」

アルフが俺目掛けてその鋭利な牙で喰らい付こうとしたがプロテクションではじき返す。

空中でぐるり回りと体勢を立て直すアルフ。

「あんだ、フェイトを助けたって言ったよね」

「うん、言ったよ」

「私はねえ、生ぬるい所でぬくぬくと育った甘ちゃんが知った風な口を聞くのが大嫌いなんだよッ！！！」

アルフが叫ぶ。フェイトの境遇を見ればアルフがそう思うのも仕方ないと思う。

だけど、俺ははっきりと言う。俺の意思を。

「育ちは確かにそうだよ、ごく一般的な家庭に生まれて普通に生きて来たよ。」

「……でも俺は魔法に出会って、色々と見て来たんだよ」「何を見たって言うんだい？」

俺の言葉にアルフが聞いてくる。

「賢者の石事件を知ってる？ 俺はそれに巻き込まれたんだ。そこで辛い事、悲しい事、許せない事。沢山見せられたよ。魔法という存在が憎いとも思った事があるよ。」

約一年前、あの事件がきっかけで俺は魔法の力を手に入れた。

力は使う人によってその形を変える。「賢者の石事件」の首謀者であったガーランドという男も元は元老院の考えに賛同できなくなつたから賢者の石の力を欲した。

最初は管理局の慢性的人員不足を解消するために人造魔導師や戦闘機人など非人道的なものに頼らず、今いる魔導師の質を上げるためにその力を手に入れようとした。

だけど、彼は闇に溺れて、力に呑み込まれて暴走してしまった。

そんな結末を知つた俺だから言える。魔法は人を狂わす。

それでも俺は……。

「この力は人を助ける力がある！ 俺はこの力を間違つた形で使わない、そう決めた！ だからフェイトを助ける！！」

今まで俺の言葉を黙って聞いてくれていたアルフが口を開いた。

「そうかい、あんたも魔法の闇を知ってるって事か。それでも私の思いは変わらない！

私を納得させたきや力づくでやってみな！ あんたの魔法で形でさ

！」

「言われずとも！」

俺はライフルをしまい、セイヴァーソウルに告げる。

「セイヴァーソウル、ライトモード」

『Yes, Master, Light Mode』

背部ユニットと肩と腰の装甲、ヘッドギアが無くなり胸部装甲が簡略化される。

軽装状態のライトモードになり、両拳を打ちつけて気合いを入れ構えた。

「何のつもりだい？」

「あなたのような人は拳で語り合った方がいいと思ひまして」

そう俺が言つとアルフは人に変身してニヤリと獣じみた笑みを浮かべて構えた。

「そうかい、じゃあ……」

「行きますよッ！」

それを合図に俺とアルフのぶつかり合う。

魔力のこもったそれがぶつかり合えばそれ相応の衝撃波を生む。そして、攻防が始まる。

「はあっ！」

「フッ！」

正拳、ひじ打ち、上段蹴り、足払い、踵落とし。お互いの体を武器にして。

掌、小手、ひざ。お互いの体を盾にして。

息を突かせぬ速度でぶつかり合う俺とアルフ。

「フォトンランサー！」

「デイベインシューター！」

お互い拳を杖にしたの魔法がぶつかり合う。格闘と魔法を打ち合い  
凌ぎ合う。

「やるじゃない！」

「どうも！」

今のところは互角を演じている。だが、互角では決着はつかない。  
だから俺は力を惜しまない。アルフもそう思っているはずだ。

「フェイトを助けるって事はそう簡単な事じゃないんだよ！」

アルフが言う事は正しい。俺の予想道理なら、彼女を本当の意味で  
助ける事は難しい。

妄執にとらわれ狂ってしまったプレシアを正気に戻してやらないと  
フェイトは心から笑ってくれないだろう。

「どんなに難しくても、必ずやり通して見せる、フェイトを救って  
見せるッ！！！」

攻防の中で俺たちは拳と言葉を交わす。

「赤の他人がどうしてそこまでしようとするんだい！」

「放っておけないから！ 手を伸ばせば届くから！ 思い上がりだ  
の偽善者と言われてでも構わない、俺は自分勝手だから、俺がやり  
たいからするんだ！」

「このお人好しの大甘ちゃんがああああッ！！！」

「だからなんだああああッ！！！」

さっきよりも強くぶつかり合う俺とアルフの拳。

ぶつかった際に生じた衝撃波が周りの物を大いに揺さぶる。

「これをくらいな！」

ラッシュで攻め立て、俺をガードで固めさせてからの大技……

・！？

アルフの右拳に魔力が集まる。仕掛けてくるッ！

「フォトンインパクトオツ！！」

腕をクロスさせて脇をしめ防御を固める。

そして、視界が光に埋まる。

「グッ、アッう！？」

一撃が重い……！！？ 防御の上からももってくる！

撃力を増大させる近接格闘魔法か、安くくらくらっていいものじゃない！

俺は一足飛びで後ろへ飛び、相手とリーチを取る。

お返しにこっちも大技、行くか！

「デイバインシューター」

撃ち出すものではない。デイバインスフィアを八個生成する。

俺はこれ进行操作しながら被弾したときに発生した煙を突き破ってアルフに突撃した。

「何！？」

相手の迎撃の突きをデイバインスフィアで弾き上げ、アルフの腹部に隙を作る。

右拳にデイバインスフィア。アルフの間合いに深く踏み込み、打ち

抜く！

「ガハツ！？」

アルフの体が浮く。そこにデイベインスフィアを六個、回転させながら叩きこむ。

苦悶の表情を浮かべながら二メートルほど浮かび上がったアルフの真下に陣取り意識を集中する。

「ハアア……………」

足元にはミッド式魔法陣、右腕には円環を纏う。ここで、決める！

「デイベインバスター……………」

右腕をアルフ目掛けて突き出し、放つ！

「メガストライクツ！！」

放った魔法はデイベインバスターの射程と誘弾性を切り捨てた代わりに威力と貫通力を特化させた近接型のバリエーション。その威力は従来のデイベインバスターの比ではない。

あの体勢から避ける事も守る事も出来ないアルフは直撃する以外に道はない。

轟音と共に爆煙が覆う。

「……………よっと」

そして、気を失ったアルフが落ちてきた所を受け止めた。

………これで納得してくれればいいけど。

こつちが片付いたのでなのはとフェイトの方が気になるな。アルフと戦ってて大分距離が離れたからこつちからじゃ様子が分からないな。

「とりあえず、合流しなきゃな」

俺はアルフを抱きかかえながらなのはとフェイトに合流するために歩き始めた。

ふと、思ったのだが、立派な女性であるアルフを普通にお姫様だっこしている訳だが、目を覚ました時にこの状態だったら喉笛を噛み切られる事なんてないよね？

ディバインバスター・メガストライクの直撃を受けたんだからしばらく気絶しているはずだ。

と、自分に言い聞かせながら振動でアルフを起こさないように静かにホバリングしながら移動していると、なのはとフェイトの姿が見えた。

丁度、バルディッシュにジュエルシールドが収納されていく所だった。

「あ、優斗くん！」

なのはがこつちに気がつき、フェイトもこちらに視線を移す。

「アルフッ!？」

「ごめん、気絶させちゃった。仕方なかったとは言え、ちょっとやりすぎたかも。」

本当にごめん………」

フェイトがアルフを案じてこちらに駆けてきた。アルフに近寄って安否の確認ができ、ほっと息を吐くフェイト。

「ううん、いいよ。アルフの事だから、こうなっちゃたんだよね？」

「分かるんだ」

「分かるよ、大切な家族だもん」

フェイトは優しく笑う。

張りつめていたような空気が目に見えて薄くなっている。なのはにフェイトを任せて正解だったみたい。

「う、う……………」

「アルフ！」

そうしている時に、アルフが目を覚ました。

おぼろげだがフェイトははっきりと認識しているようだ。

「ごめん、フェイト。負けちゃった……………」

「ううん、いいんだよ」

「でも、フェイトお……………！」

「大丈夫。大丈夫だから」

落ち着いて話をするために近くの公園へ移動した俺たち。

アルフはダメージで動けないため俺が抱っこしての移動となった。

公園に着いた後はゆっくりとベンチに降ろしたのはいいのだが、アルフの恨めしい視線が気になる。

話の内容はとりあえずジュエルシードの搜索は協力して行う事やなのはとフェイトの二人で封印したジュエルシードを保管する事が話された。

俺が合流する前にフェイトの事情を聞いてユーノと話をつけたよう

だ。

まず、第一目標として全てのジュエルシードの所在を明確にする事。第二目標はフェイトにジュエルシードの半分を渡し、黒幕の動きを見てなんとか話をして説得する事。

そして最後にジュエルシードをユーノに返してしかるべき場所に保管する事。

この三点が今後の行動目標となった。

「フェイトがそう言うんだから、私はそれでいいよ」

「ありがとう、アルフ」

フェイトの事を第一に考えるアルフだからこそその懸念だろう。やはり知ったばかりの人をやはり、そうやすやすと信じるといのが難しい話なのかもしれない。

「あなたにや負けたよ、あなたがどうやってフェイトを助けてくれるのか見届けさせてもらおうよ」

「うん、必ず通すよ。俺の想いを」

アルフの言葉に俺は答えた。

アルフもピリピリしていた空気も消えそれなりに俺の事を信じてくれたって事なのだろうか？

そうだと、嬉しいな。

そうだ、協力体制の証としても渡しておいた方がいいだろう。それに黒幕もフェイトが結果を示さないと何をするか分からないから。

「フェイトに渡しておきたい物があるんだ」

『Put Out』

セイヴァーソウルからジュエルシードを二つ取り出した。

シリアルナンバーは??と??。それをフェイトに差し出す。

「いいの?」

「もちろん。それにこれから一緒に行動する仲間なんだから」

「……………うん、分かった。ありがとう、優斗」

フェイトは受け取ったジュエルシードをバルディッシュに収納した。そこである視線に気がついた。そっちに顔を向けるとユーノが啞然とした表情で棒立ちしていた。

「優斗がジュエルシード持っているなんて、聞いてないよっ!?!」

「あれ? 言ってなかったっけ?」

「言ってないよ! 初めて知ったよ!」

「あー、それはうん、謝る。だから落ち着いて、ユーノ」

「誰のせいだと思っっているのー!?!」

錯乱したユーノを落ち着かせるのに少し時間を要したのは当然の事だった。

これは完全に俺の失態だな。誰しもうつかりというものはある、と言いつい訳になってしまったが精一杯の謝罪で勘弁願いたい。

ユーノが落ち着いてこれにて解散という流れになった。

「あ、ちよつと待って、フェイト」

「何? 優斗」

俺はフェイトの手を握った。

「え!?!」

フェイトは何か驚いたようだが、気にせず意識をフェイトに向けて

念じる。

何かあったらすぐに連絡して。すぐに駆けつけるから  
え！？……………あ、うん。ありがとう、優斗  
うん、俺たちが協力するから、フェイトばかり抱え込まなくて  
いいんだよ？

念話のチャンネルをフェイトに教える。感覚的なものだからこうし  
た方が早いのだ。  
フェイトも驚きから落ち着いて念話で返してくれた。

「む、優斗くんずるいの！」

そうやってなのはも俺と同じようにフェイトに念話のチャンネルを  
教えるようだ。  
お互いの念波を確認したのか二人がそろって微笑んでいる。とて  
も絵になる光景だ。

「たくさんお話ししようね！ フェイトちゃん！」  
「うん……………！」

さあ、今日は帰ろう。晩御飯もまだだから早く帰らないと。  
そう思っていた所、今度はフェイトに呼びとめられた。

「あの、えっと、ね。やっぱり、はっきりと言わないといけないと  
思っ……………」

俺となのはお互いのかをお見合わせた後、フェイトが何を言いた  
いのか予想がついた。  
フェイトに優しく微笑みかけて次の言葉を待った。

「これから、よろしくね。優斗、なのは」

「うん！ フェイトちゃん！」

「こちらこそよろしく、フェイト」

まだ影があるけど笑っているフェイト。

フェイトの笑顔。もっと見たいと思った。ずっとそばに居たいと思った。

その思考に気がついた時、俺は戸惑ってしまった。

……何をバカな、違う、きつとそうじゃない。俺は中身は三十代。身の程をわきまえる。

とりあえず邪な考えは討ち捨てて、先を見据える事にする。

このままジュエルシードが集まって行けばそのうち黒幕も動きだしてくるだろう。

きつとフェイトは俺たちの関係を黒幕に話さないだろう。

フェイトは賢い。下手をすれば黒幕が直接なのはや俺を襲いに来るかもしれないと考えているはずだ。

何か手を打たなきゃいけない。フェイトに頼んで黒幕に会わせてもらうか？

だが言つて、はいそうですか、と手を引く訳がない。

……ちくしょう、結局その場の一発勝負で何とかするしかないって事か。

内心の歯がゆい気持ちを隠しながら俺はフェイトとアルフを見送った。

フェイトとプレシアの関係も確認しなければならぬ。本当に親子関係だとしたら、俺の予測が真実だとしたらフェイト自身にも辛い

事を知らせざる得ない事になるだろう。

もしかして、フェイト自身は知っているのかもしれない。

どうすればいい？ どうすればフェイトが傷付かなくていい結果になる？

俺はその事ばかり考えていた。

## エピソード13「会いたいよ」

目の前のドアが空気の抜けるおと共に開き私はブリッジに入る。

「みんなどう？ 今回の旅は順調？」

「あ、はい。現在第3船速にて航行中です。目標次元には今からおよそ160ベクサ後に到達の予定です」

「そうですか」

私の問いかけに迅速かつ正確に報告してくれるクルー。

私は自分の席、艦長席に腰掛ける。

「失礼します、リンディ艦長」

テーブルに紅茶が置かれる。

「ありがとね、エイミィ」

私の名はリンディ・ハラオウン。時空管理局提督にして次元空間航行艦船アースラ艦長を務めている。

私とアースラクルーとはある命を受けて船を進めている。

「今回の任務……唯のロストログア回収って訳にはいかなそうね」

「そう、なのですか？ 艦長」

私の呟きに答えてくれたのはまだ幼さが残る男の子。私の息子でこの艦のエース。

執務管、クロノ・ハラオウン。

「今回の任務は第97管理外世界「地球」の一都市近辺に落下したロストロギア、名称はジュエルシード。その回収でしたよね」

「ええ、そうなんだけど……。依頼がアレン執務管からというのが、ね」

私の言葉に合点がいけない様子のクロノ。

アレン執務管は「賢者の石事件」の功績を称えられ執務管でありながら提督権限を持っている。

そのため、今回の任務は上からの許可も有り受理され私たちが受け持った。

「アレン執務管は「賢者の石事件」で活躍した英雄ではないですが、彼からの依頼に何か問題でも？」

「通報が現地出身の依頼魔導師からアレン執務管へつてのがちょっと気になるのよ」

「それが何か？」

「アレン執務管へダイレクトに通信できる人間なんてそうそう居ないわ。それに目的地到着後はその魔導師を指揮下に入れ情報を得た後、彼の意見を積極的に受け入れて行動せよ、とも言われているのよ」

「アレン執務管にそれほどまで言わせる魔導師……。いったい何者でしょう？」

命を受け、直ちに出発した私たち。その航空時間中に調べるだけ調べてみたけど依頼魔導師の中にそれほどまでの実力を持った者はいなかった。

魔力ランクは高くてもB+。アレン執務管との関係も分からない。

「安心してください、艦長」

私が思慮にふけっているの見てクロノが言った。  
この任務に対して不安を感じていると感じ取ったのだろう。

「何が起きてても大丈夫です。そのために僕がいるんですから」

そう自信に満ち溢れた目ではっきりと言い放つクロノに頼もしさを感じる。

「ええ、そうね」

私は紅茶の味を楽しみながら第97管理外世界「地球」への到着を待つのであった。

私とアルフは母さんの待つている時の庭園に戻ってきている。  
母さんに結果を報告するためだ。

シリアル？。優斗のおかげで封印できたジュエルシード。

シリアル？？。私となのはで封印したジュエルシード。

シリアル？？、シリアル？？。優斗から譲ってもらったジュエルシード。

この4つ。これを母さんに渡すんだ。母さんの求めている物、ちゃんと持って来たよ。

喜んでくれるかな？ 褒めてくれるかな？

そして、母さんにお土産があるんだ。なのはの両親が経営している翠屋って喫茶店のシュークリーム。

私とアルフ、優斗になのは、皆で一緒に食べた時、すごくおいしか

った。

アルフなんてすごい勢いで食べるんだもの、ちょっと驚いちゃったよ。

失礼だよ、ってアルフに言ったら、みんな笑って気にしないで、って言ってくれて。

こんな楽しい時間なんていつ以来だろう？

母さんと食べたなら、もっとおいしいんだろうな。

そう思ったんだ。

ビシッ！

「うっ……！！」

ビシッ！

「あっ……！！」

ビシッ！

「うあうっ……！！」

玉座の間に鞭を打つ音が鳴り響く。母さんが私をぶつ音だ。私は両腕を拘束され吊るされ身動きが取れない。

鞭で打たれるたびに私はくぐもった悲鳴をこぼしてしまっ。

「たったの4つ。……これは、あまりにも酷いわ」

母さんの声。

ダメ、だったんだね。私、また応えられなかったんだね。

「はい……………母さん……………ごめんなさい」

母さんは玉座から立ち上がり私に向かって歩いてくる。

「良い？ フェイト。あなたは私の娘。大魔導師プレシア・テスト  
ロツサの一人娘」

母さんの手が私の顎を取り軽く持ち上げる。

「不可能な事など在于っては駄目。どんな事でも、そう、どんな事でも成し遂げられなければならない」

「……………はい」

私は絞り出すように母さんの声に答える。

「こんなに待たせておいて、上がってきた成果がこれだけでは、母さんは笑顔で貴方を迎える事は出来ないの。解かるわね？ フェイト」

「……………はい、わかります」

母さんの洛陽のない冷たい声が私の頭に響いてくる。

「だからよ、だから覚えて欲しいの。もう二度と母さんを失望させないように」

母さんの杖がまた鞭の形に変形する。

「・・・・・・・・ツ!!」

私は息をのみ、目をつぶった。

そして母さんの鞭が私の体を打ちつける。

ビシッ!

「あああつ・・・・・・・・!!」

ビシッ!

「ふうつ・・・・・・・・!!」

ビシッ! ビシッ! ビシッ! ビシッ!

何度も、何度も母さんは私を鞭で打つ。

痛い、痛いよ、母さん。

でも、これは母さんの期待に応えられなかった私が悪いんだよね?

「ロストロギア。母さんの夢を叶えるためにどうしても必要なの」

「・・・・・・・・はい、母さん」

「特にあなたは優しい子だから、躊躇ってしまう事もあるかもしれないけど、邪魔する者がいるなら潰しなさい。どんな事しても。貴方にはその力があるのだから・・・・・・・・」

母さんの手にある鞭が杖に代わる。それと同時に私の両腕の拘束が解かれ、床に崩れ落ちた。

「行ってきてくれるわね? 私の娘、可愛いフェイト」

私は痛む体でゆっくりと上半身を起こして答える。

「・・・・・・・・はい、行ってきます。母さん」

「しばらく眠るわ。今度は母さんを喜ばせて頂戴」

「・・・・・・・・はい」

母さんはそのまま玉座の間から出て行った。

私はよろよろと立ちあがり視線をずらすと、玉座の横にあるテーブルの上に紙箱が残されているのが見えた。

折角、優斗に買ってもらったお土産だったのにな。母さんと一緒に食べたかったな・・・・・・・・。

私は片足を軽く引きずり体をかばって歩きながら玉座の間を出た。

「フェイトツ!!」

アルフの声・・・・・・・・。私はそれで気が抜けたのか倒れこんでしまった。

アルフは私に駆けつけて受けとめてくれた。私を抱きかかえるアルフの両腕が温かいと感じた。

「フェイト、ごめんよ、大丈夫？」

「なんでアルフが謝るの？ 平気だよ、全然」

「だってさ、まさかこんな事になるなんて!!」

こんな事？ 私がボロボロになっちゃってる事なのかな？

「ちゃんと言われた物を手に入れて来たのに、あんなひどい事され

るなんて思っでなかつたし！ 知つてたら絶対止めたのに！」  
「ひどい事じゃないよ。私のためを思つて、つて」

これは私が悪い子だから受けた罰なんだから当然なんだよ。

「そんな訳ないじゃないか！ あんなのただの奴当たりだ！」

どうしてアルフはそんなこと言うの？

「違うよ。だつて親子だもん。」

「……ジュエルシードは母さんにとって、きつとすごく大事な物なんだ。ずっと不幸で悲しんできた母さんだから、私、何とかして喜ばせてあげたいの」

「だつて……でも、さあ……！」

私はアルフの顔にそつと手を添えた。

「アルフ。お願い、大丈夫だから。ジュエルシードを手に入れて帰つて来たら、きつと母さんも笑つてくれる。昔みたいに優しい母さんに戻つてくれる、アルフにもきつと優しくしてくれる。そうしたらさ、優斗やなのにも紹介したいんだ」

そう。そうなんだよ。だから……だから……だから……。

「大丈夫じゃないよ！ だつて、泣いてるじゃないか！」

「え……？」

泣いてる？ 私が？

アルフに言われて気がついた。頬を伝う水の感触。

「あれ………?」

視界が涙でかすんでくる。

どうしてか分からない。なんで涙が溢れてくるの？

フェイトばかり抱え込まなくていいんだよ？

ふと、優斗の言葉が頭に思い浮かんだ。

その瞬間、何とも言えない温かさが心から湧きだすのを感じた。それに比例するように涙が溢れてくる。

もう友達だから

優斗の言葉を、姿を思い出すたびに温かい気持ちが始まりだす。こっぴどく。

「会いたい、会いたいよ、優斗………!」

無意識に零した言葉。それを聞いたアルフは私をそっと抱き締めた。

「そうだね、早くあいつらに会いに行こう。フェイトはここに居ちゃいけないんだ。」

あいつらと一緒にジュエルシード全部見つけて、早くフェイトがこんな目に遭わないようになるう？ あいつらはいいい奴らさ、ホント、いい奴らだからさあ………!」

私は落ち着いてからアルフに支えられて自室で向い、身支度を整えてから時の庭園を後にした。

こんな鞭の跡だらけの体を優斗やなのはに見せられないから、アルフに治療魔法をかけてもらい見た目は大丈夫になっている。

そして転送魔法で地球にある私たちの拠点に到着した。窓から見る山吹色の景色。

会いたいな、会いに行っても迷惑じゃないかな？  
そう思っていた時だった。

フェイト？

ゆ、優斗！？

突然の優斗からの念話。あまりの事に驚いてしまった。

ど、どうしたの？

いや、もうそろそろ帰って来てる頃かな、って思ってた。どうだった？

優斗となのはに今日は母さんに報告してくる事は伝えてあった。

大丈夫だったよ、うん、何もなかったよ。褒めてくれたし、喜んでくれたよ

……そう、か。ならいいんだけど

間があった。優斗って鋭い時があるから、私が嘘をついてる事、気づかれちゃったかな？

でも、深く聞いてこないのは私を気遣ってる事なんだろうな。

やっぱり、優斗は優しいな……。

ねえ、フェイト

何？ 優斗

優斗の問いかけに私は答えた。なんだろう？

今、会えるかな？  
え・・・・・・・・！！？

優斗の予想外の言葉に私は動揺してしまった。それと同時に優斗が私と同じ事を考えていてくれた事に嬉しさを感じた。

心が温かくなる。

うん、会えるよ

じゃあ、会いに行くよ。どこで待ち合う？

どこ、にしようか？

そうだね、じゃあ、翠屋でいい？ 一緒にケーキでも食べよう。  
なのはも一緒にさ

分かったよ、準備する事もないしすぐ出かけるよ

それじゃ、翠屋で

うん

優斗に会える。そう思うだけで気分が軽くなる。

「アルフ」

「聞いてたよ、前の喫茶店だね？」

「うん、行くところ？」

「そうだね、おいしいもの沢山食べて元気になろう！」

私とアルフは部屋の戸締りをしっかりすると、足取り軽く出発した。  
早く会いたいな、優斗。

## エピソード14「貴方を拘束する！」（前書き）

PVが12000を超えました。本当にありがとうございます。  
これからも精進していききたいと思っています。

## エピソード14 「貴方を拘束する！」

「ごめん、待った？ 優斗」

「いや、全然。こっちこそごめんね、急に会いたいなんて言って」

「ううん、いいよ。気にしないで。……私も会いたかったから」

「そういうわけでゴチになるよ、優斗」

俺は今駅前にあり高町夫妻が経営している喫茶店「翠屋」でフェイトとアルフに会っていた。

って、さっきフェイトから聞きずてならない言葉を聞いたぞ！？

「あれ、なのはは？」

「ちよつと用事で遅れるってさ」

「そうなんだ」

「すいませーん、注文いいですかー？」

俺とフェイトはここに居ないなのはの事で話をしていたのに、アルフは自由だな。ともかくメニューをフェイトに渡した。受け取ったフェイトはメニューを開き、どれを注文しようか迷っているようだ。俺はすでに注文する物は決まっているから一緒に言うだけだ。

……昨日、なのはがフェイトを説得した時に取れた影がまたフェイトを蝕んでいた。

俺にはそう見えてならなかった。今日はフェイトが母親に会って経過報告をしに帰っていたはずだ。

それでこっちに戻ってきたら、これ、か……。

フェイトは気取られないように何時も通りに振る舞っているが、逆

にそれが痛々しくも感じる。

フェイトには心から笑っていてほしいのに、今はこんな事しかできないのが悔しかった。

「こんにちは、いらっしやい。優斗くん」

「はい、忍さん」

忍さんはよくここで恭也さんと一緒に翠屋のお手伝いをしている。今日もその日だったようだ。

「フェイトちゃんとアルフさんもゆっくりして行ってね」

「はい」

忍さんに注文する俺たち。

フェイトは苺ショートケーキと紅茶、アルフはフェイトと同じやつと追加でブルーベリータルトとシュークリーム。俺はレアチーズケーキにカフェオレ。

「ねえ、優斗」

「なに？」

注文を終えケーキとコーヒーが来るのを待っている間にフェイトが問いかけて来た。

「気付いてる？ もう少しで発動しそうな子がいるの」

「私にも感じてるんだから優斗も感じてると思うけどさ」

フェイトとアルフが次いで言った。

フェイトやアルフはすごいからな、感知範囲が広がってうらやましい。

「うん、近い。発動前にここまで強く感じるのは初めてだよ。今までにない強力なモノになりそうだね」

方向から考えて一番戦いやすいのは臨海公園あたり、かな。

「フェイトにアルフ、俺になのは、そしてユーノ。五人もいるんだ、大丈夫だよ」

「……うん、友達が一緒に居てくれる事ってこんなに心強いんだね」

「まあ、あんたは強いんだから当てにさせてもらおうよ」

「ご期待にこたえられるように頑張るよ」

そうしている間に注文した物が俺たちが居るテーブルに運ばれてくる。

「それじゃあ、一戦の前に英気を養うという事でいただきますよ」

「うん、ありがとう。それにごめんね、またご馳走して貰って」

「気にしないで、フェイト。俺が誘ったんだから当然だよ」

「そ、甘ちゃんから搾れる分は搾るときやいいんだよ」

「もう、アルフったら！」

「冗談だよー、本気にしないでくれよフェイト」

後になのはとユーノも合流してティータイムとなった。

こうして楽しくおしゃべりしていれば普通の子供なんだよな。どうして普通に、平和に暮らしていけないんだろう。

というかユーノ、まだ小動物形態のままなのか？ まあ、小回りが利いて移動面では便利なんだろうけど。

「ありがとうございましたー」

と会計の桃子さんの声。

アルフが全額の半分を占めているのは多いと思うんです。そんなに食べると夕食が入りませんか？

「ふー食った食った。こつちの世界はカリカリしたやつもいいけどデザートもうまいんだねー！」

「もう、本当にアルフは食べすぎだよ？」

「にははは、私もさすがにそう思うな」

「僕は見ているだけで胸やけがしそうだったよ……………」

上からアルフ、フェイト、なのは、ユーノの言葉。

「ごめんね、優斗」

「俺の事は別に大丈夫だけど、毎日のようにアルフがこんなに食べてたら、色々大丈夫なのかと心配だな」

「それは大丈夫、母さんの仕送りで十分やっていけるから」

「ならいいんだけど」

「優斗くんってお小遣い沢山貰ってるんだね」

「まー、知り合いの手伝いとかで臨時収入が多いからね」

「そうなんだ」

まあ、なのはの疑問も正しいんだよな。小学五年生が四人と一匹分奢れる財政面って気になるよな。

まあ、そんな事はさておき。場所は変わって海鳴市臨海公園。時刻はもう少しで六時三十分になろうという時。

キーン

強大な魔力反応、青い魔力の柱が雲を貫いた。

「封時結界、展開！」

ユーノが素早く結界を展開。世界が変色する。

俺、なのは、フェイトはすでにセットアップ済みで戦闘に備える。  
今回の暴走体は公園に生えている樹木を取り込んだモノだ。かなり  
禍々しく変形している。

今までにない強力な暴走体であると予想されるが俺はともかくなのはとフェイトが居るんだ、心配なんてないだろう。

「この中であなたが一番強いんだよ？」

「まさか」

アルフの冗談を軽く流す余裕まであります。というか人の心の中、  
読まないでくれませんか？

「私からいつてみるの！ デイバインシューター！」

『Divine Shooter』

なのはと掛け声とともに八つのデイバインシューファイアが生成されそれを暴走体目掛けて撃ち出した。狙いは敵の前方に万遍なく当たる軌道、初手はいい。

「にゃ！？」

だが、全てのデイバインシューターは暴走体が展開したバリアで防がれてしまう。

「うわーお。こいつ、生意気にバリアまで張るのかい」

「うん、やっぱり今までのより強いね。なのは、気をつけて」

「うん」

アルフは悪態をつき、フエイトはなのはを案じた。  
バリア……か、これは厄介な相手だな。だけど、この程度だと敵じゃないね。

低いなり声をあげて動き出す暴走体。

隆起する大地。暴走体は太い根を動かして攻撃を仕掛けてくる。

「ユーノくん、逃げて！」

「うん！」

ユーノは素早く距離を取りそのまま茂みへ。俺となのはは空に、フエイトとアルフは公園の遊具や像の上に退避する。

うごめく根つこを注視する。相手の攻撃手段はその根と暴走体から腕のように伸びている枝を伸ばしてくるものか……？

「アークセイバー、行くよ、バルディッシュ！」

『Arc Saber』

「スパイラルシュートだよ、レイジングハート！」

『Divine Shooter Spiral Shoot』

回転しながら飛ぶ斬撃、アークセイバーは暴走体の根を斬り裂きながら突き進みバリアに防がれるが、そこに回転させる事により貫通力を強化したデイバインシューターのバリエーションが追撃となる。さすがにこれにはバリアも耐えきれず突破され暴走体は悲鳴をあげた。

「今度は俺の番だ。デイバインバスター・ストライクシュート！」

『Divine Buster Strike Shoot』

バスターライフルを両手で構え暴走体の正面に狙いを定める。

「貫けッ!！」

デイベインバスターは一条の閃光となつて暴走体のバリアに衝突、しばらくの均衡のちバリアを突破して爆煙を上げる。

「今だ、止めを!！」

「うん! フェイトちゃん!！」

「合わせよう、なのは!！」

対極に陣取りデバイスを構えるのはとフェイト。

「行つくよー!！」

「貫け轟雷!！」

二人の掛け声が重なる。お互いの足もとには桃色と金色の魔法陣が展開される。

「デイベインバスター!！」

『Divine Buster』

「サンダースマッシャー!！」

『Thunder Smasher』

暴走体も必死の抵抗でバリアを展開するがダメージを受け弱った体ではバリアが維持できず、二つの砲撃に身をさらす事になった。ここまでの攻撃を受けた暴走体はすでに死に体だ。

「レイジングハート」

「バルディツシュ」

『Sealing Mode, Set up』

『Sealing Form, Set up』

なのはとフェイトはデバイスをシーリングモードに変形させ封印の準備に入る。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシード、シリアル?!」

「封印!」

封印完了。これで一安心って事だな。

「フェイトちゃん」

「いいの?」

今回のジュエルシードはフェイトが持つようだ。これでなのは五つ、フェイト五つ。

約半数のジュエルシードが確保できた訳だ。

「うちのフェイトもすごいけど、あんたの所のなのはもすごいねー」

「丁度同じ砲撃魔導師だったからうまく指導出来たけど、短時間でここまで成長するとはさすがに驚いたよ。もう“ちゃん”付けは卒業かな?」

そんな事をアルフと話しているとジュエルシードを回収したなのはとフェイトがこちらにやってきた。

「もう初心者は卒業だね、これからはもっと頼りにするからね?」

“なのは”」

「……優斗くん。うん！ まかせてなの！」

「フェイトはなのはと力を合わせてみてどうだった？」

「とても、心強いと思ったよ。……友達っていいんだね」

満面の笑顔のなのはと喜びを噛みしめているフェイト。

「三人ともお疲れ様！」

とユーノが俺の肩に乗ってねぎらいの言葉をくれた。

「さて、この後どう」

する？ と続けようとした瞬間に魔力反応。

その方向に視線を向けるとそこに魔法陣が浮かんでいた。

あれは……転送のゲートか！

「優斗くん、あれなに!？」

「誰かがこっちに転送してくるみたい」

一斉に身構える俺たち。光が強くなり、転送が終わるとそこに居たのは黒い魔導衣に身を包み杖を持った小柄な少年。

「時空管理局執務管、クロノ・ハラオウンだ！ その魔導師たち、詳しい事情を聞かせてもらおうか！」

クロノと名乗った少年、管理局の執務管らしい。

チツ……。面倒な事になったな、とりあえずフェイトはここから離れた方がよさそうだ。

管理局!？ どうする、フェイト？

フェイト、アルフ、あれはこちらで引き受けるよ。管理局と関わりたくないでしょ？

うん、そうだけど、大丈夫なの？

なんとかする。とにかくここから離れて！

うん、わかった

恩に着るよ

念話でフェイトとアルフにここを離れるように言い、フェイトたちは素早くここから離脱を始める。

「ッ！？ その黒衣の魔導師、待ちなさい！」

クロノが追跡しようとするがすかさず俺が立ちふさがる。

「邪魔をする気か？ 公務執行妨害で逮捕するぞ！」

そう言い放ち、鋭い視線と杖をこちらに向けてくる。管理外世界でそんな事を言っても大半は意味がないんだけどね。まあ、今の場合は正しいが。

「追いかけさせないよ、彼女の事情があるからね。どうしても言うのなら俺を倒して行くんだね」

「ゆ、優斗くん！？」

「大丈夫だよ、なのは」

うるたえるなのはに笑顔で安心させる。さて、彼も執務管だ。下手はしないよな？

「それにしても随分と幼い執務管だな。こんな子供に執務管をやらせる管理局とやらはほとほと阿呆らしい」

簡単な挑発もしてみる。執務管ならこの程度、受け流せなければ勤まらないと思うが。

「だまれっ！！！」

クロノ叫びと共に放つ光弾。速度は速くよけるのは簡単ではないだろう。だがよけられない事もないが、今は大人しく受けよう。それ以前に挑発に乗ってしまうあたり、まだまだだ

強い衝撃が俺を襲う。

痛ッ！！いきなりこの威力・・・・・・・・！！？ 普通の魔導師なら撃墜モノだぞ！？

「・・・・・・・・クロノ・ハラOWN執務管」

「ッ！？効いてないのか！？」

追撃でもう一発撃とうと構えるが、好き勝手できるのはここまでだ！

「俺は管理局囑託魔導師、ユウト・カミモリ。民間人への魔法攻撃は違法行為である！ よってクロノ・ハラOWN、貴方を拘束する！ 抵抗するならば撃墜もやむなしとなる。これは最終警告である！」

「な、なんだって！？」

クロノに依託魔導師の証であるカードを見せつける。

依託魔導師は管理局の指揮下に入らない限り民間人、または民間協力者として扱われる。

今の様な、どういう状況かわからない場合、相手がこちらの指示に従わない時は必ず相手に対して威嚇及び警告をしなければならない。

第一、彼が管理局員であればその証拠をこちらに提示しなければならないのである。

それを忘れて攻撃したクロノは立派な魔法犯罪者である。警察手帳もなしに警察官を名乗るのと同じだ。

いままで管理局の名が通った所でしか仕事をしなかったのだろうか？さて、どう出る？　クロノ執務管。

『そこまで！』

とその時、俺とクロノがにらみ合うこの場に響く女性の声。モニタ―が開き、綺麗な翠色の髪的女性が見える。

『私は管理局所属、時空航行艦アースラ艦長リンディ・ハラオウンです。こちらの執務管が犯した行為、嚴重な処罰ののち謝罪と賠償をさせていただきます。ですのでこの場は私の指示に従っていただけないでしょうか？』

「か、母さん！？」

『今は艦長と呼びなさい、クロノ執務管』

「はっ！　申し訳ありませんでした。しかし……」

『クロノ執務管、貴方が行った行為は立派な違法行為です。手順を誤ったのは解かりますね？』

「はい……」

ふう、とりあえず場が落ち着きそうだ。とりあえずフェイトも逃げれたようだしお芝居はここまでとするか。

「リンディ・ハラオウン艦長」

『なんでしょう？　ユウト・カミモリ君』

「さっきの事は目をつぶりますので、とりあえず事情の説明のほうを先にした方がいいのではないのでしょうか？」

『そうですね、分かりました。クロノ執務管、彼らをアースラに案内して。詳しい事情を聞きましょう』  
「……………了解しました」

そうして俺たちた地上で集まりは転送ゲートによってアースラに向かうのであった。

## エピソード14「貴方を拘束する！」（後書き）

ついに時空管理局が登場。でもクロノ扱いがひどいのは彼がいろんな意味で幼いからです。

私個人の意見としては彼は管理局至上主義みたいなので凝り固まっているイメージです。リンディさんはまともなのにどうしてああなっ  
た？

## エピソード15「君と手合わせ願いたい！」

「戦闘行動は完全に停止、搜索者の一方は逃走」

「追跡は？」

「多重転移で逃走してます、追いきれませんね」

「……………そう、とりあえず今は良しとしましょう。それにしてもクロノは後でお説教ね」

ふう、と私は艦長席で溜息をついた。あの子は賢い子だけどメンタル面で弱い所があるから心配だったのだけれど、案の定で下手を打ったわね。

「とりあえず、事情を聞く事にしましょう」

私はモニターを開きクロノに彼らをアースラへ案内する事を指示した後、依託魔導師リストを開いてユウト・カミモリの名前を探した。

「ん、あった」

ユウト・カミモリ

第97管理外世界「地球」出身の魔導師。

魔力ランクはB+。戦闘タイプは砲撃魔導師。

年齢は11歳。

使用しているデバイスは管理局と提携しているオーレリイズ社の試作品、アーマードインテリジェントデバイス「セイヴァーソウル」。アーマードデバイスとはストレージデバイス等の他のデバイスとの併用と使用者の強化と保護を目的としたバリアジャケットに纏う鎧のような形の新しいカテゴリーになりうる形のデバイスらしい。

どういう経緯で彼の手に委ねられたのかは疑問に思うところだが、  
任務履歴も魔力ランク相応のものを5件ほど解決と……。

「あら？」

データを読み進めて行くと追加データへのリンクを発見した。いつ  
たい何かしら？

そこを見ようとした時、警告と共にコード認証を求められた。

「閲覧制限？ どうしてこんな少年に？」

私、リンディ・ハラオウンのコードを入力して追加データを見た。

「これは……」

データの一部が塗りつぶされている。私の権限でも全てのデータを見  
る事が叶わないという事か。

それでも見る事の出来た情報に私は驚かされた。そこにはアレン執  
務管と同行しAランクやSランクの危険度の高い任務をいくつもこ  
なしている事が記載されていた。

詳しい報告は見る事ができなかったが彼のランクでこの任務は不釣  
り合いだ。

そう思っていたが、データを見ている内にそれも判明した。

彼はレアスキル保有者だったのだ。それも飛びきりレアリティが高  
いものを。

マジックブースト  
魔力増幅。

魔力を魔法として出力する場合、使用した魔力以上の力を持って魔  
法として発現させる能力。

このスキルによって彼の実質の魔力ランクはA。

それに約一年前に起きた「賢者の石事件」の関係していたようだ。それでアレン執務管と連絡が取れた訳か。アレン執務管も彼の事は友人とも言っていた。

その事件ではオーレリイズ社の社長令嬢、ティーナ・オーレリイズも関係していた。

それで彼の手にセイヴァーソウルがある訳か。

「なんだか面白そうな子ね、話を聞くのが楽しみになってきちゃったわ」

私はそう呟くとウィンドウを閉じ、彼らの到着を待った。

私、なのはと優斗くんたちは今とんでもない所に来ています。

それはなんと宇宙船の中なのです！

色々難しい単語が出てきましたが、優斗くんが簡単に説明してくれました。

それに魔法による転移、いわゆるテレポートって物も初めての体験でした。

場違いかもしれませんが緊張よりもワクワクの方が強かったの！

他にも私の住んでいる世界とは別の世界がある事なんかも教えてくれました。

“時空管理局”って所の事も教わりました。簡単に言ったらいろんな世界を飛んで回るお巡りさんがいる所みたいなんだそうです。それを聞いていたクロノくんがなんだか苦笑いをしていたの。

「ああ、いつまでもその格好だと窮屈だろう。バリアジャケットと



「ノーノがそれが素なの知らなかったんじゃないか？」

「え？ そんなことないよ。だって初めて会った時、この姿だったはずだから」

そ、そんなの知らないよ！？

「え！？ だってユーノくんはユーノくんは！ ふえ！？ ふええええええっ！？」

「とりあえず落ち着こう、なのは。はい、深呼吸。吸ってー吐いてー」

優斗くんに勧められて私は深呼吸します。

すー、はあー。

うん、少しは落ち着いたので。

「私が初めてユーノくんに会ったのはフェレットの時だったよ！？」

「あれ？ そうだっけ」

「まあ、小回りがきくから探索の時も変身したままだったしね」

それからユーノくんは今までの事を思い出すかのように考え込んで、思い出したのか話してくれました。

っていうか、口ぶりから考えて優斗くんは知ってたの！？

「あ、あははは、ごめんね。なのは。僕はこれが本当の姿なんだ、いままで黙っててごめんね」

「うん、もー！ 本当にびっくりしたんだから！」

「なのは、もう許してあげなよ、ユーノだって悪気があった訳じゃないんだから」

「……わかったの。でも！」



この人が艦長さん？

「どうぞ」

クロノくんから抹茶と羊かんが出されました。和風なの。

お互いの自己紹介の後、それから今までの起きた事を話しました。私だけでは全部言えないので優斗くんやユーノくんが補足してくれました。

それにしても優斗くん随分落ち着いてるの。私と二歳しか年が違わないのに大人のそぶり。

「なるほど、そうですね。今回のロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「はい、それで僕が回収しよう」と

「立派だわ」

すごく責任感の強いユーノくんは立派なの！

「だけど、無謀でもある」

だけど、それを責める言葉がクロノくんから言われました。

「一人では難しい、だから俺がユーノに協力を申し出たんです。なのはも自分の意思でジュエルシード探しに協力している。クロノ執務管、貴方に言われずとも分かっている事です」

「ッ！？」

優斗くんの言葉がクロノくんに刺さります。さらに優斗くんの言葉が続きます。

「それにしても随分と到着が遅れましたね。俺が要請したのは一月以上前。あれから何個のジュエルシードが暴走したと思っっているんですか？」

「それは」

「よその火を消していたから遅れました、なんて言い訳になりませんよ、クロノ執務管」

「クツ……!!」

なんだか優斗くんの言葉がとげとげしい感じがします。

「その事については申し開きしないわ。本当にごめんなさいね。よく今まで頑張ってくれたわ」

リンディさんが優斗くんの言葉に謝りと労い言葉をくれました。

「まあ、その事は置いといて。お分かりかと思いますがジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。使用方法によっては次元振動どころか次元断層すら生み出しかねない代物です。

さらにその密度も凄まじいの一言です。僅かな力の発露でも強力な力を発揮します。今回の暴走体でもジュエルシードの力の数パーセントしか使われてないと思います。それが複数個同時に完全発動なんてすれば、地球どころか周りの世界を飲み込みかねない。そう推測しています」

「ええ、私たちもそういう見解です」

そこで聞いた事のない言葉が出ました。

「次元断層？」

「次元災害の事よ。分かりやすく言えば地面が割れるくらいの大き

な地震つて表現が一番近いかしら」

「それが次元世界規模つて事になるけどね。俺たちの住んでる地球が日本だと例えると世界中の国に同じくらいの被害が出るつて解釈でいいよ」

私の疑問にリンディさんと優斗くんが答えてくれました。

それつて、すごいなんてもんじゃないくらい危ない事なの！

「そんな事、起させちゃいけないわ」

そう言いながら、ぼちゃんと抹茶に角砂糖をいれるリンディさん。ふえ？ 溶いた抹茶に角砂糖なんて入れちゃつてよかつたっけ！？

「なのは、気にしちゃいけないよ？」

と私の表情で気がついた優斗くんが小声でそう言ってくれました。そ、そうだよな、人それぞれだよな。

「これよりロスロギア“ジュエルシード”の回収については管理局が全権を持ちます」

「君たちは今回の事は忘れて元の世界に戻つて、元通りに暮らすと良い」

「え？」

「ふえ？」

リンディさん、クロノくんと続きます。それに思わず疑問をこぼしました。

元の生活に戻る……？

「優斗君はこれから私の指揮下に入りジュエルシードの回収を」  
「了解しました、リンディ艦長」

優斗くんはそのままジュエルシードの回収をするの？

「では、俺は独断で行動させていただきます」

「なっ！？ そんな事、許せる訳にはいかない！！」

優斗くんの言葉に食らいつくように反論するクロノくん。

「分かりました、許可します」

「か、艦長！？」

でもリンディさんはOKみたいです。

「どういう事ですか、艦長！」

「彼にはそれだけの権限がある。そう言う事よ、クロノ。それにアレン執務管も言っていたじゃない？ 彼の意見を取り入れてって」

「納得がいきません！」

何だがクロノくんが荒れています、それより私は気になる事がありません。

「どうして優斗くんはそのままなんですか？」

「それは優斗君が依託魔導師だからなのよ」

私の疑問に答えてくれた人はリンディさんでした。

依託魔導師？ そう言えばさっき、優斗くんがそう言っていたけど、  
どういうものなのかな？

「簡単に例えるなら管理局の人が警察官で、依託魔導師は民間の警備員って所だね。そうとはいつても管理局の試験を受けて合格した人じゃなければなれないものだけだ」

優斗くんが分かりやすく教えてくれました。

そうなんだ、だから魔法の事にも詳しくかつたし、私に戦い方も教える事ができたんだ。

「だから納得がいけないんです！ 彼のランクはB+、そのランクの依託魔導師が独断行動なんて許されるはずありません！」

とクロノくん。

でも艦長さんのリンディさんが許可しているのにどうしてそこまで？

「どうしてそこまで意固地になるんだ？ クロノ執務管」

「君はさつき黒い魔導師を逃がした。そんな君に独断行動なんて許せる訳ないじゃないか！」

「俺には俺の考えがあるし、俺は彼女の助けたい。だから俺は俺で自由に動けなきゃいけないんだ」

「それで納得できるものか！」

「だったら、どうしたら納得してくれるんだ？」

「君と手合わせ願いたい！ 僕が勝ったら大人しく僕らの言う事を聞くんだ！」

「俺が勝ったら俺が独断行動することを許す、と。いいでしょう、その勝負、受けます」

こうして、優斗くんVSクロノくんという事になったの。

## エピソード16 「少し頭冷やそうか？」

アースラ、魔法訓練室。かなり広い空間だ。  
俺とクロノはここに居る。

なのはやリンディ艦長たちはモニター室で観戦する事になっている。  
俺たちはこれから模擬試合と言う名の決闘を行う事になった。

事の発端は俺の独断行動の認可をクロノが反発した事だ。

どうもクロノは頭が固く管理局至上主義に染まっているようで、表  
での俺の魔導師ランクで能力を判断しているようだ。

魔導師のランクはあくまで目安で合って、状況や相性、戦い方によ  
ってはいくらでもどうとでもなる事など理解できないらしい。

その点に関してはリンディ艦長は柔軟な対応をしてくれたと言える。  
と言っても、リンディ艦長の権限なら俺の裏の活躍を閲覧できたか  
らだろうけど………。

「で、ルールは？」

「どちらかが負けを認めるか戦闘不能になれば決着という事にしよ  
う」

まあ、妥当だな。

「君はどうも勝手が過ぎるみたいだね、僕が節度というものを教え  
てあげるよ」

とクロノが言い放つ。

えーと、要約すると、

Bランク魔導師が調子乗ってるんじゃないわえ！ フルボッコにしてや

るから身の程を知れ！

という解釈でいいのだろうか？ いいだろう、こっちも本気ですよ。

「では、リンディ艦長に開始の合図をしてもらおう。リンディ艦長、いいですか？」

『ええ、まかされたわ。これよりクロノ・ハラウンとユウト・カミモリの模擬試合を始めす。両名、デバイスを』

「S2U、セットアップ」

「セイヴァーソウル、セットアップ」

俺は六角柱の水晶型、クロノ黒いカード型の待機状態のデバイスを即座にデバイスモードに展開する。

「それがアーマードデバイスか……。どういう物だろうと構わない、僕は君を撃つだけだからね」

「随分と自信があたりで、クロノ執務管。あまり俺を見くびらない方がいいですよ？」

「君は口が達者だね、でもあまり強い言葉を使わない方がいい。弱く見えるよ」

「そうですね、残念です」

ダメだ、こりゃガツチガチだ。なら、こちらの实力を見せつけるとしましようか！

『試合、始め！』

開始の合図が放たれると同時に俺たちは動きだした。

共に空中へ、空間を動きながら狙いを定め合う。

「ステインガーレイ！」

クロノの射撃魔法。弾足が早く高威力の直射型か、だがかわせない訳ではない。

俺は連射されるステインガーレイを回避しながら魔力を集中し、術式を組む。

「どうした、避けてばかりでは僕は倒せないぞ？」

絶え間なく撃ち込まれる魔法を回避し続ける。

俺は落ち着いて相手の力量を見る。身のこなし、魔法の撃ち方、共に執務管を名乗るにふさわしい実力だ。

「デイベインシューター」

即射するタイプではなく展開するタイプ。デイベインスフィアを三十六個生成し、クロノに向けて狙いを甘くして射出。

「その程度、簡単によけられるよ！ その数は感心するけど数撃てばいいものではないね」

配置は完了、後は斬り込むのみ！

ソードラックから柄を引き抜き魔力刃を展開する。

「その距離から近接武装かい？ 高速移動魔法でも使うんだろうけど近づけさせないよ！」

ブーストを吹かして加速。一直線にクロノに向かい距離を詰める。

そうはさせまいと動きを止め、弾幕のようにステインガーレイを連射するクロノ。確かにこれでは近づけられないだろう、普通の魔導

師なら。

こちらに向かってくるステインガーレイに対して一閃。それは俺にダメージを与える事無く散った。

「斬り払った、だとっ!？」

驚くクロノ。プロテクションするよりこうやって斬り払った方が楽と言えは楽だ。

と言っても砲撃魔法は斬り払えないから防ぐか避けるかの二択なんだが。

心が揺らいだ今が時だ。俺が張った罠を起動させる。

「ぐっ!？」

クロノの背中を襲う衝撃、俺が前に居るのに対して後ろからの攻撃。本来ならあり得ない事なのだが、俺はそれをした。

「デイベインスファイア!？」

後ろを振り返って更に驚くクロノ。だが、そう悠長もしてると次弾が当たるよ?」

「ぐあ!？ つ!？ ああっ!？」

上、下、横から次々に襲いかかるデイベインスファイア。種を明かしてしまえば簡単。

最初に放ったのは普通の射撃魔法のデイベインシューターではなく、そう見せかけたデイベインスファイアの射出だ。

「傲慢が過ぎたね、クロノ執務管」

避けたクロノはそのまま後ろの壁に当たったと勘違いしてしまい、空間に万遍なく配置されたスフィアに気がつかなかつたのだ。もつとも、俺に注視させるために近接武装を使ったり魔法を斬り払うなんて事をした訳だ。

こうなつてはもう遅い。プロテクションを張る暇を与えないように残りのスフィアを操作して着弾させる。

「格下だと思い込み相手の手の内で踊つてしまふなど執務管にあるまじき事です」

『Flash Move』

高速移動魔法で一気に距離を詰め魔力刃の間合いに入る。

「スライサーシフト」

『Slicer Shift, Setup』

スライサーシフトに移行。次の一手だ。

デバインスフィアが全弾命中しボロボロになったクロノだが、最後の抵抗のようにとつさに回避運動を取る。距離にして一分程だが本体には届かなくなつたな。

だが、斬りあげた剣筋はクロノのデバイスのコアを通る。ギィィィィィィン。

と甲高い音と飛び散る火花を伴つて斬り飛ばされた杖の先端。

「な、につ!?!」

苦悶の中での驚愕。今日のクロノは表情が豊かな事だな。さて、チエックメイトだ。

「少し頭冷やそうか？」

もう一步分踏み込み、斬りあげた魔力刃を返し、振り降ろして一気に斬り捨てた。

「うわああああっ!!」

クロノの悲鳴が響く。

一刀両断とはいかない、非殺傷設定だからな。だが、杖の柄とバリアジャケットはその対象外だ。

杖の柄は途中で切断され、黒のバリアジャケットも右肩から左下へ斬り裂かれている。

その一太刀でクロノは気絶。飛行魔法が途切れたため真つ逆さまに床へ向かって落ちていった。

さて、勝負はついたしクロノを連れてみんなの所に戻るとしますか。

俺はクロノを抱いて通路を歩いている。とりあえずメディカルルーム行きが先か？

少し歩いたところで向いからなのはたちが走ってきた。

「優斗くん!!」

「優斗! すごいじゃないか!」

賛辞をくれるのはとユーノ。それはいいがこっちはクロノを運ぶ方が先だな。

「リンディ艦長、念のためクロノをメディカルルームに運びたいのですが、案内していただけますか？」

「ええ、こっちよ」

リンディ艦長に案内されクロノを預けた後、俺たちは転送ゲートに向かっている。

「優斗君」

「なんでしよう、リンディ艦長」

「ありがとう、と言っておくわ。クロノに初めての敗北を教えてください」

「どういう事でしょうか？」

「あの子、執務管になってからより多くの任務に就くようになったのはいいのだけれども、クロノに敵う相手が居ない状態が続いて天狗になっていたのよね。その内、その隙を突かれて命を落とす事も在りえた。言って聞いて貰えばいいのだけど、それだけじゃあ本当の意味で理解する事は難しいわ」

「なるほど、だから俺とクロノの模擬試合を許可した訳ですか」

「まさか、完敗するとは思ってもしなかったのだけれど。でも、これで十分身に染みだと思っから、後でみっちりお説教すれば理解してくれるでしょう。あの子は賢い子だから」

リンディ艦長に都合よく利用された感が否めないが、まあいいか。これも人助けだと思えば。

「それにしても予想以上の性能ね、優斗君のデバイスは」

「まあ、色々とセイヴァーソウルには助けてもらってます」

『I am strong enough Jaarimassen,  
There is my master』

私だけの力ではない、主在っての私です、と言ってくれるセイヴァーソウル。

「ありがとう、セイヴァーソウル」

『You're welcome』

「仲がいいのね、素晴らしい事だわ」

そう話している内に転送ゲートに到着。

「あ、あの、リンディさん」

「なにかしら？　なのはさん」

「やっぱり私たちもジュエルシード集め、このまま続けたいです」

「僕も、このまま何もしないで待つてるなんてできません！」

「ユーノくん……」

リンディ艦長はなのはたちにこの事件から外れるように言っていた。やはり、なのはたちはこのままジュエルシードの回収を手伝いたいか……。

「次元干渉に関わる事件なの、これ以上民間人である貴方たちが関わっていいものではないわ」

「でも……！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょうから、今夜一晩ゆっくり考えて答えを見つけてほしいの」

「あ……はい……」

目に見えて気落ちするなのは。これ以上関わる必要性は皆無だ。ジュエルシードの回収は管理局と俺でできる。管理局が来たからサーチャーを使えば早く正確にジュエルシードをさがせるだろう。

でも、なのはたちに譲れないものもある。この事件をきっかけで知り合った、フエイトのために。

「リンディ艦長。もし彼女たちが協力を申し出た場合、俺の指揮下

に入ってもらおう事にしたいのですがいいでしょうか？」

「貴方たちは既にチームとして動いて居たわね。ええ、その時はお願いするわ」

「それと黒い魔導師の子、フェイトですけど、俺に任せてくれませんか？」

「……分かりました。ですが、彼女の行動次第で私たちも動きます。それは解かってるわね？」

「はい、理解しています。ではこれで失礼します」

それを最後に俺たちはアースラから海鳴市臨海公園へ転送された。時間はすでに夕日が空を茜色に染めている頃になっていた。

「今日は色々な事があつたな」

「そうだね」

「管理局っていうお巡りさんが来たり、優斗くんが魔導師の警備員だったり、ユーノ君が人間の男の子だったり」

「隠すつもりじゃなかったんだよ？　ただ、思い違いというか言う機会がなかったというか」

「それについては俺も同感だな、ごめんね、なのは」

俺とユーノがなのはへ隠し事していた事を謝った。隠すつもりもなかったのだが……。

「ううん、いいよ。ただびっくりしただけだから」

「そう言ってもらえると助かるよ」

俺はなのはにそう返す。

「ところで、さ。どうする？　前の生活に戻るか、それともこのまま魔法に関わり続けるか」

「管理局って所の人たちが来て、もう私の力が必要ないって言うけど、それでも私はこのままジュエルシードに関わっていくよ。ユーノ君の事もそうだけどフェイトちゃんを助けたい」

なのはの気持ちは聞くまでも無かったな。既に意思は固まっていたか。

「僕も最後までジュエルシードを探すよ。発掘隊の指揮を執ったのは僕だし、責任がある。もう、僕が居なくてもいいって言われても投げ出そうなんて思わない。」

責任感が強いユーノの事だこっちも気持ちを改めて聞く事もなかった。

「そっか、じゃあ、このまま俺たちもジュエルシードを探そう。管理局っていう助っ人ができたんだ、一気に残り全部探さそう」

「うん」

「がんばるの！」

さて、これで一段落ついた訳なのだ。

「さて、この後どうするか……」

「とりあえず、帰ろう？」

と、なのは。

「そうだな」

「うん」

こうして俺たちは帰路についた。



## エピソード17「信じていいんだよね？」

月が昇り、暗い部屋の中で私、フェイト・テスタロッサは悩んでいました。

この先、どうやってジュエルシードを集めるか。

時空管理局がやってきた以上、表だって行動すれば私やアルフが取り押さえられる恐れがある。もちろんタダでやられるつもりはないけどこっちは二人、あっちは組織。

抗いがたい事実は、私の道をふさぐ絶壁となって塞がってくる。

優斗となのはは管理局に連れていかれて事情聴取されても解放されるだろう。

私たちと違って優斗となのははこの世界の住人で一般人だ。

だけど、私たちは……………。

フェイト？

「きゃ！？」

そう私が思考に没している時、突然の優斗からの念話。思わず情けない悲鳴をあげてしまった。

「優斗からの念話だね、私の所にも来てるよ」

と、アルフ。

フェイト？ 大丈夫か？

あ、うん、大丈夫だよ。それより、あれからどうなったの？ 何かされてない？

それは、大丈夫。それで、さ。フェイトとアルフに話さないといけない事があるんだ

真剣な優斗の声。なんだろう、嫌な予感がする……………。

三人で誰にも聞かれない所で話したいから、どこかで会えないかな？

なら、家に来て。住所教えるから

ありがとう、すぐ行くから

しばらくした後、ピンポン、という呼び鈴の音が居間に響く。  
……………優斗が来たんだ。私は玄関に行き優斗を出迎えた。

「お邪魔します」

「うん、上がって」

そして居間に案内して座った優斗の前に紅茶を置いた。

「ごめんね、急に」

「ううん、いいんだよ」

優斗はさっきから難しい顔をしている。

何なんだろう、ここまで優斗が思いつめる話って。

「何だい話って?」

「……あの後、管理局の艦に呼ばれて、今までの事を色々聞かれた」

「うん」

アルフの言葉に優斗が答える。私はそれに相づちを打った。

「まどろっこしい前置きとか言わずに結果だけ話すよ」

「だから、何だってんだい?」

アルフの催促に優斗は信じたくない言葉を言い放つ。

「俺となのはは管理局と協力してジュエルシードを集める事にした」

「っ!?!」

「何だつてっ!?! あんた……!?!」

嘘……だよね?

「待ってくれ! ちゃんと説明するから!」

「事と次第によっちゃあタダじゃおかないよ!?!」

すごい剣幕で優斗に迫るアルフ。

「えっと、ね。管理局の時空航行艦のサーチャーなら迅速かつ正確にジュエルシードを探せる。だから協力して貰う事にしたんだ。あと本当ならこのまま抜けられるのはやユートなんだけど、本人の希望でそのまま続けるつもり。明日、正式に申し出をする事になっているんだ」

「そこは分かったよ、でも私とフェイトの事はどうするつもりだい?」

うん、一番の問題はそこ。私たちは時空犯罪者だ、管理局と一緒に行動できる訳がない。

「フェイトたちは素性を明かせない民間協力者として対処して貰うようにしたんだ。もちろん詮索はしない、って事も約束したから大丈夫だよ」

優斗の言葉はあまりにも突拍子もなく、信じられるような事じゃなかった。

第一、優斗みたいな子供が管理局をどうこう出来るなんて思えない。

「そんな事、信じられる訳ないよ！ あんた、私たちをバカにするのかい？」

「バカになんてしてないよ。もしフェイトとアルフが管理局に不利益な事をすれば向こう半年くらい俺が管理局に無償奉仕の刑って感じにならざる得なかったけどね」

ははは、と力なく笑う優斗。

ただの魔導師にそんな権限はない。何らかの形で管理局に取り計らってもらえらしたら……。

「……もしかして優斗は囑託魔導師なの？」

「うん。しかも特命のって付く」

「特命囑託魔導師だって!？」

私の疑問に答えてくれた優斗とその答えに思わず叫ぶアルフ。

囑託魔導師の中でも管理局へ食い込める特殊な囑託魔導師。それが特命囑託魔導師。

執務管と同程度の権限を持ち魔導師の質もそれに伴う、言わば囑託魔導師のエース。

「ただ、私とそんなに変わらない優斗がそれになれるなんてとても思えない。」

「特命囑託魔導師とはそれほど物なのだ。」

「嘘をつくのも対外にしな！」

「いや、本当だって……」

「そうやって優斗はカードを一枚取り出した。」

「優斗の顔写真とIDナンバー、それに管理局のマークも描かれている。」

「手にとって確かめてみたけど前に見たのと同じだった。間違いなく本物だ。」

「向こうとしては首輪を着けておきたかった、って感じなんだけどもね。」

「首輪だあ？」

「どっという事なの、優斗？」

「カードを返して、優斗の言葉に私は質問した。」

「特別依託魔導師に与えられる権限には管理局の任務に従事する義務と責任がある。」

「首輪と称するなら確かにそうかもしれない。」

「ねえ、フエイト。“賢者の石事件”は知ってる？」

「うん、知ってるよ。」

「首謀者を討ち取り、事件解決の決定打となった魔法、ジャッジメント・レイ。それを撃つたのは俺なんだ。」

「えええっ!?!」

“賢者の石事件”の首謀者、ガーランド・ストラフィールド。管理局の空軍少将でありながら管理局に反旗を翻した人物だ。

それを討ち取ったのはロストロギアである賢者の石の力を借りて撃った砲撃魔法、その破壊力は時空航行艦の主砲にも匹敵するそれは、後にジャツジメント・レイと呼ばれた。

管理局が公開した情報ではそれを撃ったのはアレン・ヴィートリハ執務管だ。

その事を優斗に話してもう一度聞いてみた。

「賢者の石の力は確かに借りたけど、欠片だったから本体を持つガーランドには届く魔法は個人では無理だね。アレンさん程の魔力の持ち主でも絶対量が足りなすぎる」

それは確かに。時空航行艦の手法に匹敵する砲撃を一個人が撃てるなんて事は在りえてはならない。もし、その人物が敵に回った時、管理局本部がその砲撃で焼き払われかねない。

「俺の切り札、過剰魔力超収束砲撃魔法“サテライトキャノン”。

それがジェツジメント・レイの正体なんだ」

「でも、優斗から感じる魔力はそんなに強くないじゃない。バカスカあんな魔法撃つてて疑問に思ってたけど……」

優斗の言葉にアルフが疑問を投げかけた。

そう、優斗から感じる魔力は位置的に言えば中位。探せばどこにもいるような魔導師だ。

私も同じことを考えていた。実際に戦ってみて分かる、その実力は中位を超えている。

「それは俺のレアスキルが関係するんだ」

「レアスキル？」

「俺のレアスキルは魔力増幅。マジックブースト 魔力総量はB程だけどA並みに魔法は使える」

「へえー、それは珍しいスキルじゃないか。なるほど、納得だよ」

レアスキル。魔導師の中でも特異で先天性の素質の事を指す事が多い。

発動させる魔法全てに電撃効果が付与される私の「電気」の魔力変換資質もレアスキルに含まれる。

「まあ、これには決定的な弱点があるだけだね」

「弱点？」

「そう。サテライトキャノンは俺一人だけじゃ絶対に使えないって事。外部から魔力を供給しない限りって条件が付くけどね」

「そりゃあ、弱点というより欠点じゃないのかい？」

「まあ、そっちの方が意味合いにはあってるか。うん、サテライトキャノンは欠陥魔法だ」

そう、いくら威力が高くても使えなければ意味はない。優斗の言うサテライトキャノンは欠陥魔法だ。

だけど、それを克服する方法がある。優斗から教わった特殊な魔法。それが答え。

「そのための魔力譲渡魔法、マイクロウエーブって事なんだね」

「そう言う事。さらに一人二人の魔力でも足りない。あの時はアレンさんやティーナにニコル……、協力を申し出てくれた人たちと賢者の石の欠片があったからアレほどの出力で撃てたんだ。そうやすやすと撃てる魔法じゃないんだ」

知らない人の名前が出て来たけど、口振りからして優斗の友人の様

だ。

「管理局に所属していない魔導師が条件が厳しいとは言えそんな魔法が使えるんじゃないやあ、放つては置けない訳かい。それで特例囑託魔導師にさせられたって寸法かい？」

「管理局からしたら使い勝手は悪いが一発逆転の切り札持ちの駒って感じだろうね。持っていて損はないだろうって考えたと思う」

「駒って……」

自虐気味に笑う優斗。きつといるんな事を見て来たんだろう。

「って、ちょっと待ち、優斗。そんだけの魔力を一人で扱いきれるものじゃないよ!？」

「それは、俺の体質というより母さんの家系が関係してるみたい。

便宜上、レアスキルで“月の器”って呼んでる」

「月の器？」

聞いた事のない単語だ。

「内の母さんが月読っていう家系で月の光を浴びて先を占う事をしていた人たちだって聞いた。そのせいか月齢によって魔力が増減したり一時的に自分のキャパシティを超える魔力を扱えるんだ」

「なるほど、二つのレアスキルあって初めて成り立つのか。ほんと使い勝手悪い魔法だね、サテライトキャノンって」

「うん、でもその分、威力は申し分なし」

優斗はそこで一旦今の話を終え、これから今後の行動について話す事になりました。

「そう改めて言っても、いつも道りなんだけどね。その時は俺の指

揮下に入る、形だけのものだけだね。まあ、今までと変わらずに俺もものはもユーノも、フェイトとアルフの味方だよ」

優斗はそう言っつて優しく笑つてくれた。

「俺の話はこれで終わるけど、質問とかある？」

「ううん、大丈夫だよ」

「私もフェイトと一緒にだよ」

「分かった」

優斗は目の前に置かれた飲み物を飲みほして一息ついた。

「時間も時間だし、もう帰るね」

「……………ねえ、優斗」

優斗は帰るために立ち上がった時、私は優斗を呼び止めた。

「優斗の事、信じてもいいんだよね？」

「もちろん。フェイトは俺が守るよ」

私にそう返してくれた優斗。その目は真っすぐ私を見て揺るぎない意思を伝えてくれた。

「私だつて負けてないよ？ フェイトは私のご主人様だからね！」

胸を張つて対抗するアルフ。

そんな二人の掛け合いを見て思わず笑いをこぼしてしまう私。

「……………ありがとう、二人とも」

支えてくれる人が居るって事がとても心強いと感じた。  
アルフが居て、優斗が居て、なのはたちが居る。だから自信が持てるよ。

待ってて、母さん。すぐにジュエルシードを持っていくよ。

エピソード18「状況を開始してください！」（前書き）

PVが20000を超えました。皆さんありがとうございます。

これを励みにこれからも頑張っていきます。感想なども気軽に書いてください、お待ちしております。

それでは本編へどうぞ。

## エピソード18 「状況を開始してください！」

「と言う訳で、本日0時を持って全クルーの任務はロストロギア“  
ジュエルシード”の搜索と回収に変更されます。

また、本件においては特例としてジュエルシードの発見者であり結  
界魔導師でもある、こちら

「はい、ユーノ・スクライアです」

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん

「た、高町 なのはです」

どうも。現在、アースラの会議室に居る上森 優斗です。

先ほどまでアースラクルーへの現状の説明を行っていて、今はリン  
ディ艦長の司会なのはとユーノの紹介になっている。

二人ともガチガチだな、と思いつつそう言えば俺もこんな感じだっ  
たな、と懐かしんでいる所です。

「それと事件発生からこの件の指揮を執っていた囑託魔導師の

「ユウト・カミモリです」

「彼には特別に独断行動が許可してあります。彼と今は居ませんけ  
ど、彼の伝手の魔導師及び使い魔、以上の者が臨時職員として任務  
に参加します」

「よろしくお願いします」

そうして俺たちは声をそろえてアースラクルーに挨拶を済ませる。  
表情を見る限りみんな快く了承してくれているようだ。

「……………」

一人、険悪のオーラを纏った人物、クロノ・ハラウンを除いて。まだ俺の単独行動に納得いかないのだろう。あれからリンディ艦長からこっ酷く叱られたはずだから今度やればちゃんとした戦いになるだろう。

あの年で管理官をやるだけの実力者だ。あの時は慢心が過ぎたからそこに付け入る事が出来ただけなのだから。

ん？ 赤くなつて目を背けた。

さっきの視線をたどると笑顔のなのはがいた。ああ、そう言う事かなるほどなるほど。

クロノにとって、なのはがタイプなのか。応援しない事もないがお付き合いするために彼女の父親と兄を説得するのは骨が折れるぞ？ 今回の事ではらく家を空ける事を説明したら殺されそうな怒気をぶつけてきましたし。

なのはがいなければ即死だったな。うん。

話がそれた。

その後、俺たちはアースラのブリッジに移動。リンディ艦長は艦長席に座りオペレーター達に指示を出している。

「じゃあ、こちらからジュエルシードの特定をするわ。場所が分かつたら現地に向かつてもらいます」

「はい」

「了解です」

さて、管理局の登場によりジュエルシードの搜索がかなり強化され暴走前のジュエルシードを発見できるようになったはずだ。これで随分と安全にジュエルシードの回収ができるな。

「艦長、お茶です」

とアースラクルーの筆頭のエイミィがリンディ艦長に湯呑でお茶を  
持ってきた。

本当にこの人は和風のものが好きみたいだな。地球出身の魔導師は  
そこそこ居るようだからそこからの伝手なのだろうな。

「ありがとう」

と言ってお盆に乗った小瓶から大盛りで白い粉末をすくい上げ、自  
然な流れで湯呑に入れた。それも二杯も。その後、ミルクを入れて  
かき混ぜていたから、さっきの粉末は砂糖で湯呑の中は紅茶か？

「ん。ふう……………」

と一口飲んで気を落ち着かせるリンディ艦長。

……………。

相当な甘党なようですね、リンディ艦長。

なのはも俺と同じように啞然とした表情を浮かべている。

……………なんだかなあ。

「そう言えばなのはさん、学校の方は大丈夫なの？」

「はい、家族と友達には説明してありますので……………」

……………もうそろそろ、なのはの家族や友人に魔法の事とか本  
当の事を説明しなきゃいけないさそうだな。

それから。

今、俺たちの目の前にはオレンジ色の巨大な鳥がいる。今回のジュエルシードの暴走体だ。

巨鳥はユーノのチェンバインドで体を拘束され、それから抜け出そうと必死でもがいている。

「捕まえた！　なのは！」

「うん！」

『Sealing Mode , Set up』

ユーノの声に即座に応えたなのはレイジングハートをシーリングモードに移行。封印に取り掛かる。

なのはの放つ光の帯は暴れる巨鳥を捕え、封印を開始する。浮かび上がった数字は？。

『Standby Ready』

「リリカル！　マジカル！　ジュエルシード、シリアル？！　封印

！」

『Sealing』

桃色の魔力光に包まれジュエルシード暴走体は封印され、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれていった。

『Repeat , Number eight』

さてこれで終了だな。

『ユウトさん、フェイトちゃん、アルフさん、なのはちゃん、ユーノ君、状況終了です。ジュエルシードNo.8無事確保。お疲れ様。ゲートを開きますからそこで待っていてください』

「はい」

と、アースラから通信。しばらくして俺たちの前にゲートが解放される。

俺たちはそれに乗り、アースラへと転送されていく。

アースラのサーチャーよって発見されたジュエルシードは五つ。

フェイトが確保したシリアル？、シリアル？。

なのはが確保したシリアル？、シリアル？、シリアル??。

残るジュエルシードはシリアル？、シリアル？、シリアル？、シリアル？、シリアル??、シリアル??の計五つ。

「フェイトちゃん、援護ありがとうね！」

「ううん、いいんだよ。それにユーノの拘束魔法もすごい強度だね」

「さすが結界魔導師つてところかい？」

「なんか褒められると照れるなあ」

「まあその分、攻撃はさっぱりだけどね」

「それを言わないのが約束つて物だろう?!」

と談笑しながら俺たちはアースラの艦内をブリッジに向けて歩いていく。

ここしばらく俺たちはいつジュエルシードを発見されても良いようにアースラで生活している。

俺は別になれてるから今更何とも思わないがなのは少し興奮気味だったのを覚えている。

修学旅行気分、って表現すれば一番しっくりくるだろうか？

「私ね、フェイトちゃんと一緒に居れてすっごく嬉しいよ！」

と、なのは。

「うん、私も嬉しいよ、なのは」

そう返すフェイトは柔らかく微笑んだ。

「背中を預けて戦うってのも良いもんだね」

「そうだね、アルフ。こんな事になるなんて夢にも思わなかったよ」

望むならこのまま。そう思っていると同時にそうならない事を知っている。

「それにしても本当に何もしてこないね、管理局のやつら」

「そうだね。優斗ってすごいんだね」

「あんだ、一体何者なんだい？」

アルフとフェイトにそう言われる。

「俺は何者でもなんでもない、ただの中堅の魔導師さ」

「優斗のレベルが中堅だったら、ほとんどの魔導師が大分低いレベルになるよ？」

「俺はそんなつもりなんだがなあ」

そんな会話をしながら進む。

管理局って言うよりリンディ艦長の手腕かな。簡単な質問はされたけど深く踏み込んでいない。

もうそろそろ時が来る。全てのジュエルシードが出揃えば現れるだろう黒幕。

恐らくはプレシア・テストロッサ。フェイトの、母親。

これはフェイトが越えなきゃいけない壁だ。

……俺はその後押ししかできない。  
内心に感じる己の不甲斐なさを噛みしめているとブリッジに到着。  
中に入り報告を済ませよう。

「只今帰還しました」

「お疲れ様、素晴らしい手際だったわ。このまま皆、内に欲しいく  
らい！」

「そこら辺は本人と、要相談と言う事で。所でどうです？ 残りの  
方は」

「ゼーんぜんダメ。海鳴市周辺を探しても見つからないわ」

帰還を告げた俺はリンディ艦長にジュエルシード探索の具合を聞いて  
みたが帰ってきたのは思わしくない答えだった。

「地上での搜索はあらかた終わって、もう無いとしたら……」

「考えられる、残り六つのジュエルシードは」

クロノとリンディ艦長と続く言葉。

「海の中」

「だろうね」

それに応えたのはフェイト。俺はそれに同意する。

「そうね、エイミィ。搜索範囲を海鳴市近郊の海に絞ってちょうだい」

「了解しました、艦長」

先の方針が決まり、俺たちは待機を命じられ休憩に入った。

そしてアースラに乗艦して十日目。  
トレーニングを終えてアルフが小腹が空いたという事で食堂でおやつタイムと相成った。  
食堂、といっても殆どが自動化されているからここには俺たちしかない。

「魔力の運用が大分うまくなったね、なのは。才能があつたとしても、この短期間でここまで成長するとは思ってなかったよ」

「優斗くんの特訓のおかげなの！」

「少し前まで魔法を知らなかったなんて思えないくらいだよ」

「敵に回したくない程だね、まったく」

ユーノの賛辞に照れるのは。フェイトやアルフも同意見だ。

「にしても、管理局には悪い事してるなー」

と俺は思わず呟いてしまう。

「まさか、ジュエルシードが全部見つかったら、皆でフェイトのお母さんに会いに行くと思ってるなんて。下手にばれたら捕まるよな、これ」

「優斗が考えた事だよ、それ!？」

ユーノの突っ込みが入る。

そうなのである。ジュエルシードを全て集め終わったら皆でフェイトの母親に会いに行き話を聞こうという算段になっているのだ。  
かなり黒に近い灰色の行為だが、フェイトを助けになりたいというのは皆の総意だ。

ジュエルシードは使い終わったらユーノを介して管理局に渡す事に

している。

フェイトからジュエルシードの使い道を聞いてみたけど聞かされてないようだ。

それでもフェイトの事情を聞いて協力を申し出てくれたなのはやユーノはお人好しなんだろうな。

まあ、ユーノは俺が説得したんだが。

「ほんと、ごめんね。迷惑かけて……」

「ううん、良いんだよフェイトちゃん。困った時は助け合うのは当然なの！」

「ありがとう、なのは」

それからしばらく談笑を続けていた所に突如鳴り響く警報。

『エマージェンシー！ 搜索区域の海上で大型の魔力反応を感知！』

「皆、行こう！」

俺の号令で皆が立ち上がり駆けだしていった。

セットアップを終えた俺たちはブリッジに集まっていた。

海鳴市近郊の海の上はまるで怪獣大決戦もさながらの状態であった。

「ふえええ！？ 何これ！？」

あまりの事に戸惑うなのは。無理もない、こんな状況を誰が予測できただろうか？

ジュエルシールドの暴走体が三体、しかも暴走体は今まで見たことがないほど巨大だ。全長五十mをゆうに超えている。暴走体の形状からして取り込んだ生物はイカ、カサゴ、ヒトデだろう。

イカの暴走体は、イカを巨大化させ禍々しく変貌している。巨木の丸太のような紫の触手をうねうねと動かしている様はエイリアンを想起させる。

カサゴの暴走体は、赤黒く、刺々しく変化している。大きさは一番小さいがその分縦横無尽に海を泳いでいる。その速度を捕えるのは難しいだろう。

ヒトデの暴走体は、一番の変化を起こしている。体の中心と足の先の方に青い結晶体があり、そこから無作為に射撃魔法らしき光線を撃ち散らしている。

既に結界は張り終わり、海鳴市には影響は出ないだろうが、このまま放っておけば確実に結界と突破して街を襲うだろう。

「今までに類を見ない状況です。皆、気を引き締めて事に当たってください」

リンディ艦長の忠告に了承を取る俺たち。

確かに今回は骨が折れそうだ。むしろその程度で済めば良いぐらいか？

「フェイト、なのは」

俺はフェイトとなのはに目を向ける。

「うん、大丈夫だよ、優斗」

「踏ん張りどころってやつだね！」

あまりの状況で気が引けているかと思えばやる気に満ちている。他のメンバーも同じだった。士気は上々。あとは実力を発揮するのみ。

「任務の内容はジュエルシードの暴走体の封印。そして、皆が無事に帰ってくる事です。健闘を祈ります。それでは状況を開始してください！」

リンディ艦長の発令と同時に俺たちは海鳴市の海の上へと転送された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6477v/>

---

魔法少女リリカルなのはX

2011年11月21日23時47分発行